

ドイツの教育研究の現況

— 1994年の研究者訪問と学会参加からみた —

宮 崎 俊 明

(1996年10月15日 受理)

Trends in der erziehungswissenschaftlichen Forschung in Deutschland
— Einige Betrachtungen aufgrund von Fachgesprächen und Tagungen in 1994 —

Toshiaki MIYAZAKI

も く じ

はしがき —研究滞在の概略—

I. 研究者訪問

- 1 : ブランシュヴァイク工業大学とホーフ —地方大学の自力と魅力—
- 2 : ベルリン —パラダイムのるつぼ— ; 2 1 : ベルリン工業大学とヘンドリックス —教育研究の学・産・官の融合— ; 2 2 : 自由ベルリン大学 —ヴルフ, レンツェン—ポスト構造主義の拡充と変容— ; 2 3 : フンボルト大学のベンナー —ドイツ教育学の再構築へ—
- 3 : 旧東独大学の新生 —旧西独からの新教授たち— ; 3 1 : ポツダム大学のシュミット —新教育の教育史— 3 2 : マグデブルク大学のマロツツキ —教育哲学と教育的伝記研究— 3 3 : イエナ大学のフリートリヒ —ベスタロッチの CD-ROM テキストと最近スイスでの研究
- 4 : 転換に直面した旧東独の教育研究者たち —ドイツ民主共和国教育学アカデミーのゆくえ— ; 4 1 : フンボルト大学のアイヒラー —シジフォスの石— 4 2 : K教授 —抵抗か弁護か— 4 3 : ブランデンブルク州立教育研究所のエッガース —過去のない若手の事例— 4 4 : 「科学フォーラム：教育と社会」—過去の残像と転進の試み— 4 5 : 教育学アカデミー (APW) 元総裁ノイナー —自己批判と自己主張— (インタビュー)
- 5 : シュールプフォルタ校 —伝統的名門ギムナジウムとニーチェ—

II. 学会・会議参加

- 1 : マグデブルク大学教育史・比較教育学講座 国際コロキウム：「伝統と革新の間の社会転換期の教育学」 —東欧と西欧の仲介点としてのマグデブルク—
- 2 : ドイツ教育学会教育人間学研究会秋季大会「アイステーシス・エステティーク [知覚と美的感覚]」 —教育学の審美的転回—
- 3 : ドイツ教育学会教育哲学学会秋季大会「形成の哲学」 —ポスト・モダンの教育哲学—
- 4 : ドイツ教育学会幼児期教育学会秋季大会「こども研究 —現代の人間学, 教育学, 社会化の諸理論からみたこども研究—」 —新旧両ドイツの研究の断面—

- 5 : ドイツ教育学会(DGfE)系秋季3大会の総会 -学会組織の形成とテーマ決定-
- 6 : ポツダム大学教育史講座 「レカーンの教師ブルンスの没後200年記念研究コロキウム」-教育史研究大会と地域との連携-
- 7 : ベルリン日本文化センター 国際シンポジウム「学習文化の構築 -日本の幼児期の比較展望-」-教育の国際評価の戦略と視点-
- 8 : ドイツ生活救済連合精神障害部門シンポジウム「ドイツ語で話す... -外国籍の精神障害の子とその親のためのマールブルク対話集会」 -教育運動の最前線-
- 9 : ドイツ青少年研究所「転換するヨーロッパ -家族はいま? -親の態度の東欧・西欧比較-」-研究のヨーロッパ的視座と大学外広域化-

は し が き -研究滞在の概略-

1994年6月から11月まで、ドイツ学術交流会(DAAD)の招待外国人研究者になったのを機に6ヵ月間ドイツに研究滞在をした。このような比較的長い期間は、主としてマールブルクにいた82〜83年のDAADと88年の文部省の場合に続き3度目だが、89年のベルリンの壁崩壊後では初めてだった。研究計画としてはここ数年来のとりくみの補充や展開のため次のように設定した。1)ペスタロッチの読書ノート研究(拙著 Pestalozzi und seine Lektüre, 1992)の補充と1996年1月のスイスでのペスタロッチ生誕250年シンポジウムでの招待発表の準備 2)旧東独教育の後退と変貌(拙論「東ドイツ教育の終焉 I〜III」鹿児島大学教育学部研究紀要 42, 1990, 44, 1992)のための資料収集と関係者・機関訪問 3)現代ドイツ教育理論の動向把握 4)ドイツの学校建築論調査(拙論 Schulbau und Schubaudiskussion in Japan, in: Bildung und Erziehung, 1994/1) 5)大学入学前の高校生意識の日独比較(拙論「進学準備下の高校生と学校」鹿児島大学教育学部研究紀要 45, 1993)。このうち4)は行政当局からの資料収集の限界のため中断, 5)はドイツ教育学会(DGfE)の「倫理コード」でもいうように、いわゆるデータ保護の問題があり、たとえば学習ストレスのアンケート調査には、生徒、担任教員、校長、行政当局、親の会の承認も要し、実施は不可能でないが、短期間では容易でない、というクラフキ(W.Klafki, 以下、すべて敬称略)の助言で滞在中の実施は取り止めた。

まず、2回3週間をホーフ(D. Hoof)のいるブランシュヴァイク工業大学に滞在、あわせてその近郊のヴォルヘンビュテル・アウグスト公園図書館などを利用した。次のベルリン滞在中は、その地区の大学や研究機関の共同ゲスト・ハウスで、78世帯分、年間40〜50か国、800〜1,000人が利用するという「ベルリン国際科学出合いセンター」(Internationales Begegnungszentrum der Wissenschaften Berlin)に約4ヵ月間入居、ベルリン工業大学、自由ベルリン大学、フンボルト大学、ポツダム大学、旧ドイツ民主共和国教育学アカデミー(APW)の資料・蔵書をもとに94年3月に開館された教育史研究図書館(BBF)などに通った。最終滞在地マールブルクでは学会シーズンのため半分以上を留守にしていた。また、7月中旬にはイエナ大学のハウスに1週間留まった。

なお、その一年余り後の96年1月には文部省国際研究集会派遣研究員としてチューリヒに10日間

宮崎：ドイツの教育研究の現況

滞在、さらに同年5月から6月にかけて中部ドイツのニーダーザクセン州文部省の招待研究者として同州のヒルデスハイムとブランシュヴァイク、ベルリン、マールブルクに3週間の研究旅行をした。スイスの場合は、ペスタロッチ生誕250年シンポジウムでの「ペスタロッチの民俗的関心」¹⁾の発表と、番外コロッキウムでの「アジア圏のペスタロッチ」の小報告のためであった。旧知、新顔との出会いを喜びながらも、研究の手法、レベル、ペスタロッチの評価と受容でのスイス・ドイツ間の差、日本のペスタロッチ研究の経過と現状に思いを致した。ドイツでの場合は、初開催の“EXPO 2000”に向けた教育のテーマ・パークに設定されたフォルクスワーゲン社経営コミュニケーションセンターでの会議に招待され、そのセッション「世界の教育風景」にアフリカのカメルーンからの文化研究者、ロシアの教育アカデミーの事務局長、アメリカのヘッド・スタート協会の会長、パリからのユネスコ代表に交じって、日本からも報告するためだった²⁾。

このふたつを合わせると、ドイツ教育学会(DGfE)系の秋季大会3つ、比較教育・教育史関係の臨時的記念大会3つ、それに幼・少年期、障害者、家族問題、メディア関係の国際集会4つの、あわせて10の学会ないし会議に出席したことになる。ただ、この10のうち参加者リストには名はあるが、発表は2件であった。また、ここ10～15年来の会員であるドイツ教育学会、同教育史学会、ドイツ18世紀研究学会の3つの定期大会には滞在時期や日程の都合で出席できなかった。なお、これらの場で日本以外でアジアからの参加者はチューリヒのペスタロッチ・コロキウムのみ、日本からの発表者ないし参加者がいたのはベルリンの日独教育比較シンポジウムのみであり、ペスタロッチ・シンポジウムは発表者以外にはいなかった。

所期の目的のためには研究者訪問にも努めた。94年の約30人のうち約20人には2回以上会ったが、なかでも世話になったり刺激的だったのは、旧知ではブランシュヴァイクのホーフ、ベルリンの W. Hendricks, Ch. Wulf, D. Lenzen, J. Schiller, ポツダム大学の H. Schmitt, ゲッチンゲン大学の Ch. Rittelmeyer, イエナ大学の L. Friedrich, ニュルンベルク大学の M. Liedtke, マールブルク大学のクラフキ, H. Stübiger, B. Willmann らである。手紙では旧知ながらはじめて訪問したのは上のフリートリヒ、マグデブルク大学の、教育哲学会の W. Marotzki, R. Golz であり、この3人とも2回以上会った。旧東独の研究者には W. Eichler ほかの数人にそれぞれ複数回会った。一度きりだったのが、ドイツ教育学会の前会長でフンボルト大学の D. Benner, ブランシュヴァイク工業大学の H. Kiper である。なかでも東独教育学アカデミー元の総裁 G. Neuner は興味深く、最近ようやくその面談の録音を起こし22枚の原稿化をおえた。

96年の冬のスイスにおけるペスタロッチ・シンポジウムでは、28人の招待発表者のほとんどが同じホテルに投宿し、旧知やその名を論著で知る人との出会いがもてた。これに対し、初夏のドイツの場合では、たしかに参加者も、会場も、テーマも学会大会とは違ってことごとくが新しく、その運営の見事さや気配りはかえって通常の学会大会よりもくつろげ、印象深く成果はあったと思う。そして会議後は再会という形でマグデブルク大学にゴルツ、フンボルト大学に H.E. Tenorth を、

ベルリン工業大学に W.-D. Greinert を、また、初めてヒルデスハイム大学に E. Cloer を訪ねた。ここ3回の渡航機会で2回会えたのはフリートリヒ、ヘンドリックス、テノルト、3回とも会っているのはホーフ、スチュービヒ、それにベルリンの教育史研究図書館の実質的な館長ビーアヴァーゲン (M. Bierwagen) だが、これらはおのずから以下本稿の内容やわく組とも重なる。

また、わずか1～3回ながら、先方の誘いやこちらの希望で次の大学の授業に出る機会があった。ブランシュヴァイクで1種(ホーフ)、ベルリンで2大学4種(自由大学のドリンクとハーシュ；工業大学のヘンドリックスとグライネルト)、マールブルクで1種(クラフキ)である。ほかにブランシュヴァイクでの学生の実習授業(ホーフ)、旧東独地区の教員研修ゼミナール(シラー)、チューリヒの小学校での通常の授業を各1回参観した。

大学ハウスでの暮らしは、現地の市民社会と距離のある居住区(ゲッター)、コロニーになる面なしとしないが、経費、家事・掃除、転居などの利便さ、なにより言語、文化、国籍、専門分野などの違う研究者やその家族と日常的に会える楽しさがある。ベルリンでは単身だった1ヵ月間、モスクワとリトアニアからきた核物理と機械工学のひとと同室、さらにそこにインドの物理学教授も加わり、寝室以外を共同利用した。近時のドイツの学術政策と外国人研究者の本国事情の反映か、宿舎でも中国と旧ソ連からのひとが多数派になった。マールブルクのハウスでは今回はじめて韓国からのひとに出会った意味も大きい。アジア系のひとたちはとにかく元気がいい。しかし、ドイツの学術政策や市民権と外国研究者の本国事情との間に断層もある。あるとき、ドイツ側が招待した中国人研究者に滞在期間をめぐって中国側在外交館の「介入」があったとしてドイツ連邦議会で問題化された新聞報道を読んだが、事実、似たような場面をみたりもした³⁾。

一方、「国際化」や経済的な豊かさで近年とみにふえている日本からの中・高年研究者のなかには途中で帰国したり、神経疲労を示したひとの噂や現実は一、三にとどまらなかった。生活・研究環境やことばなど一定程度の条件を欠くために困窮し、ついには自国への屈折した「自信」や他国への「反感」すら生みかねない。こちらは身分といえば、日本で重みのあるものとされる文部省在外研究員でも先方の客員教授でもない一研修者であり、一応はむこうの「ゲスト」だが、むしろドイツ人研究者がいう「研究旅行者」であった。出張や派遣が個人研修などに優先するとみるわが国の尺度はこの地では必ずしも通用しない。自己反省をこめていえるのだが、高齢化する文部省在外研究員や所属大学の「格」よりはそれと関係のうすい若手研究者や有能な女性などが外国でめだつ日本人となる現実には直視すべきだろう。また、妻と4ヵ月、そのうち大学生の二人の娘とも2ヵ月ともにいたが、このように単身でない方が信頼されるし、つきあいの輪もひろがる。3つの学会大会には妻も教育学関心者として同行した。

滞在中の便宜と効率は、4ヵ所のゲスト・ハウスにもよるが、売り手と買い手とが集まる青空市で入手した中古のクルマ、備え付けのデンワ、もってきたワープロのためでもあった。この3つ、つまりスピードとアポイントメントとレターがもつ効率、拘束、責任の度合いの高さはセットだか

宮崎：ドイツの教育研究の現況

らである。ただ、クルマでは駐車場や駅で警官の検問を数回受けたが、すべてが旧東独の地方だったのは、かつて統一前に後部座席まで開けさせられたほどでなくてもむこうの職務心性やこちらの外国国籍、加えて治安問題のせいだったかもしれない。それに事故もともなう。西の田舎道でこちらが先方の割り込み違反車に追突、幸い、双方に人身に傷害はなくこちらは廃車にしたが、そのさい、警察、保険会社、自動車工場の公正かつ迅速な処理には感心した。

以下では上の学会・会議への参加と研究者訪問をとおしてみた教育研究の主題動向や問題の所在を日本の教育学や、教育の外国受容や国際化を念頭において整理してみたい。ただ、96年のペスタロッツ記念の教育史関係とドイツ万博のメディア関係の大会の2件は、前者は4月に刊行済み、後者も原稿も提出済みである。これらにはなにより関心の大きさもあり、本稿では多くをふれず、詳細は別の機会を期したい。なお、本稿は、「教育学研究」に84年と87年に掲載された拙稿2編とその視点を共通にしている⁹⁾。

I. 研究者訪問

1：ブランシュヴァイク工業大学とホーフ —地方大学の自力と魅力—

5月31日にブランシュヴァイクに入った翌日、ホーフの教室の研究スタッフ、研究・教育補助員、秘書など10人が、学科図書室に花、ワイン、サンドイッチ、ケーキをもちよってきた。かれの後継として今学期から授業をはじめた女性教授キパーの40歳誕生日とわたしの研究滞在とをかねての集まりである。彼女には花束が贈られ、わたしには鍵が貸与された。これは研究室、図書室、ガレージ用の鍵であり、夜間や休日にも自由に出入りできるためのユーモアと実質をこめた「セレモニー」だった。

88年にホーフ宅に5日間泊込んでペスタロッツの読書ノートに関する文字どおり拙稿の校閲を受けて以来かれに会う機会はなかった。その間それぞれ、6, 70通近い手紙のやりとりをしてきた。ドイツ式に用件をストレートに書き出しながら、そのあとは社会、家族、学校、学会などのトピックスや噂、それに個人的な旅行や趣味に触れる。かれの分量は通常は1枚、いまはパソコンだが、つい2年前まではオリベッティのポータブル・タイプでユーモアや辛辣さをこめてぎっしりうってきた。切手ひとつとっても、数年前には、ニュルンベルグ大学の学校博物館で教育テーマの切手展示をしたほどの玄人はだしである。こちらはひどいドイツ語を書いているのだが、われわれはドイツ的で18世紀的な手紙文化を共有しているつもりでいる。

ペスタロッツの読書ノートに関するこちらの研究は、ホーフが編者である「ブランシュヴァイク学校教育学叢書」の第9巻に入れられることになったが、まだファックスのゆとりもなく4年がかりで92年に刊行された。いわれる国際化のなかでも彼我の差のあまりの大きさをしばしば感じさせられてきた。この仕事は、82～3年のドイツとスイスに滞在中、まず今は亡きボンのデルボラフがこちらを半世紀にわたる全集と書簡集の校閲者デュング（E. Dejung）やチューリヒ大学などスイ

ス側へ紹介, 続いてマールブルクのクラフキによる DFG (ドイツ学術振興会) の研究費助成の導入でスタートした。その後ようやく文部省科学研究の採択となった。幸運だったのは, この基礎的であまりに特殊な内容の一部をドイツ語化した文章がホーフの目にとまったことである。かれがもつペスタロッツ研究の専門知識, その教室にいるコンピューター出版の精通者, 校正要員, さらに連絡事務一般の秘書など, かなり強い背景で出版が可能になった。とりわけ, ナウク (J. Nauck) のような中年の助手層のなかには能力と経験を兼備したひとがいるのは, マールブルクやマグデブルクでも共通である。400頁の小著は, 自己負担金はなし, 図書館献本は自由など測り知れぬ恩恵をうけて日の目をみた。もちろん原稿料などには無縁だが, せめて校正への謝金支出をと勤務校の個人わりあて研究費のわくからの支出を申請してみた。40年近くまえの料金マニュアルを使う係長は「自分たちは国家に損失を与えないように職務に専念しています」といった。これが前例に忠実な, 国をまたぐ研究費処理の意識であった。

付言すれば, 小著の書評はドイツの「教育学雑誌」(Zeitschrift für Pädagogik, 1993/6, S. 1030~1033) でスイス人 (D. Tröhler) から, ベルギーの「教育史」(Paedagogica Historica, 1993/1, S. 324~326) でフランス人 (M. Soëtard) からえたが, 日本での場合, 「教育学研究」からは異例の「自著紹介」という紙面提供をいわれそれに応じた⁶⁾。文献リストはともかく, 最近もっとも意欲的に発表しているオスタワルダー (F. Osterwalder) がその論旨の展開に本文に「長年苦心の作」として小著の資料的部分を使っていた⁶⁾。また, 当時国際教育史学会の会長の位置にあったデパーペ (M. Depaepe) がペスタロッツからみた教育史記述の方法論を展開したとき, ある段落で小著がパラダイム変容に時代のジャーナリズムの影響を主張した部分を取りあげていた。

ケルン出身のホーフの, ボン大学での主専攻は歴史, ギリシア考古学だった。このためかれの処女作は, ドイツ中部の一地区の新石器-青銅期の石斧調査をした350頁の大著である。戦後の困窮期にギリシャを研究旅行して点火された古代への情熱は, ここ数年また障害児教育の社会史ともいふべき関心となって再燃し, 彫刻の盲目の少女像を追ったりしている。1978年ブランシュヴァイク教育大学が工業大学に併合されるまえの73年, かなり早い時期にかれは東西両ドイツの地理教科書にみる「ドイツ問題」を手がけた。その後, 18世紀古典期のドイツ教育学に接近し, 70年代はフレーベル, 80年代はペスタロッツに照準をあわせた論著を出している。これらにみえるかれの研究手法の特色は, 該博にして厳正, 資料への徹底性というドイツ史学の面目であろう。ことに, 『ペスタロッツとその時代の性』(Pestalozzi und die Sexualität seines Zeitalters, 1987) は, 以前に筆者も紹介したが, 性と犯罪への主題関心と社会史的方法において哲学から歴史へ, 道徳から社会心性へ, さらにマニュスクリプトの比較分析, 図像の収集と分析など, 教育研究の分岐点に位置している⁸⁾。

ホーフには正統派教育学への継承性はさほど多くないし, それへの期待もまた高くない。かれにあるのは, 方法としての徹底的な調査, ことに図像, 彫刻への注視, 主題としての性, なかんづく

宮崎：ドイツの教育研究の現況

女性、こどもへの着眼であり、正統、権威、精神史的・主知主義、イデオロギーとは逆の方向である。かれには個別的な断片的事実のなかでの一般性の読みとり、あるいは教育史実の隙間への勇気ともいうべきラディカリズムがある。

ある一日、午前中3時間ほどを、かれとともにその研究室にいたことがあった。それは面会設定の時間帯で提出レポートの返却日でもあり、来室した学生は口頭で講評をうけていた。ある女子学生は古代ギリシアのこども図像をまとめた作品を激賞され、別のひとは16世紀のそれを扱ったが、アリエス、ヴェバー・ケラーマン、ドモースなど10点ほど挙げた文献数が「すくない」といわれていた。ある現職の女性教師は、国家試験の課題としてペスタロッチの教育方法（メトーデ）につき2ヵ月かけた相当のボリュームのレポートを提出していた。また、フィンランドからの女子留学生はドイツ語の正確さを賞められて帰っていった。

ある^{ハフツシューレ}基幹学校の第10学年を対象にした化学の教育実習授業の参観機会があった。そこでみたのは、外国籍の生徒とその文化的多様性の現実、ドイツのいわゆる底辺校をおおう学習動機の低さだった。20人のそのクラスでは、12名が外国人籍であり、内訳はトルコ3名、ポーランド2名、チュニジア2名、イタリア2名、クロアチア2名、オランダ1名である。実習生の板書をノートにとり、挙手し発言していたのは、ひとりの女生徒だけだった。また、同じ校内にある第3学年の教室に案内されたが、そこでは担任の女教師が4台の中古のパソコンを自主的に導入しこども達に使わせていた。このように自由裁量の許容とゆとりのなかで教師がその熱意を発揮できる面と、その一方での設備不足の嘆きも聞かされた。かの女には工業大学の教員である夫の影響が大きいらしい。

ホーフのラディカリズムは、後継のキパーにもある。ビーレフェルト大学の助手、エッセン総合大学の非常勤から転任してきたかの女は、神経質そうにみえて行動力の持ち主、多弁でストレートなものの言い方をする。その研究活動は、旧西ベルリンの有名な外国人地区クロイツベルクでスタートさせたという。着任早々この学科内で普通教育をテーマにリレー講義を組織している。教科書・教育出版の老舗ヴェスターマンがあるこのブランシュヴァイクでその雑誌に投稿を続け、最近では文学作品からこどものストレスや自殺を論じ、いわゆる就任講演もそれをテーマにした。このことは、訪問のとき受けた、ファイルされた10種ほどの論文別刷りで分かった。また、かの女のこのポストが、ドイツの慣例としてこちらの知人の女性研究者と並記で文部当局へ推荐された結果だったと聞かされおどろいたが、この知人も最近ヘッセン州の大学の教授職についた。

たしかに、キパーにはビーレフェルト大学への自負がある。この大学の教育学の研究—教育をめぐる評価は、シュピーゲルなどマスメディアでも高いが、それは戦後ドイツ・アカデミズムを揺さぶった『大学の孤独と自由』の著者シェルスキー、つづいてヘルバルトからノールまでのゲッチンゲンの系統の嫡子の立場をすててその大学のラボールシューレ（実験学校）に移ったヘンティッヒによるところも大きい。なかんづく社会科学としての教育学の転換とその方法の基礎理論として、70年代までのフランクフルト学派のハバーマスに対抗したビーレフェルトのルーマンの進出の大き

さは否めない。いまかの女は、ブリュデューに注目しているというが、その理論では検証できぬ事実があるという。ラボールシュールもいままでのような「教育方法の実験場、人間学校」の希求だけでなく社会的文化的多様性に向かう転換をはかっているという。94年9月のこの学校の20周年記念に出席したクラフキはその課題を「平等への権利、差異への権利」として定式化していた。

ホーフが編者の「ブランシュヴァイク学校教育学叢書」は1986年以来現在までに12巻を刊行している。近年、その内容には異文化間教育への課題意識とともにそのニーダーザクセン州での教員養成への危機感の高まりが伺える。その一例が教育学部門の縮小・再編にたいするこのシリーズの特別号『ブランシュヴァイク宣言 -政治と社会への教育の挑戦-』（1994, 2版1995）であり、学生も寄稿している。この「宣言」の方向は、退官後のクラフキが手紙でいつもふれるノルトライン・ヴェストファーレン州やブレーメン市州でのかれの委員会活動の方向と重なる。1970年代、全ドイツを洗った単科制教育大学の、総合大学への統合の動きは、ゲッティンゲンやブランシュヴァイクでも例外でなかったが、その次には、いま縮小化の波が到来している。たとえば、幼児教育学会で旧東独圏の教育学とも強い連携を示すカール・ノイマン（K. Neumann）は94年にドレスデンで会ったときはゲッティンゲン大学からきていたが、96年に訪ねたときにはブランシュヴァイク工業大学のホーフの研究棟に移ってきていた。

1745年のコレギウム・カロリーヌに原型をもつブランシュヴァイク工業大学は、工業大学としてはドイツ最古の1877年の創立である。しかし、ゲッティンゲン大学の陰に隠れがちであり、たしかに総合大学のような人文・社会科学系の強さは少ない。このために学派形成の基盤はなくとも、逆にかつてのガイガーや、最近亡くなった社会学・社会教育の理論家として60年代にアドルノやハバーマスと論争したレスナー（L. Rössner）のような異才がいた。もちろん、後者はドイツ教育学会の会員でなかった。ちなみに、その学会の『教育学ハンドブック』⁹⁾(1994/5)をみると全ドイツでの教育学部門の教員にしめる学会員の比率は約65パーセントであり、ホーフも非会員である。日本でも知られるボン大学の故デルボラーフ、ガイスラー、ラッサーンも会員でない。

ブランシュヴァイクにはドイツ研究への関心者なら一見に値する3つの機関ないし資料がある。ひとつは、比較的知られているゲオルグ・エッケルト国際教科書研究所である。これは51年に創立され、やがては教育大学から独立し、ドイツ各州の支援を受け、さらにヨーロッパ化して「国際教科書研究所」の名実をととのえた。所長ベヒャーおよび主任研究員リーメンシュナイダーと小1時間懇談したとき、かれらの方から近隣諸国の非難の対象となっている日本の教科書が話題にされた。そのあと書庫でふたりの所員に懇切な案内と資料を受けたが、その組織からして研究調査と教科書改善への提言活動とのふたつで構成され、周知のように後者が国際関係の場で推進されている。日独間でも1982年の教科書研究プロジェクトの会議が教育学でなく歴史学の研究者により催され、その調査報告「教科書に映ったドイツと日本」にもかなり詳細な調査のあとがうかがえる¹⁰⁾。

教科書が国際問題化し将来世代への影響する程度は、過小なものではない。また、教科書の無謬

宮崎：ドイツの教育研究の現況

神話はそのイデオロギー的利用と表裏関係にあるだけに注意を要する。古い個人的経験だが、二児がマールブルクの公立学校に在学中の貸与制教科書で文化や都市環境の問題とみなしうる次の事実面に直面したことがある。「中国のひとつとちわたしたちのように文字を左から右へ書きません」とした見出しのドイツ語のアルファベットを逆に上から下へ植字してみせ、そこに並記された漢字の2つの例のひとつに日本の住所表記が入っていた。これならその見出しに「日本」を加えるか、事例から日本の住所表記を削除しなければ適切を欠く、と出版社に手紙をだしたら、改版のさい改めると返事をえた¹¹⁾。また、ある5、6年生用の地理教科書の表紙に富士山を背景にした新幹線の写真が出されていてその日本理解の大きさをよろこんだが、その同じ写真は本文でランニング・シャツの男が自転車でリヤカーをひく東京の商店街の写真と併載され、東京を世界の都市問題のありかとしてニューヨークとともに浮き立たせていた¹²⁾。

もうひとつのみものは、この工業大学の教育学部門にあるシュプランガー・アルヒーフ（文庫）である。これは1963年、こどもがなかったシュプランガーの最後の在職地チュービンゲン大学から移され、いまは定年退官者の補充なきあと、マイアー・ヴィルナー（G. Meyer-Willner）助手が保管している。そこには女性をめぐる多数の手紙、かれを扱った二次文献1,200点も保管されている。そこを訪問したふたりの日本人研究者の名を聞いたが、シュプランガー評価は、知られるようにつとに日独両国ともに対立があり、戦時期をめぐる観点などでかれの偶像化は後退を余儀なくされている。クラフキが90年に来日したとき、なお高い日本のシュプランガー評価に驚いていた。それには日本の場合の戦時期教育学の未整理、戦後教育学動向の左右不干渉ないし沈黙傾向、80年代以降のポスト・モダンや東側 Kommunismus の崩壊、さらには師弟間継承の強い教育学講壇の体質など、要因はいくつも考えられる。テノルトによれば、日本のある学校法人がシュプランガーの蔵書の購入を申し入れた文書がコブレンツの連邦文書館にあるらしい。周知のように、ナトルプの蔵書は山下徳治の仲介で成城学園にある。マールブルク大学の図書館はかれの文書をもつが、その蔵書の国外移動は痛恨のひとつである。

三つ目は、正確には市外だが、バスで20分ほどのヴォルヘンビュテルのアウグスト公図書館である。図書館に隣接して『人類の教育』の著者にしてその館員だったレッシングの家、広場をはさんでカムペの旧居など良質の18世紀がのこる。「18世紀研究の宝庫」といわれるこの桁違いに評価の高い図書館には、個人的にかなりの関心と用件をもち、これまでもペスタロッチの読書メモに登場する版本をもとめたり、学会などで4度訪ねた。87年の前近代教育史研究会の3日間の会合は、壁面の書架に3,000冊が背表紙をみせる「聖書の部屋」であった。また、日本から注文して入手したマイクロフィルムやマイクロフィッシュは30タイトル以上におよぶだろう。この図書館にあるドイツ18世紀研究学会の事務局からは、年2回の会報と図書館事業案内がくる。このような次第で、今回2回の訪問には、夕方からはじめられる3時間近い図書館案内の行事に参加したり、この図書館がもつペスタロッチの『寓話』など5種類の初版本を特別室で閲覧し、そのタイトル・ページを模写したりであった。たしかにこれは研究という労働ではなく遊びだったが、それには書物への悦楽

が感じられるひとときであった。この図書館へくるたびに、想起されるのは、スイスのヴィンターツールに「ペスタロッツ研究のネストール(巨匠)」とマールブルクでマカレンコの独露対訳批判版13巻を編んだフレーゼ(L. Froese)にいわせたデーユンクをたずね、半世紀に及ぶ作業をしたその市立図書館のかれの部屋と、その町から遠くないザンクト・ガレンの、一説にエーコの『薔薇の名前』のモデルともいわれる華麗な図書館の書庫である。

2: ベルリン — パラダイムのるつぼ —

2.1: ベルリン工業大学とヘンドリックス — 研究の学・産・官の融合 —

ドイツでの研究滞在の条件として大学だけでなく、資料の調査と収集、研究者訪問、学会大会参加、さらには家族や地域の教育日常との接触、これらの豊かさの程度を求めるなら、ベルリンにまさる都市はないだろう。しかも、それは東西の統一で倍加した。今回のベルリン滞在を可能にしてくれたのは、工業大学のヘンドリックスだった。かれを知ったのは、クラフキを共通の^{ドクトル・フランク}学位上の親とし、プロイセンへのペスタロッツ受容を研究テーマにするマールブルクのスチュービヒが、ベルリンに行ったらヘンドリックスに会えと、いつてくれた88年である。その専攻領域は職業教育における労働技術論だが、ドイツの職業教育制度やその人柄も手伝って大学、企業、行政の三つと広く関係し、今回はかれの奔走で宿舍まで世話になった。

フンボルトやポツダムの旧東の大学の研究者、東西両ベルリンで規模が倍加した文部当局、職業教育実習生の受け入れが法的に義務づけられている企業、まずこれらへの最初の紹介をヘンドリックスからえれば、以後はかれの影響や信望も手伝ってこちらが「自己開拓」し、研究所、各種の学校、青少年施設などの訪問、参観、そこでの資料入手、許容される範囲での撮影や録音も進めていける。これはヘンドリックスの紹介ではなく、マールブルクでのことだが、教授会や名誉学位の審議委員会の傍聴経験をしたことがあった。また、ベルリンで学校と行政との許可をえて、実質上の大学入試であるギムナジウム卒業試験の口頭試問に陪席したこともある。教授や教師、学生や生徒はともかく多弁である。これは能力である以上に文化であり、その政治・社会風土である。

もちろん、ヘンドリックスの授業に数回出席した。学問の本格性や理論的先鋭性のおもしろさはあっても現実化が十分でない総合大学のアカデミズム、実用的だがその素朴な技術主義には食傷せざるをえない教員養成系の教育学、これらとは異なる広い教育研究の世界をベルリンのこの都心の大規模工業大学でみることが多かった。かれの紹介で職業教育制度論のグライネルト、消費者教育論のシュテフェンス(H. Steffens)、それに女子教育論¹³⁾のトルニポルト(G. Tornipor)の3人の教授との面識をえ、多々資料を提供された。助かったのは、トルニポルトからかの女が夏の休暇で空けた研究室を使わせてもらったことである。またあるとき、こどもを同伴したヘンドリックスとともに学生のエクスカーショに付き合った。妻が所用のためよちよち歩きのこどもを連れた男子学生や、こちらの中古車とかわらぬ値段の自転車をのりまわし、それで主副両専攻制をこの工業大学と地下鉄で10駅ほど先の郊外にある自由大学とを行き来する女子学生などが10人ほどやってきた。

宮崎：ドイツの教育研究の現況

ヘンドリックスの労働教育論も、ベルリン工業大学の教育・研究組織も、つねに社会変動と技術革新の前で試練にあう。これはかれの講義やゼミに参加したときにも読み取れた。88年には技術革新の担い手としてのオートメーションがもたらす企業内社会化と、社会原理としての自己-共同決定の原理とは矛盾し、逆に両者の素朴な対応を「成熟」とみなすドグマティズムの危険を説いていた。しかし、94年にはコンピューターによるハイテクの情報洪水がもたらしたこどもの意識、行動、価値感情の変化、学習動機の変質や低下をとらえ、もはや過去への感傷的な賛美も、逆の将来への悲観的な排除もできないところを語っていた。

いま、かれには情報社会への期待が高まっている。96年5月の“EXPO 2000”の教育会議を中心に運営し、米、露などとともにも日本にもその教育の現状を報告する機会を与えてくれたのもかれである。この会議では、かれの工業大学での同僚、多文化教育論の副学長ミュラーと先のグライネルトの会うことができた。かれらにドイツ教員新聞¹⁹が報じていた、この工業大学の教員養成部門の閉鎖について質すと、それを対岸の火事のごとくみた返答をされた。職業教育をめぐるのは行政と学校と民間企業の連携や「二元システム」のドイツ・モデルになお自負があるからであろう。ベルリンとハンブルクの2州がその文部当局の名称を「学校・職業教育・スポーツ省」「学校・青少年・職業教育省」とするのをもそれを象徴する。

22：自由ベルリン大学 ―ヴルフ、レンツェン ―ポスト構造主義の拡充と変容―

ベルリンの3つの大学と近在のポツダム大学との4つの、各ふたつずつが旧東西の大学として統一後の様相を示すのは興味深い。ことにその教育学部門の研究傾向や教育条件に関して自由ベルリン大学とフンボルト大学とのあいだに比較関心がはたらく。90年と93年にシュピーゲル誌が旧西側49大学の2万人の学生にその専門分野別の教育条件を評価させ、そのランクを示したことがあった。その93年の場合の教育学部門をもつ30大学では最大規模の自由ベルリン大学は16位だが、教員の質では3位である¹⁹。“FU 2000”[2000年の自由ベルリン大学]¹⁹の計画として学生による授業評価の導入も決定し、93年には大学評価の指標として研究情報¹⁹を公表した。それによれば教員のつとめる専門誌の編集委員数(28)、研究賞獲得数(24)、若手研究者の他大学への被採用者数(13)、内外の大学への講師被招請者数(13)などをあげ、その位置はかなり高く、ビーレフェルト大学と双壁をなす。また、教員は、学・職歴のほか、外国滞在、研究団体や企業の審議会での活動、編集活動、受賞、奨励金、共同研究者名、研究助成団体との関係、教育活動の重点目標、国際交流、とくに研究目標と公刊出版物の11項目をあげている。したがって企業や財団からのいわゆる「第三手段」として研究資金を導入する必要も明言し、事実、1988年と92年とのあいだで2倍強の増加、研究の発表業績では、1981年と90年で3倍近い増加をしめしている。

これらの数値が、首都機能とメディアの集中を一層強めつつあるベルリンを背景にしていること、なにより大学規模の反映であることは看過できない。たとえば、教育学会が発行した『教育学ハンドブック』(1994/5)で日本でもよく知られている大学の教育学系の教授層と非教授層の人数の合

計を示せば、自由ベルリン大学 194、ハンブルク大学 116、フンボルト大学 69、ビーレフェルト大学 57、マールブルク大学 37、ゲッチンゲン大学 37、ボン大学 14である。ここには自由ベルリン大学のごとき、いわゆる大都市大学の大きさと伝統的な学問的大学の規模の小ささが対照的に目立つ。その差には教員養成の機能の有無とその大小の制度的な反映もある。ちなみに、教授層と非教授層は、通常は同数に近いのに反し、フンボルト大学では17と52だが、その差はこの大学がなお改組過程にあるからである。いま浮上しているベルリン全体の大学再組織化の課題は、全体的な保守化のなかで論議され、いうならば本家のフンボルトから壁の建設直前に分家した自由ベルリン大学の位置は小さくならう。とくに後者の高齢者層にはその協調関係とともに危機意識も生んでいる。

このように研究、教育の構造変容と新しい要求の波が大学におし寄せ、1968年の場合とは対照的に「静かな革命」を引き起こしていることは、たとえば、80年代には全学選挙制の副学長を二期つとめたヒュブナー (P. Hübner) から聞いた。1960年代末のかれは、来日経験のあるフリートベルクやハバーマスと社会学的な共同研究をしながら、フランクフルト学派への理論傾斜を強めたが、その後の研究方法論では批判的合理主義も視野に入れているという。かれのような60歳前後のひとにみられた批判的教育科学や社会主義の教育学などの理論方向も政治的実践的傾斜も変容した。たとえばマックス・プランク教育研究所のレムベルト (W. Lempert) は80年代にはいってその職業教育論にピアジェやコールバークの理論を導入している。また、80年代前半まではマルキシズム教育学の一派を形成したベルリン芸術大学のリュクリーム (G. Rückriem) の統一後のトーンダウン、逆にアムステルダム大学から帰還したランク (A. Rang) など、近年の脱政治化、広義の人間学や狭義の歴史的人間学への傾斜など、これらにも統一が背景や促進要因になっていることは否めまい。

ベルリンの研究者への興味深さのひとつを端的にいうなら、自由ベルリン大学のヴルフおよびレンツェンとフンボルト大学のベンナーとの対比でも捉えられよう。前者ふたりのポスト構造主義は教育の哲学ないし歴史的人間学を、後者はミュンスターから統一後に移動してデルボラーフの弟子として保守リベラルの弁証法的思考と実践理論をかざす。レンツェンのここ10年来の旺盛な日本関心には、一言でいえば、「もうひとつの近代」といった視点になろう。それだけにかれは、ハバーマスの「近代のプロジェクト」の未完性やその延長線上の批判的教育科学の立場とは一線を画し、近年の旧東独や歴史のなかの教育を直視しつつ「反省的教育科学」を提唱している。これは歴史や文化の差異のなかに生じた一元論の問題のあぶりだしがみせる近代性の危機意識でもある。このポスト・モダンのなか、92年のドイツ教育学会大会での会長講演で、かれは日本の戦中期におけるひとりの心情的「コミュニスト」菅原勝巳が尋問の光景を詠んだ短歌を引用した¹⁸⁾。これは以前にかれが、日本の教育に「カプセル・ホテル」のメタファーを用いたのとは違う¹⁹⁾。それに今や、独日協会の会員でもある。

自由ベルリン大学の上のふたりの来日や日本への関心ではむしろユネスコやゾーアカムプ版の『批判的平和教育論』(1982)などの仕事からしてヴルフの方が早い。かれはベルリンの牧師の子、

宮崎：ドイツの教育研究の現況

マールブルクのクラフキのもとで学位と教授資格をとり、その頃は当初、いまはフンボルト大学でルーマンの社会システム論的な教授論を展開してるディーデリヒ（J. Diederich）とともに地方の新しい総合制中学校の調査にかけまわっていた。しかし、68年の学生革命期にハバーマスもその教授資格をとったほど影響力の大きかったアーベントロートのいた当時、マールブルクの副学長でありながらポスト構造主義の論客として辞任したカムパー（D. Kamper）と行動をともにしてベルリンに入った。ヴルフは『教育用語辞典』（1974、10年間で10版）と『教育科学の理論とコンセプト』（1990、5版）の編著などその守備範囲は広い²⁰⁾。その後のかれには『快楽と性－性の変容－』（1985）『歴史的人間学』（1989）『ミメシス [模倣]、文化、芸術、社会』（1992）『実践と美学－ブリュデュー思想の新しい展望－』（1993）の編著がある。近年では、フランスやイタリアの哲学動向と広いネットワークをもち、92年、かれの編集になる「パラグラナ」（Paragrana）[核] 誌は「歴史、精神科学、人間学の緊張関係のなかで人間的なものの現象と構造を究明しつつ新しいパラダイムの提起をめざしている。」その創刊号で「ミニアチュア」、2号で「認識器官としての耳」といった斬新な特集をし、3号の「文化問題」にはボードリアルなども寄稿している。

このようなヴルフの先鋭的な問題意識はなみの教育学者のものではない。教育学の既成の枠組みを刺激し、つとに学際的な傾斜と国際的な連携を強めながら、近年ではそれを歴史的人間学の方で進めている。そこでは構造主義がもたらしたいわば「人間の死」以来の、ヨーロッパ中心主義ないし「知の考古学」への関心から脱けた開かれた問題地平を求めている。それは教育の本質論や文化の差異性の強調よりも、その差異化を解体する脱構築の方向、つまり「相互文化性」ないし「開かれた文化促進」の方向である。かれの場合、大学での位置は、レンツェンが教育哲学であるのに比し、「人間学と教育」であり、教育への両者のスタンスには遠近の差がみえる。その近業『教育人間学入門』（1994）も解釈学的であれ経験論的であれ従前の人間学にたいして、「アルタナティフな、ポスト・モダンの教育人間学」の提起である²¹⁾。

自由ベルリン大学の面々転進の速さには目をみはるが、それは地の利もさることながら、かれらの才気の結果でもあろう。このような先駆性は、教育人間学や教育哲学の学会でも若手がつぎ、たとえばエコロジー教育学のデハーン（de Haan）が88年に編んだ「エミール－教育文化誌－」の第1号の、中央をこぶし大のハート型に切りぬいて紙型全体を空洞にし周囲を赤く染めて「血」をテーマにしているのでもわかる。これらにフンボルト大学の新しいメンバーや日本の教育哲学者がどう対応するか、あるいは対応できるか。教育学アカデミズムの限界、その行方のゆらぎを想像させるに十分である。今回、プール付きのヴルフの自宅を訪ねたときは、ペスタロッチが読んだ版本の資料集でもある小著をかれのもとにいる学位候補者に薦めておいたといってくれたが、それが歴史的人間学の方だから、と手紙にも書いていた。また、現在ドイツの教育理論の最前線を自負するかれらのポスト・モダンが、はたして日本に受容可能かはあまり期待していないかにみえた。また、88年の訪問のさいとちがい、日本の現実や異質性をかなり醒めた目でみているようだった。たしかにその距離は大きい。

日本の教育哲学や教育理論の対ドイツ関係は、戦前におけるナトルプなどのマールブルク学派、ディルタイやシュプランガーの精神・文化教育学の系統、ナチズムを代表した純粹教育科学のクリークやボイムラー、戦後では戦前のシュプランガーなどの継承やボルノウなどの人気、フランクフルト学派の批判理論、さらには旧東独の体制内に一元化されたマルキシズムなど、これらが翻訳活動や教育運動の指針として紹介され受容されてきた。そしてこのあとにシステム理論やポスト・モダンが続く趨勢である。したがって、日本の研究者の滞在地や年齢層は、現在70歳前後の世代がチュービンゲン、4～50代がボンやマールブルクなど、そのあとの若手がゲッチンゲンやベルリンということになる。ドイツでの日本人学位取得者も教育研究では6～7人、なかには旧東独のメダル受賞者もいる。

そこでいま興味津津なのは、自由ベルリンかフンボルトかである。これらの変動し対立するパラダイムが日本国内で無視されることはあっても論争されることは少なく、ここに日本の受容・紹介的教育理論の特性があった。ことに批判理論などにはアメリカまわりのいささか荒ら削りなものがあるが、ドイツ教育学の研究者の側からは、言語分析的な対抗姿勢や先方のドイツでの論議を翻訳やイデオロギーの立場からすすめるいわば代理論争をしており、教育の現実への指導性も低く、対決回避の姿勢を保持し続けてきた。また、制度としての大学、ことに教育学系には政策側への対応関係で保守的になる体質や歴史もあった。そのためにプルリズム、「価値多様化」のなかでの「ポスト・モダン」の名で理論究明が稀薄化し、「プレ・モダン」という歴史のゆりもどしもむすびつきかねない様相すらある。

ふたつのドイツの統一で、東独の教育学の機能は停止し、その環境は変わった。比喩的にいえば、内からは外の状況はみえても外部からはキラキラと金色に照る権力中枢^{ポリティビューロー}の役所の前面総ガラスの窓や、労働者・農民群像などが描かれた壁面ごとくであった。この権力と人民の関係を示す旧東独特有の教育建築のひとつで、アレキサンダー広場にかつての「教育国家」の様相を呈していた「教師の家」^{ハウス・デア・レラー}の機能は停止された。それはいまベルリンの「市民大学」^{フォルクス・ユニバーシテット}の中心になり、新ベルリン州の文部省の庁舎も旧東地区に新築された。たしかに、フンボルト大学の教育学の研究者や学生は、あのシンケルの手になる旧国立図書館その他を利用し、自由ベルリン大学の場合は機能主義と環境維持の見地でジュラルミンの2、3階建ての学舎をつかっているが、図書室やメンザを含め、その差は大きい。また、西の市街地にある現職教員のための「教育センター」や、おなじ設計者のためにベルリン・フィルハルモニカと思わせるマックス・プランク教育研究所、ダーレムの博物館・美術館村の教育コーナー、東地区の教員研修セミナー、荒れた学校校舎の二階部分の教室をつかう学校博物館、これらの差も大きい。それは確実に縮まりつつあるが、なお先は遠い。

図書館などでは現段階のいわば歴史の負債を印象づけるような興味深い事実によく出会った。たとえば、フンボルト大学教育学系の一般書庫で、転換直後に話題をまいた『幼年期の構図』の女流作家クリスタ・ヴォルフ(Ch. Wolf)に向けられた『適応か成熟か—89年秋、クリスタ・ヴォ

宮崎：ドイツの教育研究の現況

ルフへの手紙―』と教会系の精神分析家マーズ（H.-J.Maaz）のベスト・セラー『感情のよどみ』を書架からとって見たとき、そこに添付の貸出しカードでは前者はただ1回、後者にはなかった。これに対し、旧東独の教育の過去を暴いたクリア（Klier, F.）の『うその祖国』は6回も貸出されていた。また、近くのドイツ図書館では旧東独の教育学体系の分類カードがいぜん利用され、18世紀ドイツの文科系大学の筆頭ともいえたイエナ大学の中央図書館でもそれがあって、旧ドイツ民主共和国そのものの残像を正確に示していた。近代ドイツ図書出版史の中樞を占めてきたライブチヒのドイツ図書館の建築は過去の栄光を語るものの、内部のほうは転換期の現状をしめし、その開架の哲学関係ではアドルノ、カール・ポPPER、ヘルマン・ブロッホ著作集が目だち、逆にマルクスやレーニンのものは目につかなかった。フンボルト大学の正門前にたつ露店には、マルクスの全集が欠本があるものの200マルクほどで自由ドイツ青少年団のバッジや手帳などと同様に並べられている。玄関内部正面にはマルクスの「フォイエルバッハに関する12のテーゼ」のひとつ「ひとは世界をさまざまに解釈してきたが、改革はしてこなかった」がそのまま残されている。しかし、96年にはその玄関と前庭に変化もみえた。その銘版には黒地に黄色の疑問符に垂れ幕でおおわれ、フンボルト兄弟の巨像と小さなトライチュケの胸像を加えて、ヘルムホルツ像が中央設立されていた。前者は導入された授業料徴収への反対運動だの、後者は生誕100年の記念での現代および今後の自然科学の優位を示唆するかにとれた。

23：フンボルト大学とベンナー ―ドイツ教育学の再構築へ―

7月14日、フンボルト大学第4哲学部にベンナーを訪ねた。以前、その『教育学の主要潮流』第2版（1978）を読んだとき、著者に論争家や問題提起型の学風よりは総合型を、内容には標準的な教科書を感じた記憶がある。秘書室と内部続きの研究室に掛かっていたルソーからモンテッソーリまでの5つの大きめの肖像額にはいかにもと思われた。このときテーブルにその増補版やハーゲン放送大学での講義資料、ヘルバルトおよびフンボルトに関する自著などが積み上げられたが、なかでも圧倒されたのは旧東独中等教育研究のプロジェクトの3、4センチもあろう書類綴りだった。こういういわばドイツ的徹底性は、クラフキやクロアにもみせられた。こちらが提出した質問紙からは離れがちだったが、約1時間以下のような話を多々聞かせてもらった。

はじめにこちらの少時のボン滞在やデルボラーフの来日のことをいうと、ベンナーは、その教授資格をかれのもとでとった機縁を語った。デルボラーフにはギリシアとヘーゲルの影響があり、その弁証法的思考と実践理論（Praxeologie）には「カトリック的リベラリズム」（クラフキ）がある。かれの日本との関係のひとつは、ある宗教団体の支援のもとにその会長との対談集が日独両語で出ていることも、知るひとぞ知る事実である。これに比べベンナーの場合は、その思考様式の原型はカントとヘーゲルにあり、その教育学思考はフンボルトと、シュライエルマッヘル、ルソーにあって、一貫してヨーロッパ近代的である。

ベンナーは、現代ドイツの教育学の位置付けには、19世紀初頭の市民的新人文主義、20世紀初頭

の新教育運動、戦後の東西両ドイツのそれぞれのふたつの教育学、この4つの契機をふまえ、その点検と継承が必要と考える。ここでいう戦後の東西の教育理論とは、東の場合はマルキシズムないし社会主義の教育だが、西の場合は、1) シェーラー、プレスナー、ボルノウなどの現象学的人間学の検討、2) ロートなどの経験の解釈学的吟味、3) アドルノ、ハバーマスが代表するフランクフルト学派の社会哲学に立脚したクラフキ、レムベルト、モレンハウアーなどの批判的教育科学とそれがもちこむ「イデオロギー批判」「解放性」「脱イデオロギー化」(Entideologisierung)の方向である。これらが先の『主要潮流』が改訂された理由であり、とりわけ旧東の場合を検討の視野に入れることが転換後の方向の確定に不可欠とみているのは、かれの、フンボルト大学への移動とドイツ教育学会の会長の立場を裏書きする。

フランクフルト学派の批判理論、カントの系譜にある超越論的批判主義、分析哲学の批判的合理主義、これら3つの「批判」の契機は、従来、多々論じられてきた。しかし、80年代後半にいたるや、モレンハウアーなどによるいわば「知覚」(Wahrnehmen)の批判が4番目のものとして浮上した。これはアドルノ評価にあってもその美学が、道徳や啓蒙の批判以上に重視される現況と無縁でない。ベンナーはポスト・モダンの評価を「ドグマからの脱出」というあくまで消極的価値に限定する。いいかえれば、かれの場合は弁証法的であっても否定的、非肯定的なそれとは対極の「肯定的」(affirmativ)であり、その教育学の課題方向を教育の理論—実践問題への積極性を求める。このあたりにかれが、シュプランガーよりリットを重視するといひ、ハバーマスの論敵ルーマンの社会システム論にはあまりふれない理由があろう。そしてハバーマスの現代ドイツの知識人としてのディスクールは重い、という。おもしろかったのは、かつての批判的教育科学の側の論客モレンハウアーを「もう右だ」(schon rechts)といったときだった。ここに教育の美学的展開よりも倫理性を保持しようとし、またポスト構造主義のような現代思想の最前線にとびこまぬベンナーがいる。

フンボルト大学がはじめての学内選挙でえらんだ学長が、公安機関への協力という、いわゆるスタージ(秘密警察)問題で辞職、かわって社会教育の女性学長(M. Dürkop)が登場して揺れていた92年4月、ヘルムート・シュミットも発行人であるリベラルのツァイト紙に教育学分野の教員人事についてベンナーを標的にした署名記事「無権利の真空のなかで」が出たことがあった²⁾。ドイツ教育学会の会長、フンボルト大学の教育学部門がある第4哲学部長ベンナーは対抗声明を出して対応した。たしかに中枢にいたかれは旧東独教育学の「清算」過程でみずから「歴史の勝者」の役割を演じ、それだけに旧東独の大学や研究機関の関係者からの反発を受けていた³⁾。

今回、これらの背景を意識してか、ベンナーは自分がひきいる教育学講座の9人のうちかれとゲッティンゲン大学からの転任者を除く他の7人のうち6人の研究員スタッフは旧東の出身者だ、と強調した。また、フンボルト大学の場合も、学会発行の大学別名簿では記載されていないが「第三方式プロジェクト」(Drittmittelprojekt)という課題研究の実行のために導入された契約期限付き要員があり、そこには後述(4-41)するように、旧東独の研究者が編入されている。つまり、このスタッフは上部には西からの移動者が入り、下部に東の残存者が組み入れられた構造になっている。

宮崎：ドイツの教育研究の現況

もちろん、これは旧東独圏大学に通例の措置でもあり、この「第三方式」には伝統的な講座制の階層性や非流動性にたいして多様さと業績を重視する展開、研究の自由・競争の市場原理の方向となつて機能する面もある。事実、旧西の学会でもつとに問題にされ、新聞でも論じられているように、教育学研究者の「無職状態」^{アルバイトロース}はきびしく、論著などで承認された教授資格^{ハビリタチオン}をもちながら、それに対応するポストにいない者は200人に達するという²⁹⁾。ちなみに、ドイツ教育学会が年2回出す報告と『教育学ハンドブック』によれば、1990年段階での会員数は約1,300名、また、94年では1,400名、うち半数が教授職、博士学位をもたぬ者は皆無に近く、96年では1,600名である。なお、大学、研究所等の研究者総数は、概算で2,500名である²⁴⁾。

3：旧東独大学の新生　－旧西独からの新教授たち－

3 1：ポツダム大学のシュミット　－新教育の教育史－

ベルリン　ウンター・デン・リンデンに面したフンボルト大学教育学部門の位置とは対照的に、新生ポツダム大学の教育学系の一部は、市街地からバスで40分もかかる農村のはずれにあった。そこにはこの施設のためにだけ設けられたような鉄道の無人駅もあった。7月6日、そこにハンノ・シュミットを訪ねた。まず、踏み切り式のポールの脇にある守衛室で来意を告げ入構した。民間に払い下げられて利用されている鉄工所のようなものまで目に付いた。かなり広い構内の奥のほうの一部にはつたにおおわれた瀟洒な建物もあったが、学生寮と向きあって建っている研究・教育棟の配置は奇妙だった。旧東独期の安普請だったのはいうまでもない。「もとはスタージの学校だよ。」会うなりシュミットにこういわれて不思議は解けた。法科大学がその正式な名称である。

ポツダム大学は統一後のブランブルク州でフランフルト・アン・デア・オーデルのヨーロッパ大学とともに新設された。その教育史のC 4、いわゆる終身制の正教授になったシュミットは、ドイツ教育史学会が年2回の編集・発送しているニュース・レターの事務局も一緒に西のマールブルクからきた転出組である。かつてかれがマールブルクで教育史の研究員だった88年、18世紀のマニュスクリプトをつかったゼミや、新教育のテーマで非常勤の女性講師ファウケ・スチュービヒと共にスライドを使いオットーなどを批判するゼミに数回出て、その水準の高さと方式の斬新さに強い印象をもったことがあった。

このファウケ・スチュービヒとはその夫のハインツとともども、15年来交流しているが、夫妻ともに教授資格をもちながら、夫はプロイセン教育史で員外教授、夫人の場合は夜間ギムナシウムの教壇にたっている。89年のフランス革命200年のとき、かの女は革命期の女性と女子教育をテーマに全ドイツ規模のシンポジウムを主宰したり、近年発刊された「教育学年報」(Jahrbuch für Pädagogik) 3号の「両性関係と教育」の特集(1994)では若手女性研究者に助言的な活動もしている。付言すれば、教授会推薦の2名を文部当局に推薦する方式の教官募集公告には、その2名が男女の場合は女性の方を、一方が障害者ならその人を優先するとまで明記するところも、たとえばツィァト紙の求人欄に出ている。

この新設大学の様相は、シュミットがその日に案内してくれた教育学部門の会議室で新任教授を歓迎する立食パーティでもみることができた。真っ赤なブレザーにひげをたくわえた小柄なリンク(I.-W. Link)が、以前マルブルクの学科図書室でわたしをよくみかけたといってくれた。かれも研究助手としてマルブルクからシュミットに同行したわけである。話しかけられおどろいたのは、女性教授エリザベート・フリットナー、あのヴィキルヘルムのまご娘、チュービンゲンからきて最近までイエーナにいたアンドレアスの娘だった。この高名の2代はともかく何年前なら3代つづきとなる教育学教授など希有近い。別のときこのことをある私講師にはなすと、ユーモラスな毒舌が返ってきた。

パーティのあと車で教師教育では「ポツダム方式」を打ち出している教育学部門のメイン・キャンパスに連れられた。その日は、新しいテクノロジーを導入して教科教育の刷新をはかる講習会有り、機器の展示などもおこなわれて現職教員を中心に200人ほどが集まった会場には関心の熱気が流れていた。サンスーシと隣りあい、いわゆる新宮殿^{ノイパレー}のブロックにあるこの教科教育系キャンパスは、転換以前は教員養成の単科大学だった。ポツダム観光の目玉と接しているため、建造物の歴史的保存と観光利用をもくろむ構想も出て、ポツダムには旧西ベルリンの裕福な層が住みたがり、その人口は増えはじめています。この夏の駐留軍の引き上げでもってベルリンの戦後は終結し、ポツダムからもロシア軍は木陰にレーニン像を残して去った。こんな話をシュミットから聞き、新聞などでも読んだ。

新設の図書室などを案内されたあと、ノイ・パレーのカフェでも多々話を聞いた。教育学アカデミーの解体過程にあった東西の対立も收拾され、「教育史年報」(Jahrbuch für Geschichte der Erziehung)にかかわった「教育史研究年報」(Jahrbuch für historische Bildungsforschung, 1994)のこと、ペスタロッツ研究のこと、2月にポツダムであったそのフル・テキストのCD-ROMのプレゼンテーションのこと、近年の18世紀研究とその教育の新刊書のことなどだった。かれは、コンピューター・テキストは万能でない、おそれるにたりぬ、ともらした。6月末のベルンでのペスタロッツ・シンポジウムに参加したことをエルカーズ、ランク、ヘルマンなどの面々の名をあげて話し、歴史研究の拡充の必要とその意味を強調した。この会合は、チューリヒ大学での2年後の96年の250年生誕記念をはっきりと意識したものだった。それを聞きながら、自身の欠席を悔いたが、のちに96年1月、実際にその3日間のシンポジウムで同じスイスのベルンとチューリヒの間の差、つまりそこでもいたドイツからの移動組研究者とスイス人研究者との差を認識した。

まったく偶然ながら、後述(Ⅱ 6)の学会後の9月末、ヴォルヘンビュテルの図書館でもシュミットに出会った。そこには、こちらも会員であるドイツ18世紀研究学会の事務局があり、かれもその機関誌に発表しているほどに研究の守備範囲はひろい。そのかれが担当する教育史学会の95年度後半期報告は、95～97年度の委員長にかれが選出されたことを投票数もふくめ伝えている。ついでに言えば、近着のドイツ教育学会会報は、18世紀ヴォルヘンビュテルの最初の講壇教育学者トラップにちなむトラップ賞が学会内に設置され、その第1回受賞者はマックス・プランク教育研究所の

宮崎：ドイツの教育研究の現況

ロエダー (P. M. Roeder) に決定したと報じている。かれはシュミットらの先人としてマールブルクの元学長で94年12月鬼籍に入ったフレーゼのもとにあり、18世紀教育の定量的、社会史的研究を先駆けた。また、クラフキがフレーゼと交代するかのようになり、名誉会員になったと告げているが、シュミットはクラフキのもとで学位および教授資格をえている。このあたりにもひとつの世代交代がみとれる。

32：マグデブルク大学とマロツキ —教育哲学と教育的伝記研究—

壁の崩壊と国境の開放から統一までの1年間にあった旧東独大学の自己弁護や抵抗も、西側の支援や介入の程度が拡大して、そのわくぐみのなかに収斂されていった。まず、教育学アカデミーの支配下にあった「教育」「教育研究」などの定期刊行物が痛ましかぎりの流動をみせた。資料保存などは94年3月の教育史研究図書館の誕生まで曲折とかなりの年月を要し、旧東独で設立された教育学会 (DGfP) については92年3月の解散までの2年間にひとつのドラマが演じられた。また、教育学およびその制度化の動向は、なにより連邦やそれとほぼ平行的にすすめられた新5州の大学政策の招請委員会による人事が、研究・教育の方向を強く規定した。総選挙も大学改組もボン大学の保守派がおさえた、かつての文科系大学の名門ライプチヒにはさしたる活況はなかったが、先のポツダム大学は旧東独唯一の社会民主党州としてその教育研究所とともに活気をみせた。ハッレ大学が旧東独圏ではじめて1996年の教育学会大会を受け持ったのも盛況の一例であろう。

こうしたなかで招請委員会の委員でもあったブランシュヴァイクのホーフを介してザクセン・アンハルト州のマグデブルク工業大学に関心をもった。このふたつの都市は、その歴史や産業でも類似し、大学も工業大学として共通性がある。旧国境をはさんで80キロと比較的近いこの2大学は、転換後ただちに、支援・提携関係を協定し、東の自助努力はそれなりに評価されつつも、実質的には指導・被指導関係にはいった面もなくはなかった。それを典型的にしめたのが、後述 (II1.) の教育史・比較教育講座による国際シンポジウムである。

92年、マグデブルクの工業大学と教育大学とは統合され、オットー・フォン・グェルニケ大学として総合大学に拡大された。教育学研究室は、全8学部の構成のうちの「精神・社会・教育科学学部」のうちのひとつである。そこにマロツキもドイツ教育学会の教育哲学部会の事務局とともにハンブルグ大学の私講師^{ブリグアート・ドゥェント}から移ってきた。11月9日、ベルリンでの6日間の最終スケジュールでノイナーとの面会を終え、夕6時半マグデブルク大学にはいった。午前中の初対面という緊張とは違ってマロツキとは6月に訪問がはたせず、10月にあった教育哲学部会の秋季大会での約束として訪ねた面会だった。かれは、この大学の研究と教育での二人制副学長の教育担当の立場にあり、その執務室は大学の将来構想のパネルを掲げビューローそのものの様相を呈していた。フンボルト大学はともかく、教育学アカデミーの支配下での他大学の粗末な環境はマグデブルクとて例外でない。一步構内にはいると、改装された本部の建物の瀟洒な小綺麗さとは対照的に工学系の粗悪な建物が雑然とある。しかもたてよこ2メートルと6メートルはあろう白地の板にあの真空実験者の名

にちなみ「オットー・フォン・ゲルニケ大学」と大きく書いた看板を街路にむけてみせていた。聞けば、旧東独の大学のうちでは点在する形ながら最大の所有地面積をもつという。たしかに、市街地にこれほど多くの建築現場がみあたる大学もめずらしい。だからこそ、マロツキはこの大学の有望な将来を明るく語りながら、こちらの小著と交換に「若き大学」と「オットー・フォン・ゲルニケ」の2種のビデオを贈ってくれた。のちに、96年5月、この大学の広報活動を、市街地の大通りに面した州文部省のロビーでの展覧会でも確認できた。しかもその近くで大学に初めて導入される授業料徴収に反対する高校生のデモにぶつかった。その直後ベルリンのフンボルト大学の玄関口の、マルクスのフォイエルバッハのテーゼを刻んだ有名な銘版が大きい疑問符(?)のタレ幕でおおわれているのをみた。これらは旧東独期には考えられなかった光景だろう。

マロツキの執務室を出て、西側の大都市にはない、^{コフシュタイン}小石敷きの大通りを夜間不案内のまま運転し、旧ソ連軍の広大な^{カゼルス}兵營のあとに当時からあったレストランで2時間余り話がきけた。正直、50年生まれの若いマロツキの研究方向については、3年前の91年春、レンツェンとベンナー共編の『教育・陶冶・規範』にあった構造論的アイデンティティ論をみていた程度で、よく知らなかった。ただ、学会報告やかれが編んだドイツ研究出版からの近刊の多さが以前から気になっていた。その日も、かれは青少年のインタビューの手法やその心理学的実存的視座を自著にふれて話し、サルトルのフロベール伝にまで話題にした。

マグデブルク大学に入るまえのマロツキはハンブルク大学の私講師であり、シュミットがマールブルクの元助手で今は正教授であるのと似ている。ハッレのクリューガー(H.-H. Krüger)とマロツキとは教育哲学会の新しい研究主題での方向として「教育的伝記研究」の促進の役割を演じているが、その成果の一環として『教育的伝記研究』や『ドイツ民主共和国における教育学と教育日常』の上梓で積極さをみせている。クリューガーは、実は、マールブルクでのクラフキの後継としてノミネイトされたが、それを辞退して新活動の地としてハッレを選んだ。このことをむしろ若手に理解的にクラフキが語ったのを聞いたことがある。かれら3人は旧東独に華麗な転進をした。ガイスラー、フリットナー、レールスなど多くの著名な人が旧東独の教育学改革に身を移したが、かれら年配者の一時的役割はもうおわっている。

33: イエナ大学とフリートリヒ・ペスタロッツのCD-ROMテキスト²⁶⁾と最近スイスでの研究一

イエナ大学は、その正式名称のフリートリヒ・シラー大学が示すように、フィヒテやヘーゲルも創設のベルリン大学へ移る前にいた18世紀大学、ドイツの哲学的人文的大学の典型であり、ドイツ最古の学生団の地、前世紀はシュトイの教員養成所や、ペテルゼンのイエナ・プランの発祥地であった。それだけに東独の崩壊で戦後初めて開かれた機会は歴史への回想をさそった。転換直後のこの大学の凋落は、哲学系で教員の数が専攻学生よりも多いといわれ、そのかれら40人すべてがイデオロギーゆえの審判をうけ追放された。大学を訪ねたときちょうど入手した現地の新聞では、光学都

宮崎：ドイツの教育研究の現況

市イエナのツァイスが大学に寄贈した巨塔のごときビルがその機能の悪さで不評をかったり、この町から30キロ、当地の行政・芸術部門の中心地ワイマールとそこからさらに10キロの元強制収容所ブーヘンヴァルトとを結びつけた歴史の表裏の指摘、またその強制収容所の一向に変わらぬ旧ドイツ民主共和国式の反ファシズムの展示や、逆に過去の歴史の記憶を封じ込めようとする運動など、これらが批判的に報じられていた²⁶⁾。実際、イエナ大学本部の建築は、一步内部にはいるとチューリヒ大学をひとまわり大きくした堅牢さと品格をもっている。ところが、いまは、一言でいえば再建改造の最中、しかも暫定的使用で新築とはいえ教育学系の校舎は1階部分が金属加工の工場の上の3、4階部分に最近引っ越してきたばかりである。

旧東独期の88年、2日間だけワイマールを訪ねたときは、近在のイエナに寄るつてもなく必要もなかったが、今回は、フリートリヒがペスタロッチ・テキストのCD-ROM化という新機軸をもってベルリンにいるわれわれ夫婦を大学のゲスト・ハウスに1週間よんでくれた。その小宿舎は市街地に急拵えされていて、通常の訪問研究者だけでなく西側からの単身赴任教員なども使うアパートにもなる。この種の施設は、いつか旧東独出身のマグデブルク大学のひとがささやいていた「DD教授」、つまり火曜日 Dienstag から木曜日 Donnerstag まで任務地にいるいわば単身赴任教授にも必要である。これは、急に開かれた、あるいは開かざるをえなくなった旧東の大学事情を示していた。たまたまこの宿舎の常連の利用者がチュービンゲン大学からのフリーデンタール・ハーゼ (M. Friedenthal-Haase) である。このひとは女性学部長、近報ではチュービンゲン大学からの正式招請を断っている。かの女は社会教育のひとにある趣、わが方の妻など大いに惹かれていた。それに気付いてか最後の日、親切なフリートリヒはもうひとりの若い女性教員もくわえ4人を昼食にさそってくれた。多々つもる話に時間を忘れた。

テキストのCD-ROM化は、ヘーゲルなど古典分野で先行例がある。10年ぶりに行ったフランクフルトのブッフ・メッセ（書籍市）でも英語圏を中心にコンピューター入力された歴史資料の多さに目をみはったものである。思えば、教育史学会から会員を対象にしたコンピューターによる歴史研究の夏期講習をハノファーで開くという案内状をえたのは1980年前後だった。ペスタロッチのCD-ROMの場合は、87年、当時デュッセルドルフ大学にいたフリートリヒらがドイツ学術振興会 (DFG) のプロジェクトとして着手した。そのニュースを聞いたとき、かれがクラフキに提出したペスタロッチの経済活動に関する論文が1,500ほどの注釈をもっているのを思いだし、かれだからこそ、と想像した。そして7年後の94年7月、かれもまた東独圏大学の改組のために転任したイエナで完成した。

7月16日の全日と18日の半日、フリートリヒにそのCD-ROMを直接見せてもらった。そのプログラミングはゲッチンゲン大学とチュービンゲン大学の情報処理センターに支援されたというが、かれの著書と同様調査への徹底性をうかがわせた。『ペスタロッチー・フレーベル辞典』（1996）の項目「ドイツのペスタロッチー研究」の原稿でもその方法のために、新カント派のナトルプやフラ

ンクフルト学派のA. ランクなど、理論的かつ社会的な方向には評価が低く、むしろペスタロッチ生前の協力者や同時代者を仔細に紹介していた。3年前その原稿を送られたときは、正直、奇異に感じたが、これもCD-ROMデータの反映であろう。

このCD-ROMテキストは、批判版29巻分と書簡13巻6,000通分、それぞれのテキスト・クリティーク、事項説明、人名-地名索引、特殊語彙説明の部分をあわせ総計21,000頁の入力である。コンピュータ入力の結果、活字版本に比し正確かつ迅速な数量処理が可能になり、若干の説明記事も付加された。たとえば、ペスタロッチの正書法の特異さやスイス・ドイツ語の一覧、外来語、ことに固有の人名・地名、手紙の宛先人、さらに1821年のコッタ版予約購入者などの事典的説明を収録している。著作での語の検索では、たとえば「学校」では756箇所、その合成語では256箇所が、1段落ないし3行分を単位として検出され、手紙も宛先から検出できる。また、作品の時期別抽出、あるいは検索語の使用頻度とそのグラフ化も可能であり、その注釈や関連作品、作品での登場人物名、つまりフィクションの名前も呼び出せる。画像表示技法を利用して当時の人物肖像や地理的図像約500枚がその解析度や色彩など完全ではないが、収録されているのもおもしろい。

こうして、CDになったペスタロッチ・テキストは、94年をはじめから教育史の学会や研究会などの機会にデモンストレーションをし、ことに訪問した前日にはイエナ大学での「おひろめ」があった。たまたま入手した当地の新聞でもフリートリヒの写真いりの紹介記事をみた。かれの研究室の隣室では、3人の若い雇員がキーボードに向かっていたのが印象に残る。記念にペスタロッチの肖像をプリント・アウトしたものをいただいた。

ともかく鳴り物入りのCD-ROMだが、結局その「底本」は1927年にはじまりいまだ完了せぬペスタロッチの批判版全集だから、未刊部分は積み残される。それにたとえば「読書ノート」など、不完全テキストの整備、改善などが進行したわけではない。書簡集でも1971年以後約1,100通が新たに発掘されている。このような欠落や新資料の補充は、1990年に死去したデュンクの作業に社会教育機関ないし博物館化しそうだったチューリヒ州立のペスタロッチ研究所がもっと早期に手を差し伸べなかったことと関連があろう。これについては1982年秋デュンクを自宅に訪ね、その直後にマルブルクにきて同じゲスト・ハウスに3日間いたときに嘆いていたのが想起される²⁷⁾。

作品、書簡、研究文献目録の3分野を、電子機器を駆使して出版するというならば「ペスタロッチアーナ」(文献集成)は、19世紀末以来フンチカー、ザイファルト、そしてビュフェナウ、シュプランガー、シュテットバッハーが企画実現させたそれぞれ研究上の基礎情報や到達点の継承であり、いかにも1996年に迎える生誕250年の記念祭事業にふさわしい企画である²⁸⁾。しかし、そこで中心をなすのは、第一級の新資料とその校訂というよりも目録などの整備とその量的拡充であるかにみえる。それは、たとえば、「新ペスタロッチ研究」(Neue Pestalozzi-Studien, 1993ff.)や「新ペスタロッチ誌」(Neue Pestalozzi-Blätter, 1995ff.)という、「新」のついたふたつの定期刊行物でもうかがえる。研究文献の目録化では、従来のイズラエルによる約4,000(1903年まで)、クリンケによる313点(1923年)、クリンクによる2,965点(1995年)、クーレマンによる138点(1977年)、さらに

宮崎：ドイツの教育研究の現況

上の「新ペスタロッツ研究」での330点(1992年まで)を統一する形の全集索引版も登場した。これがフリートリヒに87年からDFG(ドイツ学術振興会)の助成で進められ94年にでた『ペスタロッツ総索引』(J.H.Pestalozzi Samthiche Werke und Briefe—Registerband—)2巻であり、テキストと同じくペスタロッツ研究所が受け入れ、刊行には新たに新チューリヒ新聞出版社が加わっている。CD-ROM テキストのインデックスには概算で人名9,000, 研究機関35, 研究者300, 既刊13巻の6,000通の手紙の受手1,600人, 作品の実在の人名, 地名を除くフィクションのそれ, 加えて寓話の動物等がある。これは、活字版本に比し検索などは迅速かつ容易に進められ、なにより研究の実証的定量的方法を促すだろう。しかしそれがただちに研究の質や水準を高める保障とはなりえず、あくまでツールの域に留まるしかない。なお、このCD-ROMは1927年の初巻刊行からして今日の全巻入手の困難さをCD1枚が代行する面もあろう。その価格は2,550スイス・フラン(約25万円)だが、それは批判版全集と書簡集の2分の1相当だという²⁹⁾。コンセプトはドイツ、技術サービスもドイツのヴィースパデンの会社、販売はスイス、いかにもの組合せである。

フリートリヒとの話し合いのなかで、3ヵ月先の94年10月にかれが中国に行く予定を聞いた。これにはチューリヒのペスタロッツ研究所所長ゲーリクを代表にハーガーと、ギーセン大学から移ったシュタドラーのチューリヒ大学の両教授、ブリュールマイアーらで使節団が構成され、ドイツからはかれらに近いフリートリヒが唯一加わっている。すでに『中国のペスタロッツ』(1994)として出ているように北京でのそのテーマのシンポジウム開催、同じく「中国—スイス ペスタロッツ・センター」の設立、それにブリュールマイアー編集による2巻本のペスタロッツ集の中国語版の刊行計画、この3つが訪中の大きな課題だった²⁹⁾。この2巻本は、大言壮語の「賛美歌」や教員養成の「精神歌」のごときとは無縁な、「大学文庫」(UTB)収録の標準版であるという。筆者がこの中国語版の計画を知ったのは、日本語版の申し入れを編者にした若手について照会してきた92年のブリュールマイアーからの手紙でだった。翻訳をめぐるズレでは、ペスタロッツの非神話化に先鞭をつけた『政治的ペスタロッツ』(1968)の著者ランクも日本語訳の申し入れをうけ、原著者として了承したものの、以後は応答がなかった、と82年に直接ランクから聞かされたことがある。編者の期待に反して日本語版はまだ実現していない。わが国では研究の戦略的手段となる翻訳でも国際間や研究者間の関係の思惑の断面が見え隠れする。

近年、スイス側では、ペスタロッツ研究所、チューリヒ大学のハーガーとトレーラーを中心にその周辺に歴然たる勢力が形成され、それが歴史事実への関心を示し、出版活動もしはじめた。ただ、その事例としての「新ペスタロッツ研究」シリーズ第1巻(1993)などは、妻アンナの手記を発表しながら、大部分がわが国にも2種の邦訳があるケーテ・ジルバーの1927年の論文の復刻が中心であり、第2巻(1994)は文献目録が中心であるなど、今だしの感ぬぐいえない。本格化は96年の生誕250年記念以降であり、たとえば、刊行物でいえば、全集補遺2巻、書簡1巻、ペスタロッツ宛て書簡約1,700通、6巻、索引版2巻、それにデュンクの校訂作業の遺稿11,494枚のカードなどに

よる文献目録2巻, といった計画がある。

96年1月12日, ペスタロッチの250回目の誕生日を機に開始された「記念年」の1年は, 50年ぶりの大行事だった。それはペスタロッチ研究所が統括し, 議会, 連邦内務省, 教育行政当局, 大学, 教育界, 学会, 経済団体, 労組, 福祉団体などが後援する形でオープニング行事, シンポジウム, 展覧会, 演劇上演, 史蹟顕彰にわたる40件が, 130万スイス・フラン(約1億3,000万円)の予算で実行され, その年間カレンダーも発行されていた。盛大な開幕行事には, 日本の旅行会社が募ったツアーもあったが, その翌日からの国際学術シンポジウムでは, ベルン留学中の伊藤敏子(九州産業経営大, 現三重大)とわたしの発表者以外に日本人は出ていなかった。このように「ペスタロッチ」は国際化のなかの日本の外国教育研究の経過, 姿勢, 実力がみえる窓でもある。

4: 転換に直面した旧東独の教育研究者たち — ドイツ民主共和国教育学アカデミー (APW) のゆくえ —

4.1: フンボルト大学のアイヒラー — シジフォスの石 —

転換後の旧東独の大学教師たちは, その「大学改革を解しかねている。」定年前の退職者を生む一方, 生き残りを賭ける「自己宣伝」や「他人の過去の掘り起こし」も入りみだれている。このような文言は, そのころ西側のふたりの知人が筆者に書いて寄越した手紙にもみられた。もちろん, マスコミでは, いまなお事実にとこと欠かないし, 冒頭に記した旧稿でもかなりふれた。今回の滞在・旅行地の決定も東ドイツ教育の終焉状況をとらえるため資料収集以上に直接その関係者に会うためだった。そしてベルリンで次の当事者に会った。1) かつてドイツ民主共和国教育学アカデミー (APW) のポストにありながら新体制にも編入された下部・中間層 2) 90年10月の統一後も大学教授職に残りながら公安警察への協力, いわゆるスタージ問題がからむ資格適確審査などの結果, 退任した上部層 3) 89年11月の転換直後に退任した最上部層。このほか, 4) 1) と逆にポストを失った者, 5) 新たに加わった若手に会った。

この1)の該当者にアイヒラー (W. Eichler) がいる。1935年生まれのかれは, 72年以降90年まで20年ちかくを教育学アカデミーにあった教育理論・教育史部門の研究員であり, グライフスヴァルトのボールト (R. Boldt) との共著『フレーベル』(1982)もある。85~89年にはその部門の副主任や教員養成部門主任を務めた。かれは, 共著『絶望とチャンス — ドイツ民主共和国の新旧学校カリキュラム構造化の試み—』³⁰⁾をもつが, これは教育学アカデミーの「教育学」の元副編集長で, 転換後しばらくマグデブルク工業大学の講師だったホルスト・アダム (H. Adam) との共同の仕事である。それは転換後大学支援関係に入ったブランシュヴァイク工業大学のホーフの監修する教育学叢書のひとつとして1990年に上梓された。ホーフの手紙によれば旧東独体制との不適合ゆえに出版できなかったのを救済したという。このアイヒラーとは小著『ペスタロッチとその読書』(1992)も同じシリーズに入った共通の機縁が幸いし, 訪問は容易に合意をされた。上の東独の

宮崎：ドイツの教育研究の現況

3人はかなり類似した立場にあり、ボルトからは92年に3種が開催されたコメニウス生誕400年の集会報告をうけたことがあった。

現在のアイヒラーの立場は、フンボルト大学でのいわゆる「第三方式プロジェクト」の雇員、つまり定員外、経常予算外の期限付き契約制の研究員である。通常、旧西のほとんどの大学ではその要員は教育・研究要員の名簿にのっているが、アイヒラーの場合はもちろん、フンボルト大学の講義目録ほかにもその名はない。しかし転換後のかれには、研究プロジェクトの要員としていわば陰の任務の一方で、旧東独教育学への清算作業の論及には目をみはるものがある。ノイナーが総裁、ギュンターが副総裁だったアカデミーの会議資料などを駆使して、その体制的「命令教育学」^{コマンド・ベグギング}のもとでの80年代後半の教育研究を「シジフォスの作業」にたとえながら、転換後はシジフォスが断崖の上までかつぎあげ、ひき落とされ、またそれを背負った「石」すらみあたらず環境だと告白する³¹⁾。

フンボルト大学の一般教育学の部門にあって、もうひとりの同僚と共同で使用しているかれの部屋には3回訪ねた。89年と90年の両年に出た会議資料、提言・論争文書など、なかにはアカデミーの所員としてのかれに直接配布された書類など約50点を貸与され、そのすべてをコピーにした。かれは、元はアカデミーにいて、いまは教育史研究図書館の中心にいるビーアヴァーゲンと、マールブルク大学の比較教育研究施設の、統一後改組整理されたが元東独研究部門にいたメスマー(H. Messmer)とともに、旧東独の関係資料の収集で最大の援助を受けた3人のうちのひとりである。訪問のたびにアイヒラーは友好的だったが、かれほど自分を語らず、寡黙のひとでも珍しかった。2回目のときプロジェクトの上司ベンナーが用件の連絡のため入室してきたのには驚き、別のときには、扉付き2本の書架に詰まった今世紀初頭の新教育の資料ファイルをみせられ、滞在研究者の限界を覚えたものである。最後の訪問での別れぎわ、契約が更新されて、来年もとどまれそうだ、と呟いたのがやきついている。失職の回避というより、当事者としての証人であり続けたいという希求なのだろう。

42：K教授－抵抗か弁護か－

90年10月の統一後の教育学アカデミー(APW)の解体、旧東独大学の教育研究体制の瓦解とその再組織化は、教育研究者に退任、追放、審査による再採用などの激変をもたらした。K教授とは州レベルや大学ごとに設置された教員招請委員会(Berufungskommission)の西側委員からその名を紹介されて接触したのがはじまりである。体制崩壊後半年ほどの1990年初夏にすでに手紙で接触し、以後92年末まで、3回交信した。それだけに今次の機会にかれとの面会を望んできた。かれらは90年夏と91年春には教育学アカデミーの数人の所員が出した「アド・ホック」(Ad Hoc)³²⁾の1年余のバック・ナンバー、教育学アカデミーのドキュメント、転換後にそこの若手改革派がだした小冊子3冊などを贈られた。当方の礼状にたいし先方は再度資料を送って以後途絶えた。92年には、かれからこちらの名を聞いたというその大学の留学生課の長がいうならば教育の自由市場へ参

入する国際化推進のためか日本人留学生を募る主旨の手紙を送ってきたことがある。93年と94年のこちらからの小稿別刷の送付や季節の挨拶にはもうK教授からは返事はこなくなった。

K教授は92年3月まで旧東独独自のドイツ教育学会(Deutsche Gesellschaft für Pädagogik)の設立から解散までその中心メンバーとして動いており、かれの名やその発言も年3回、2年間発行された会員通信や、西のドイツ教育学会(DGfE)が年2回出す「活動報告」で触れることができた。かれには、統一後の旧東独大学での数少ない留任者として、また学会設立運動とその2年後の瓦解を経験した中心的な当事者としてその面会には最大の期待をよせてきた。

94年6月中旬、ひとまず挨拶をとの思いでその大学の事務室へたち寄ったとき、そこで聞いたのは「三月で辞めた」だった。のちにこの驚きを西の大学の何人かにぶつけると、あれこれの反応があった。「大学間支援関係でこれまでに10回は会える機会があったが、一度も姿をみせなかった。」「スターズ問題だよ。例の『非公式協力者』という情報提供者のケースだよ」「追われていまは、ベルリンにいる」「ポツダムでいまはギムナジウムの教師をしているそうだ」といったことばがかえってきた。しかし、それ以上にはわれ関せずの様子で、そのこともよく理解できた。

たしかにベルリンの電話番号簿にも名はでていた。その雑誌論文でみても旧東独期の在職時以来その住所は東ベルリンだった。このようなかれに会うにはその前に順次訪ねるべきふたりの旧東独系の現職教授を挙げてくれたひともした。これは公平な尺度だが実行できなかった。その後4ヵ月間いたベルリンから手紙で面会を申し入れたが、やはり返事はなかった。さらにその1年半後、少時ベルリンにいたときもそのままにした。最近、知人が大学の法務担当者に照会してくれたその返信によると、かれの場合も「法的一般的な処理」とのことだった。旧東独学位制度への統一後の救済措置のひとつとしてそのいわゆる科学博士(Dr. sc.)が西側の教授資格相当とされ、フンボルト大学が承認した95年の8名のなかに、それを81年に取得したK教授の名が見いだされる³⁰⁾。なりゆきをみまもりたい。

43: ブランデンブルク州立教育研究所とエッガーズ —過去のない若手の事例—

東独の転換とその西独への統一後をめぐる西側諸州が注目していた州に、統一前の選挙で反動のメンタリティをみせた東側の3州の場合よりも、むしろ唯一の社会民主党政権州(旧西では13州の内9州)のブランデンブルグ州がある。このため、ベルリンの中心から40キロのルードヴィヒスフェルデにある州立教育研究所と所長ヤン・ホフマンを自由ベルリン大学のレンツェンの紹介の労で訪問する計画をたてた。かれは、90年10月初旬ミュンスターでベンナーらが「教育・陶冶理論・規範的教育学 —両ドイツ接近の試み—」³¹⁾のテーマで開催した円卓会議で、アドルノや、『うその祖国』の著者クリアなどを引用しつつ哲学者らしい鋭い論陣をはっていたからである。当時のかれはブランデンブルク州文部当局の専門職員(Referat)の地位にあった。壁の崩壊直後の旧東独の教育にジャーナリスティックな筆法を揮っていたティルマン(K.-J. Tillmann)所長が92年にビーレフェルトのラボールシューレ(実験学校)の継承者となって去ったあと、30代前半の若い所長となっ

宮崎：ドイツの教育研究の現況

た。残念ながらこのホフマンとは日程の手違い、かれの夏期休暇や渡米などのため会えなかったが、代わって若い研究者ゲルト・エッガーズ (G. Eggers) と、初回はその自宅で (6月26日)、2回目は研究所で (11月9日) 会い、その研究や実践の方向を聞き、10余冊の研究所の刊行物を受けたりした。

エッガーズと落ち合ったのは、旧東西ベルリンの境界に近い、あるカフェである。そこは、外国人の多いポツダム通りと繁華街クーダムの東端との中間点にあり、アルタナティブな催しや10種以上もの新聞も読めるかなりハイブrouな店だった。一応の話しのあと、番地を2つ離れたアパートへ案内された。そこは西ベルリンの文化の享受に便利な立地を夫人とともに選んだかに見えた。一目で東独のものとなる家具がしつらえられ、書架にはかれが卒業したフンボルト大学の時期のものらしい多くの教養書がつまっていた。かれからはその人柄の誠実さや几帳面さなど、西の若手研究者とは異なる精神内容や、その能力もふくめてかれがいまの勤務ポストをえた条件などを想像させられた。事実、この研究所での「将来に向けた回想 ―ドイツ民主共和国人民教育の研究史のために―」と題した92年1月の学会で、その直後に所長になるティルマンがした報告では、22名の募集に3分の1が旧東、残り3分の2が旧西から約1,000名の応募者があり、その50倍近い高率のなかにかれも入っていたのである。

この研究所は、その建築配置や敷地も物語るが、1871年に社会福祉施設として開設され、1962年に教員研修施設に転用された建物を使っている。91年に教育研究、学校相談、カリキュラム開発のほか、成人教育関係者への研修や活動援助、資料収集、数種の定期刊行物の刊行などを課題として発足した。そこには150名が宿泊可能な設備があり、州内で8カ所の支部をもつ中心である³⁹⁾。職員は、支部もあわせ研究員23人、事務員24人、技術部門23人をもつ。たとえば、その研修プログラムで1993年度前半期の活動をみれば、学校社会学、学校制度、学校管理、児童・生徒心理、教科教育など、本部で146講座、支部で416講座を開き、担当は前者では複数の場合が多く、なかには外国人もいる。参加は、本人が行政当局に申請し、旅費等は公費による研修体制がとられている³⁹⁾。ちなみにブランデンブルク州の人口は250万人である。

エッガーズは、月、火、木と研究所に宿泊する勤務形態とのこと、のちにそこを訪ねたとき、研究室はもうひとりの研究員と秘書担当者との3人で共同使用し、2台のコンピューターが設置されていた。壁面の書架にはほとんどが新刊書で、青少年研究や精神分析の関係が目についた。ことごとくが新しい時代と研究課題を映しだしているのはかれが新教科「生活形成、倫理、宗教」のカリキュラム開発に従事しているからである。91年10月に登場し、7～10学年対象のこの「生活形成科」は、かつての全体主義的な党と国家との指導性のもとで「公民科」や「防衛科」の政治的、軍事的教科にかわるニュー・フェイスとして登場した。プルラリズムの社会像や価値の多様化、いうならば旧西の新しい保守主義的方向を導入しながら「成熟への成長」を促す教育と、自他の認識や表現・理解へむけた生活形成の学習のカリキュラムである。

エッガーズのような若い層の研究者は、旧体制から受けた被害意識も新体制への不満も少ない。

むしろ新時代を課題として受けとめてスタートしている。そして1992年2月コメニウス生誕400年の記念にちなみ、「生活形成への参加」という呼びかけをし、その運動をフンボルト大学内に「科学哲学と人間存在発生論」^{フマン・オント・ゲネティック}にかかわる自主組織で進めた³⁷⁾。その当時かれは、過去をあいまいにする旧東独のドイツ教育学会(DGfP)の活動方向に反対して歴史の反省と透明化を求め、ついに解散に追い込んだヴェッセル(K. F. Wessel)らと行動をともにしていた。

旧東独の若手研究者は、資料やひとを紹介するのに旧東でなくむしろ旧西の場合にふれ、旧西から入ったひとや旧東に比較的擁護的な研究者の名やその論著を挙げることが多い。これは、3回訪ねたポツダム大学の助手の旧東独出身の若手にも顕著だった。しかし、エッガースは、公民科廃止後の脱イデオロギー化の方向や、党の支配下にあった人民教育省と教育学アカデミーとの支配-服従関係、その中枢にいたアカデミーの総裁ノイナー、教育学出版物の規制(検閲)などにふれ、当時の教育界の国際関係の閉鎖性、青少年教育の政治化の問題点も語った。それだけに旧西の研究傾向を受容する関心も高く、教育学アカデミーの末期の若手研究者による刊行物「ありのままに」(アド・ホック)の方向にも一定程度の評価を示したが、転換後の旧東地域の教育とその研究の可能性には非常に希望的な観測を披瀝した。

11月9日はエッガース、10日の午前中はベルリンでノイナー、同じ日の夜はマグデブルクでマロツキ、さらに11日から3日間は同地での中・東欧教育学の交流会議といった過密スケジュールのためには出席できなかった学会がひとつあった。9~11日のブランデンブルク州文部省主催の「ドイツ民主共和国の人民教育の歴史・構造・機能」と題した旧東独教育問題の第2回コッロキウムである。しかもそれは9日に訪ねた州教育研究所で開かれていた。3ヵ月後にその幹事(D. Kirchner)から送られてきたプログラムと報告書(13枚)によれば、この大会でも主催者側のブランデンブルク州女性文相が挨拶し、7つ部会の司会者のうち6つでたとえばテノルトなど旧西の教授が務めて、論議の進行方向を裏書きしていた。そのテーマではきわめて批判的な、次の問題提起をしている。

1)「学校内外の平和教育にみられた軍事的な特徴」2)「『諸民族友好と国家連帯』の名のもとで説かれた文化多元主義と文化間開放性というこの旧東独特の教育コンセプトへの疑問」3)「教員の組織化とキャリア形成への政治的誘導」4)「学校日常の政治化や公民科カリキュラムによる青少年の日常の歪曲」などがそれである。主催者の文部当局は、イヨネスコの演劇「禿の女歌手」を上演して激動を象徴化し、その最終総括では、生徒の作文や東から西へ追放された詩人ライナー・クンツェの文章をもちいながら、過去の旧体制への激烈な批判を吐露している³⁸⁾。

4.4: 「科学フォーラム: 教育と社会」 - 過去の残像と転進の試み

旧東独の研究機関の、若手層への影響に関心をもち、関係資料を求めていたとき、ある大学のいかにも有能そうな中年の女性秘書から小さな組織「科学フォーラム: 教育と社会」(Wissenschaftsforum - Bildung und Gesellschaft - : Wifo)を紹介され接触した。7月27日、その代表のひとりで旧東の経済学の教授資格(Dr. sc. oec.)をもつ女性研究者を訪ねた。ベルリンの中心から東

宮崎：ドイツの教育研究の現況

10キロ、リヒテンベルク地区の工場地帯の一角にその事務所はあった。もちろんその2時間の面談にこぎつけるまでにも双方は3回のファックス交信による日程調整をし、先方の積極さや好意にはこちらでも感謝した。所期の目的である旧東独教育体制の瓦解についての、質問のメモもあらかじめ郵送しておいた。

この科学フォーラムは、訪問してはじめてみた趣意書によれば、91年1月に12名のメンバーで設立されている。その目的は、ヨーロッパ・ユニオン（EU）の方向をにらんで、教育の経済関連分野、職業教育、地域開発の研究を重点にし、行政や企業、わけでも政党や労組などとの連携を意図している。このため、いわゆる随伴研究調査を行うコンサルタント業務や、ドイツの職業教育特有の学校内教育と企業内での実習生受け入れとのいわゆる^{デュアルシステム}二元方式の指導業務もする。

この自称「国際教育開発研究集団」は、そのほぼ全員が寄稿している『新たな挑戦を前にした教育と社会—教育論争集—』³⁹⁾(1991)でみると、統一学校とポリテクニズムの解体後の新生ドイツ民主共和国の中等教育への提言を企てていた。しかし、その資料の扱いや水準などには旧東独期との類似が容易に見て取れた。このフォーラムは、その代表が書くように、89年の転換以前にすでに関心を共有した研究者集団であり、「現実的社會主義の発展の40年にわたる人間形成要求とその変革過程での緊張」を、「なお今日有効とみる」集団である。それは、東西両独の個々の州、ヨーロッパ連合、さらには世界的規模での教育展望をめざすが、教育学アカデミーの分岐であり、それと完全に絶縁していない。したがって、かれらには89年の転換は、「強引な構造改革」と映り、そのアカデミーを中心に約1,000人がポストを失ったときの「清算の犠牲者」の意識がある。それだけに、旧西側のベルリン工業大学やフランクフルトの国際教育研究所の方向はかれらに敵対するものとして名指しで攻撃している。

この女性代表は、転換後の一時期、旧西ベルリンの連邦職業教育研究所（Bundesinstitut für Berufsbildung）に関係していた。そしてアメリカの職業教育論も仕上げ、90年9月段階では「日本の職業教育の伝統と将来」を寄せている。後者によれば日本の企業はその父権的社會の伝統を継承して従業員に日本的な「職業的社會化」を行い、また学校でも高校職業科の普通教養と専門技術とのカリキュラムは実際の職業能力を保持し、短大、高専卒業者も充実した企業内研修・教育で情報関連の分野などで成果をあげている、と評価する。日本が直面する問題点として先端企業の技術水準の保持、労働者の転職増加、潜在的労働能力の限界などを指摘するものの、日本の現実を学校と企業との連携、行政による研修機会の提供および労働時間削減への指導の事実や推進が十分機能するモデルとして評価している。そのみではない、後期中等教育と高等教育との高い進学率を教育機会の増加とみなし、地方教育委員会、職業安定所、企業の三者が継続的生涯教育のレベルで機能しているとまで賛美する。というのも、この論文は文部省の教育白書と通産省関係の報告とそれに依拠した参考文献で仕上げられたにすぎず、事実その研究水準と思想は教育学アカデミーが発行していた「比較教育」誌を出していない。また、その方向は逆説的にもドイツの保守政党、企業との重なりないしそれらへの接近も示していた³⁹⁾。

この科学フォーラムは、研究内容は別にして、東独の体制転換が教育研究者に生んだひとつの波紋として注目に値する。それは職業教育あるいは経済の教育支配の分野が、社会主義的計画経済の統制の枠からはずれず自由競争原理のまえに放出されたときの現象である。あるいは、研究者自身の活動と方向が党と行政の支配下から、その対極のいわば大学・研究所マーケットへ放出され、その前段でかれらの旧歴のチェックが導入されたケースでの激変だった。いうならばこの教育の「民活」は、学校教育の枠組みとその強制力の緩みや、教育・学習の内容、場所、時期、方法、担い手などの変動で進行した。この科学フォーラムに似た事例はのちに96年5月、「2000年ドイツ万博」の教育のテーマ・パークをめぐる会議が見本市都市ハノーバーの近くであったさいにも実際見聞した。万博への大企業やコンサルタントの盛んな参入指向のなかに、やはり野に落ちた旧東独大学の教育研究者が、その蓄積してきた潜在能力、たとえばドイツ語ーロシア語の外国語教育の活路を同様に対外関係の構築を要するロシア教育アカデミーの主脳や語学教育の関連団体とのあいだで共同行動の可能性をさぐっていた。

上の女性代表のあまりに高い日本評価は受容しにくく、40代はじめの学位ももつもうひとりの同席者の男性からもこちらが提出したメモに沿う「過去」は決して語ってもらえなかった。ことにその男性は、研究者特有の冷静さ、シニシズム、ユーモアなどとは無縁のひとにみえた。こちらが刺激した面もあったが、強弁や指導意識がめだった。ドイツ民主共和国の転換にかんする事項にはふれられず、他の研究者や機関の紹介もえられなかった。双方が聞き出したいことと言いかねること、彼我の関心ともちあわせとにはズレがありすぎた。

45：教育学アカデミー元総裁ノイナーー自己批判と自己主張ー（インタビュー）

11月10日、ようやくノイナーとの面談にこぎつけた。当日かれがもってきた2週間前のフランクフルター・ルントschau紙⁴¹⁾の言い方を借れば、かれは「ドイツ民主共和国教育（学）界の法王」だった。教育学アカデミーの総裁を1970年から89年まで20年、その前身のドイツ中央教育研究所の所長の地位を1961年から70年まで10年、つまり30年間の「法王」在位だった。

この面談の実現には以下のようなJ. シラーとの偶然と幸運がある。われわれとの面識はかれが所属した財団がリードして当時東西ドイツの教育界や学会の流行だった一般教育に関するシンポジウムが88年夏に旧帝国議会であり、たまたまそれに参加して以来である。元来、教育放送の番組製作者、ジャーナリスト出身のかれは、教育学アカデミー発行の雑誌「教育学」に壁の崩壊直後、西側からの最初の執筆者としてその一般教育論をよせていた。また、転換後、1908年のドイツ教員図書館を引き継いだアカデミーの文書館の資料をめぐり、西の教育史学会とのあいだでかなり複雑かつ激しい対立が生まれ、その過程でドイツ国際教育研究所に属して誕生することになった教育史研究図書館の設立準備委員会の委員長を務めたりした。それに、近年『プロイセンの生徒自殺ーその学校システムの反映かー』⁴²⁾（1992）という衝撃的な一書を死去直前のヘルムート・ベッカーの序文をのせて上梓している。いまは、旧東ベルリン地区の教員研修セミナーの担当者、あわせて往時

宮崎：ドイツの教育研究の現況

の御用新聞から新生なった「ドイツ教員新聞」(DLZ)の論壇の定期執筆担当者のひとりとして活動している。

このように旧東独の教育界とは特異な関係をもつシラーに、9月20日、その自宅に招かれて7年ぶりに多々話を聞いていたおり、「ノイナーに会うか、会うなら紹介する」、という望外の提案、その場で先方に電話され、こちらも代わって挨拶をした。ただ、そのときは、ノイナーには9月末ゲッティンゲンでヴェーニガー(E. Weniger)生誕100年記念の招待講演の先約があり、こちらも9月末にベルリンを去りマールブルクに入るため、50日後の11月10日、教育史研究図書館というなにかと縁のある場所に決定した。

この予定を知人に語って受けた反応には、さめたものと驚きとがあい半ばした。いつものことながら、面談の準備として、マールブルクの図書館でかれの論著の調査をし、質問事項をメモにしたためて郵送しておいた。そこでは、1)伝記的経歴、2)教育学中央研究所や教育学アカデミーと人民教育省との関係、3)教育理論とイデオロギー、4)転換後と今後の活動、の4つ分け、それぞれに4つないし5つの具体的な質問を併記しておいた。通常の面接では録音は重宝だが大げさだし、相手の発言に影響するので控えるが、今回はその機会の重要さからして申し入れ、了承された。当日、10時から12時すぎまで、提出しておいたペーパーにそって進められた90分間のテープは、ひとつのドキュメントとなったが、その「おこし」(トランスクリプション)は、容易でなかった。三転してフンボルト大学のテノルトの支援でA4サイズ22枚にされたが、当初の約束どおり、発表前にノイナー本人の下見を受けることになる。したがって、以下は、その内容の概略にとどめている。

ノイナーは、1929年ズデーテンランド、現在のチェコ西部に大工の息子として生まれ、その地で小学校、基幹学校、教員養成セミナーを修了した。戦後マルク・ブランデンブルク地方に家族が転居、少時農業に従事、47年再度教員養成コースを修え、のちにマグデブルクの中等学校での生物学と化学の教師や自由ドイツ少年団(FDJ)の活動をする。ノイナーの父親とその家族も左派民主主義の信奉者だったという。49年、ドイツ社会主義統一党(SED)に入党、同時に教員国家試験も修了し、担当教科の専攻でハッレ大学に入学した。しかし、そこでは人民教育に関心をもち、教育学専攻に転向する。52年に助手、このときの師が、のちにドルトムント大学へ移るベッカー(Hans-Herbert Becker)である。つづいてベルリンの旧教育学アカデミーの前身である中央教育研究所にはいった。53年にははやくも海外留学生に抜擢され、現在は旧名に復したサンクト・ペテルスブルク、往時のレニングラード教育大学で教育理論、教育史の教授ゴーラント(E. J. Gorant)とガネリーン(S. I. Ganerin)のもとで1930年代の教育、ことに青少年組織化運動を研究テーマに56年まで滞在した。

56年、レニングラードでスターリンの死とその批判を経験し、同年帰国、学位を取得した。57～58年を中心に展開された旧東ドイツ教育学のいわゆる「レヴィジョニズム」論争や分化型統一学校論に関与したが、そのときかれはドイツ中央教育研究所の雑誌「教育学」の編集局長であった。

32歳から41歳の1961年から70年にかけて中央教育研究所の所長、つづいてそれを解体拡大した教育学アカデミーの設立に中心的な役割を演じ、1979年9月から89年12月8日まで総裁の地位にあった。以上が、かれから直接語られた経歴である。面談の席上、クリュシュナーの『ドイツ学者年鑑』(1992年版)の該当記事のコピーを渡された。そこには上の事項以外に1970年のレニングラートでの教授資格取得、74年の科学技術国家賞とドイツ・アカデミー会員、79年ベヒャー賞、89年エルンスト・ヘッケル・メダルといった「榮譽」が記るされていた。

教育研究がイデオロギーと政策とに支配され従属する関係を構築し強化する中枢にいたノイナーの重みは、文部省、正確には人民教育省とその傘下の7つのアカデミーのひとつであり、人民教育の行政的科学的イデオロギーの側面を担った教育学アカデミーの総裁の地位が端的に示している。この関係をかれは文部省の教育学アカデミーにたいする影響力の大きさと、後者の前者への「依存」や部分的であれみられた両者の「共同決定」が研究を強力に政策化して実行に移し、教育の理論と実践を緊密に結びつけた、と積極的に評価した。そして、統一学校やポリテクニズムの成果の例証としてカールマルクスの都市にちなむカールマルクスシュタット(ケムニッツ)の名をあげた。

その一方で裏面の「証言」をしてくれたのが、かれが接触したふたりの政治家にたいする相反する評価である。ひとり、ドイツ中央教育研究所の所長と教育学アカデミーの総裁の30年の期間が重なる文相在位27年間のホーネッカー夫人マルゴット・ホーネッカー、もうひとり、1953～61年東ベルリンの自由ドイツ青少年団の代表をつとめ、15年間ドレスデンのドイツ社会主義統一党の代表だったハンス・モドロウについてであり、そこでもった「問題点と葛藤」である。ノイナーは、この女性文相を「^{マッハチ}権力的、^{ゼルフスベフスト}自信家、^{アイゲンヴィリヒ}我執の強い人物」と表現し、「ホーネッカー一族の権力のしがらみ」でかの女との緊張状態に「戦略を強いられた」と告白した。これに対しかれが「ドイツのゴルバチョフ」というモドロウとはいまなお良好な関係をもち、ドレスデンではかれが人民教育省にたいする「防波堤」となって省の承認なくして不可能だった教育研究が進められた、という。このとき、ノイナーは生き残ったが、かれの師ベッカーは西へ追われた。

ドイツ民主共和国の体制下では教育の自由な学問的論議をする組織体としての学会はなかった。それは許可されず、必要もなかった。あったのは不定期開催の^{ベグゴークンターク}教育大会である。ウルプリヒトの生前は自由な論議の余地もあったが、ホーネッカー体制の経済優先策で歪曲された教育政策は、マルゴット・ホーネッカー文相のもとで「ネオ・スターリニズム」を強めた。80年代の第7～9回大会のころには「発言は人民教育省にコントロールされ」「旧態依然の政治行事と全員一致の儀式と化していた。」80年代後半、ノイナーをはじめ教育学アカデミーで一般教育、分化型統一学校、才能開発といったテーマへの関心が強まったが、ドイツ社会主義統一党指導下の政治・経済優先路線は停滞し、加えて「アンチ・ゴルバチョフ」の風潮は、教育改革の進行にも逆向きに作用した。学校改革もカリキュラム改造も、「下から」でなくむしろ集権的に党と行政の「上から」の指導体制に組み入れられていた。このように語ってノイナーは、「わたしはゴルバチョフのこどもだ」「政治的には当時のソビエトの方がマシだった」といった。教育研究の中枢からも、党と人民教育省か

宮崎：ドイツの教育研究の現況

らも隔たったその頃の自分を「まるで遠い異国にいるかのようにだった」という言い方をした。

以上、キャリアに関する回答に続き、その教育学理論の展開を聞いた。「ブルジョア教育学」と「マルキシズム教育学」この二元的定式化をもって30歳以前に頭角をあらわしたノイナーは、主として1950年代後半のハッレのころと、89年の終局段階の2点について語った。まず、ソビエトからのこの新帰朝者は、以前のハッレのふたりの師と対立した。すなわち、親ソ的でないベッカーを批判して西へ追い、さらに、かれ自身そのもとにいたともいうペーター・ペテルゼンを、その教師中心的教育過程論は部分的に受容しながらも、「現実性のない観念的改革論」として排斥した。それはイエナの学統の保持し、ナチズムにつまづきながらもそのあとの再起を期して今世紀^{レフォルメダゴギー}新教育の最終コースの位置にいたペテルゼンへの致命的な打撃でもあったが、旧東独転換後の新教育復興の趨勢からみるとノイナー自身への断罪となる。この当時のかれの動きは、東独版『教育史』の編者アールベックや、マルクス・レーニン主義心理学者ビルネフェルトとの緊密な連携の結果だった、という。かれはスターリン批判の嵐のなかで、当時のソビエト教育学を「こどもなき教育学」と考えてその全面的受容を拒み、むしろ青少年運動への関心を高め、青少年の「自己活動性」を改革の条件だとみた。そしてこのドイツ民主共和国の教育学を、マルクス・レーニン主義的にいわば理論的ドグマチズムと実践運動とを政策的に位置づける政治的教育学に転ぜしめた。これは1930年代のソ連の場合に等しく、客観的状況への対応や歴史・社会的責任に関しても限界をもった。ノイナーはそれを「いまなお残る自己批判だ」という。

1989年のドイツ民主共和国の終局段階では、マルクス・レーニン主義教育学の進路について多々論争されたが、ノイナーは若手を中心にした「ありのままに」(アド・ホック)誌にいた面々の離反や、かれが評価するモドロウの政治路線の途絶には不満を表明し、むしろその「改革」はなお続行中だと強調した。換言すれば、ノイナーと教育学アカデミーとはホーネッカーの政治体制の犠牲者であり、モドロウをその東独体制崩壊の単なる処理内閣の首班ではなかった、と表明する。

89年以後2、3年の沈黙のあと、92年ごろから60歳代半ばのノイナーは、論文発表やシンポジウムなどへの参加で復活の気運をみせはじめる。そこには東独社会の旧共産党系のもりかえしとの平行関係や背景もあろう。今回かれから贈られた1冊『マルキシズムの人間像ーひとつのユートピアカー』(1993)に、マルクス・エンゲルス財団主催のコロッキウムで発表したかれの論文「有力と無力のあいだの教育学」が収録されていたのもその一例であろう⁴³⁾。

このため、東の崩壊とその西への統合後の数年の経過のなかで、ノイナーが現在もつドイツ教育学への評価や見解をただした。たしかにかれは西の論議よりはやく、70年代後半以降一貫してあくまで社会主義的な一般教育論の主張者だった。かれはその『社会主義的人格』(1975)『社会主義的モラル』(1976)のように全面発達論と集団主義を基調にしてレーニンやテールマンの政治的、教育的遺産を評価し、70年代の東独やソ連の党大会の方針に指導されてみずからを合理化する論調を張りながら、その活動をイデオロギー的正統化へむけた闘争ととらえていた。また、青少年とそ

の親、教師や党活動家にむけてその日常の教育を『第二の誕生』とするメッセージを発したりし、70年代後半の40代半ばのノイナーは教育界のひとつの頂点にいただけでなく⁴⁴⁾、その一般教育論の総括を、89年10月、壁の崩壊1ヵ月まえにひとつの決算書としてしあげた。そこでも社会主義的一般教育論のみが全面調和的な発達を保障し、かつ国際的連帯の条件となる構想をうちだし、それを教育学アカデミーの基本路線にしようとしていた。このいわば「教書」成立については転換直後そこから2年にわたり発行された「アド・ホック」の編者ふたりに謝意を表している⁴⁵⁾。

「国家教育学」「命令教育学」の定式化のように集権的、強権的になったホーネッカー体制下での学校と青少年運動は政治化され軍事化された。ノイナーは、東独教育理論が党と人民教育省と教育学アカデミーとの三者のヒエラルキーのもとで進行した事実はみとめた。しかし、このような中央集権的な傾斜による教育支配の実態は現代のドイツや日本の教育システムも無縁でないといい、連邦文相会議を「全体主義」^{トタリタリズムス}とまで断罪した。

ノイナーには、「転換」^{ヴェンデ}は西のシステムによる東のそれへの「殴り込み」^{カールシュラック}であり、東の学校、社会教育、大学等の、西による「植民地化」^{コロニアリゼーション}に等しい。したがって、そこにおける東の指導層の「追放」はドイツにとってむしろマイナスだと評価した。問題は、経済体制の打破や経済格差の実態により「精神的支柱の喪失」にあり、このほうがむしろ深刻である。これを裏付けするために、かれは東の市民による西の学校にたいする評価は、1991年と93年とでは半減した調査事実や、産業経済界で東独出身者がうける高い評価をあげ、それが旧東独の中等教育の道徳的、技術的優位によるとし、一貫して旧東独の罪よりも功を主張した。

このインタビューの2ヵ月前に、シラーを訪ねたとき、ノイナーが「ドイツ民主共和国の教育における古典的理論との連続性とその変容」⁴⁶⁾と題し、かれ本人が「議論の刺激のために、ノイナー、1994年7月23日」としたためたゲラ刷りを貰い受けたことがあった。それを東西ふたりの研究者に見せると、ふたりともコピーをとったが、その年末にはドイツ教育学の幼児教育部門の代表のノイマン(K. Neumann)らが編集して『ドイツ連邦共和国とドイツ民主主義共和国の教育と教育学』第1巻に収録されていた。ここには92年のコロッキウムの発表をさらに進めて古典教育学の系譜と一般教育の基礎理論や、フンボルト、ヘーゲル、マルクスが重視され、批判理論とイデオロギー批判という東独側の教育学のアキレス腱ないし弱点を意識化し、反近代にたいする近代の擁護の立場に接近している⁴⁶⁾。

最後に、ノイナー個人の活動の将来展望をたずねた。研究に旺盛さと自信を示し、旧東独の政治上、研究上の回顧録・伝記を書く計画をはなしてくれた。その主題は東独と東欧の挫折の原因、マルキシズムの検討、東西イデオロギーの比較、学校イデオロギーの究明などだという。そして、ネガティブな経験ふくめてすべてを書くこと、これが自分の学問上の義務だといって面談をしめくくった。この自伝のことは、シラーからの95年はじめの手紙でも知らされたが、同年11月14日のミッター(W. Mitter)の手紙でもかれが編集してその国際教育研究所の「ドイツ教育史研究資料叢書」に容れて発行される、という。事実、96年に『科学と政治との間』(Zwischen Wissenschaft und

Politik) と題して上梓された。

思えば、1982年秋、ペスタロッチの読書ノートのうち7枚のマニスクリプトの複写を入手するために、教育学アカデミーのアルヒーフがもつ人民教育省を西ベルリンから訪ねたことがあった。こちらの照会にたいする先方の返書を提示したが、初日はその入り口脇の小部屋で、実はここがポイントだが、同席する複数の係員に聞き取りを受けた。指定されたとおり翌日と翌々日に足を運んだにもかかわらず担当者不在を理由に提供されなかった。後日、電話でも数回のかけなおしの指示を受け、1ヵ月後に郵送されてきたことがあった。指定どおり50マルクの代金を銀行から送ったが、当時のチューリヒ中央図書館の同種の代金の15倍はした。これらは先方の、外国との接触への警戒がむしろその内部で行なわれ、かつ芳しくない経済事情があるという先方の問題のためだっただろう。もしこちらが西独人なら提供されなかっただろうと、マールブルクの当時の東独研究部門のスタッフはいった。面会場所がアカデミーの旧蔵書を中心に約64万冊が移管される教育史研究図書館に指定されたのも皮肉だった。10年余りたっているその当時の首脳と会っているなど、隔世の観がある。

ノイナーは、身長約170センチ、筋肉質で血色のいい角ばった顔、豊かな髪にひげをたくわえ、精力と落ち着きをかねそなえた風貌のひとだった。チャコールのツイードの上着、同じチェックのシャツにノーネクタイ、黒いショルダーをかけて図書館にみえた。終始豊かな声量と安定したテンポでの2時間に及ぶ回答には、こちらのことばなどへの配慮もあっただろうが、大胆な断定やユーモアがおり混ぜられた。たとえば、教育の分野での旧東の研究者の追放で、唯一の例外はこの図書館の実質的な長で、先刻あいさつにみえたビーアヴァーゲンだけだとか、転換直前のデモには教師をしているかれの娘も出かけていったとあって笑った。「なぜ、日本には副総裁のギュンターがきてあなたがこなかったのか」と問うと、それは人民教育省よりむしろ外務省筋の決定であり、資金問題もあったという。ノイナーの担当国は中国、ベトナム、北朝鮮で、一段上の使命をもっていたのである。この教育史家ギュンターは、こどものころから今日まで日記をつけており、これこそが「真の教育史家」だと笑わせた。また、一般教育論では、西のクラフキは東の自分とは盟友であり、かつライバルだった、といった。しかし、その10日後、かれのヴェーニガー100年講演の別刷り⁴⁾を託されてマールブルクのクラフキ宅で渡そうとしたら、きみにあげるとまでいわれてしまった。当然である。クラフキは壁崩壊の直前会長だったドイツ教育学会が、ノイナーを西に招こうとしたが、理不尽に政治的に拒まれたことがあったからであろう。それにかれは、自他ともに認めるヴェーニガー門下の正嫡であり、後日かれの周辺で回顧的論考がものされたからである。

5：シュールプフォルタ校 ―伝統的名門ギムナジウムとニーチェ―

後述する(Ⅱ1)ように、マグデブルクでの11月11、12日の教育比較史の会議とドレスデンでの15～19日の家族問題の国際集会およびドイツ教育学会系の幼年期教育部会大会との間には2日間の

空きがあった。このため、地理的にも旧東独の東部地方にドイツ屈指の名門ギムナジウムであるシュールプフォルタ校の訪問を恰好の目標として設定できた。12日午後には、マグデブルク大学の学会事務局の幹事で、地方教育史が専門のベチャー(L. Böttcher)による市内案内のプログラムがあったが、断念して一路南へ向かった。ルターの生没地アイスレーベン、フランケの活動地ハッレを経由しながらニーチェの生家の教会の所在地レッケンをとおり、そこから10数キロのノヴァーリスの墓地のあるヴァイセンフェルスのルートをとる。最後に、距離にして約160キロ、ナウンブルクに入る。そこがニーチェが5歳から15年間育った町であり、その近郊にかれも生徒だったシュールプフォルタ校がある。打合せた訪問日時は14日10時である。それを終え、午後のかれの旧居をみたあと200キロ東のドレスデンに向かう。そして大都市に用件のあるときの通例だが、アウトバーンは目的地のひとつ、ふたつ手前か通過後に出て宿泊する。これが自然、人情、安さがえられるクルマ旅行のメリットである。

シュールプフォルタ校参観という、教育史の学徒やニーチェの読者なら願ってもない話を聞いたのは、イエナでフリートリヒとの再会を約しての別れぎわ、7月のことだった。その校長は知人だから、希望するなら紹介すると言ってもらったのが機縁である。ちょうど1ヵ月前の10月15日は、ニーチェの生誕150年祭だった。そのころ、新聞の文化欄では全体主義の行く末や教養主義の衰微、とりわけ近代の時代診断とそのあと(ポスト)について、ニーチェへの評価が浮上していた²⁶⁾。かかる評論をカーラジオから流れるワーグナーの音楽とともに耳にすると、読書行為をこえたことばと音楽とスピードとの交錯に襲われるものだ。旧東独圏ではここ半世紀その遺産や評価も黙殺されてきただけにこの「闇の思想家」(ハバーマス)ニーチェの顔は一層暗い⁴⁰⁾。

ドイツを代表するこの人文的ギムナジウムからは、クロプシュトック、フィヒテ、シュレーゲル兄弟、ランケ、カール・ランプレヒトなどが巣立っている。1993年5月の創立450年祭にさいしては2種類の記念切手が発行された。元来12世紀の修道院の、近代における学校への転用だが、その学校名の原型「シュールプフォルタ」(Schulpforta(e))、つまり「校門」が所在地の地名と重ねられている。平坦な農村の山ぎわに修道院としての自給自足にたる広大な敷地をもち、その外部が東独体制の遺物か、整備のわるい製材工場とその木材置場のようになっていた。それでも頑丈な石材塀でかこまれた構内には教会とともに、校舎、生徒寮、教員住宅を基本にした3、4階建ての石造建築がその威容を誇っている。郵便局、レストラン、墓地まで目に入った。いまは女子寮の建物の方が大きいのは、49年の共学化、81年の言語、82年の音楽の特修課程により女生徒が多数派になったからである。石造り4階建ての南方前面はゴシックの華麗なファサードをもち、採光の関係か、エル字型に教室の配置があり、逆に背面に生徒が管理する図書室、ほの暗いカフェテリア、教科別教員室が配してある。

シュールプフォルタは、かつてケプラーやヘルダーリンも学び、ヘルマン・ヘッセがその作品『知と愛ーナルチスとゴルトムントー』で自伝的にその学校生活の青春を描いているマウルブロン

宮崎：ドイツの教育研究の現況

の修道院のもつ木造で平面的、かつ狭い凹地におしこんだようなおもむきとは異なり、なにより規模がちがう。現在、後者がユースホステルなら前者は修道院から学校へ転用された新しさと堅牢さをもっていた。玄関を入って、ロビーの中央にはフィヒテの胸像があり、かれが「教師にはその生徒に越えられるのを喜ばぬ者はいない」と出藍の誉れを語る銘版がはめこまれていた。現今の教育ジャーナリズムでは、ルター、フィヒテ、ニーチェなどの評判は、権威主義、厳格主義、エリート主義として芳しくないが、その分、伝統的学校、18世紀新人文主義の典型をみる思いがした。教室ひとつ分はある校長室の壁面にそれとわかる数人の卒業生の歴史的人物の肖像額をみたときも同じだった。

長身瘦躯、40歳前後のビューフセンシュツ（K.Büchschütz）校長は、こちらが提出したメモの質問のなかみよりも、自分の言い分の方をなめらかに語った。たとえば、この学校の指導理念は、フィロロギー（言語中心主義）からナチスと旧ドイツ民主共和国のイデオロギーへ、そして今日のテクノロジーへ移行したと定式化した。こちらが聞きたい事項として、エリート高校としての旧東独時代の卒業生の進路先、入学基準、転換と統一後における教員の移動などがあったが、むしろ校長は過去よりも現状と抱負の方を前年の450年祭の4日間に音楽課程の生徒の演奏をCDにしたというのをかけながら1時間あまり語った。

この生徒は、ザクセン・アンハルト州の公立学校生として第9学年時に入学し、12学年まで在学する。ドイツの方式としてその卒業認定と成績が大学入学資格となり志望大学への入学のきめてとなる。92年からは週38時間5日制の一般基準が導入された。教育の基本方針および将来展望としては、450年祭のときのこの校長の説明文書にもいう、「確固たる全寮制教育の推進、確実な知的・技術的基礎能力、社会性の形成」が強調されている。伝統的、エリート主義的ギムナジウム教育のカリキュラムの条件は一般教養重視にあるが、それは、言語、自然・技術、芸術の3分野で構成され、さらに限定すれば、外国語、数理、音楽の教養が重きをなす。ただ、その言語教育には、ギリシア・ラテン語の古典語より近代語の優勢はもちろんだが、旧東独期に第5学年から必須だったロシア語の位置は低下し、統一後は英語が上昇した。また、入学2年目にあたる10学年でアメリカ、カナダ、オーストラリアの非ヨーロッパの英語圏への留学という新たな現象がみえる。往時の統一学校制度（EOS）のなかで労働と集団が強調され、シャベルをかついだ行進も、いまやコーラスを中心とした芸術活動に代わった。旧東独期のイデオロギー的政治性に代わって言語的審美的教養主義や自治活動での社会性が、卒業評価ないし大学入学資格の入手でも重視されている。

構内にはカリキュラムが学校環境に端的に反映するような運動場・グラウンドはみあたらず、建造後150年のその体育館も、いまは一層その利用価値を落としている。修道院の跡を留める礼拝堂は、この学校の象徴的な場所だが、校長もいったように、宗教教育でなく人文教育こそシュールプフォルタの原型であった。その礼拝堂に隣接して10平方メートルほどの小部屋が設えられていたが、それは、生徒への懲罰と反省の促しのために使われたかつての幽閉室であった。ニーチェが生

徒としてその断片的自伝⁴⁹⁾に記しているような宗教およびそこからくる鍛練的な道德教育の往時の様相はない。その後の学校でもむしろ典型的だったにちがいないナチズムと Kommunismus の政治イデオロギーの洗礼も、いまは払拭されてない。ただ、その一方で、信仰と宗派の決定をめぐる17歳以後の当事者の自由権の法的規定も影響して、ごく一部の生徒とはいえ、その礼拝室は使われている、という。一般情況として学校内宗教教育の後退への歯止めないし危機感があり、たとえば、絶対的プロテスタント州ともいえるこのザクセン・アンハルト州ではカトリック側が州当局とのあいだで協定して新規に参入してきた。それだけにこのシュールプフォルタ校の宗教教育のいくえは外部からも注視されている。ちなみに隣州ブランデンブルグ州での生活形成科の登場は、旧東独期の政治教育の廃棄と宗教教育の世俗化の代替物、あるいは両者の道德教育への変質となる面をみせている。

ドイツ民主共和国のような統制的な体制下ではこの学校のごときエリート校は教員を中心に体制のモデル校とされやすい。だからこそ往時は公民科や防衛科も重視された。転換後の教員は、芸術系の教員を除き行政がほぼ全員の転出をさせたという。しかし、禁欲と鍛練との450年の中等教育の歴史心性は、旧西よりもこの旧東に存続し、敢えていえば、その社会主義的集団主義のほうに適合する教育の内容と方法を多くもっていた。背後に栄光と名声を担うこの名門校の校長は、エリート主義教育を否定しなかった。たとえ外部の反対があっても気にしない、と語った。

この学校は、ここ200年間、最初はザクセン、次はプロイセン、いまはザクセン・アンハルトの公立校として変転してきた。2次大戦後の当初は1学年1クラス、4学年制、ギムナジウムの後期段階では最小規模の学校だったが、現在は1学年2クラス、生徒総数350名の在籍である。1994年度の入学選抜には、募集80名にたいし120名が応募、出願者のほとんどが出身学校内でトップの生徒だったという。その選考は、出身校内申書、作文および口述試験の3種類で行われた。在校生の男女比は、女子6割、男子4割、この人文系の名門校の男子は、もはや女子に圧倒されている。また、生徒の出身地はザクセンとチューリンゲン地方が多く、ベルリンからも目立っている。統一後の学校5日制の徹底とともにこの学校の生徒の出身地への週末の帰省が重要となり、片道3時間が「通学圏」とのことだった。そのかぎりではここでも確固たる全寮制はゆらいでいる。

また、生徒の出身階層では大差はない。むしろ文字どおりの育英奨学金の受給者が多く、学校納付金も、たとえば全寮制の寮費月額200マルク(1万4千円)である。ちなみに88年、今日のドイツ田園教育運動にも関与するザイデル(O. Seydel)が教員をする南独のザーレム(Salem)校を訪ね、城館を使ったその建築設備、自然環境、生徒の国際性、出身階層に驚嘆したことがあったが、カール・ベッカー、ヘンティヒ、あるいはリヒャルト・ヴァイツデッカーなどの、その出身校の費用は寄付金を含め月額3,000マルクを要する⁵⁰⁾。これにくらべれば、シュールプフォルタはまったく普通の学校である。修道院と城館、450年と60年、公立と私立、旧東と旧西、いうならば高校段階と小・中・高一貫、これらの差は大きい。旧東独下の政治教育へのアレルギーから癒えていかに社会化されるか、100年間、新教育、ナチズム、Kommunismus のなかにあっただけではなく、

宮崎：ドイツの教育研究の現況

長い伝統と旧東独の現状との狭間にあるシュールプフォルタは重い課題を担っている。教員も生徒も総じて地味だったが、ふたたび脚光をあびる学校であるに違いない。このふたつの学校や、ベルリンのダーレムやポツダムに近いマーロウなど、5つの名門ギムナジウムが連合組織をつくる報道などに触れると、統一後の教育の一面にみえる伝統保守の回帰は小さくない。

校長による説明のあと、学校文書館に連れられ、そこの2名の係員のうち若い女性から多々興味深い案内をうけた。その書庫の400年間の蔵書は教育内容や教師・生徒の水準を示すに足るものだった。所望してニーチェの入学のさいの内申書や、ギリシャ語とラテン語で書かれた学校卒業論文の現物、さらには成績証明書コピーもみせてもらった。ドイツ語とラテン語は秀、ギリシャ語は優、宗教・倫理は「勤勉」、数学は可、ヘブライ語は不可だった。その死亡通知もみせられた。ここを参観する準備にマールブルクの図書館にあった1920年代の『シュールプフォルタ校卒業生総覧』には「精神心理疾患^{プシキッシュクランク}」とでていた。

体育館と校舎にはさまれた西側の荒地に学校墓地があり、教会の壁面によくみられるような正装した等身大の男性の像があったが、それはこの学校の元教師のものだとおしえられた。ライプチヒ大学の文化史家カール・ランプレヒトはこの母校に自分の墓碑を残している。学校の物置は、鉄筋建築ならさしずめ地下室だが、ここで案内された別棟の木造の内部には驚いた。そこには水は枯れ使用されていないが大じかけの水車がそのままにあった。動力庫として修道院以来の必須の設備だったのである。

玄関の受け付けで学校説明の記念出版物やパンフレット⁶¹⁾、ポスターや絵はがきのセットを購入、イエナのフリートリヒに電話で謝礼と再訪の不能をつたえドレスデンへ向かった。

II. 学会・会議参加

1：マゲデブルク大学教育史・比較教育講座主催国際コロキウム「伝統と革新の間の社会転換期の教育学」(Pädagogik zwischen Tradition und Wandel in Zeiten gesellschaftlicher Umbrüche) 1994年11月11～12日；マゲデブルク大学精神・社会・教育科学部教育学棟

ー東欧と西欧との仲介点としてのマゲデブルクー

この大会には、ふたつの東西、ドイツの東西とヨーロッパの東西、つまり旧東独と旧西独、東欧と西欧からの教育研究者が、歴史、地理、思想などで、その結節点であろうとするマゲデブルクに集まった。転換期のさなか招待された各国のひとつには、華やきなどは無縁で、当初はそれぞれ数人のかたまりだけが目についた。発表者の外国ゲストとしてはバルト諸国からはエストニアからの1名とリトアニアからの2名、ポーランドから3名、チェコから3名、それに旧ソビエト解体後のロシアからはモスクワの3名と白ロシアからのミンスクの1名が招かれた。

この「国際対話集会」の基本趣旨は、北・中欧圏の参加者には、コミュニズム、全体主義、社会

主義、いいかえればソビエト体制70年、ナチズム20年、旧東独40年のもとの独占的「科学」政策で「認識関心」が抑圧され歪曲されていた過去を持ち寄った点検にあった。とりわけその体制の混乱や崩壊のなか、かつての一筋の光明をもった研究の紹介や、ヨーロッパの今日の新秩序の意識化にあった。プログラムには、ゲストの12件と、姉妹提携をするブランシュヴァイク工業大学からの2件、さらに旧西側の4件、主催校からの4件が配置され、その順番で発表された。かれらはようやくその重い口を開き、ソ連やドイツの支配下の過去にもふれ、現在の社会・経済的苦況、外交・軍事的枠組みの変動のなかにある教育研究の現状報告をした。主催校の関係者は東・中欧や旧西独への方向のとりかたを問い、旧西側はそれに一種の指導性を発揮していた。

リトアニアからは、シュプランガーやペテルゼンの早くからの受容がつかえられ、ポーランドからは、ドイツ側の広範多様な影響の一方で、固有の言語と社会文化の自覚や教育の民族的抵抗運動の歴史的過去も報告された。旧西独側はポーランドへのイエナ・プランの影響を事例的に詳論したり(H. Retter)、今世紀の教育史記述の方法やその主題の変遷を類型化したりした(R. Keck)。フロアからの発言には、ホーフらの旧西独側の啓発指導意識がうかがえ、なかでもケックはドイツ教育学会の総合研究「教育学のスタートか」で「ドイツ民主共和国の教育研究者奨励のために」を担当し、それを旧東独大学を去った人とともに執筆してただけによく発言していた。

チェコのコメニウス研究所からきた若手の発表には他国を凌ぐ意欲がみえ、ドイツ側とロシア側にも説得的だったと思う。チェコの外国語教育が経験したドイツ語とロシア語による支配史も語られた。また、往時のチェコの「新教育」は国際的地平にあり、かつ芸術教育に傾斜したが、実はその遺産が戦後教育を社会批判やエコロジーへ導き、よい意味での「^{グイミル}夢みる人々^{タチ}」の源泉になったという。なかでも「コメニウスは伝統にすぎないか」の発表ではコメニウスが歴史に浮上するサイクルとダイナミズムは、近代ヨーロッパの国家主義と国民文化まえの境界石をこえてヨーロッパの視野に入るときの現象だとし、それが今日のポスト・モダンと結びつくという提起がされた(J. Beneš)。

ロシア側の3件と旧東独側の2件による現状紹介や、それへの他国からの反応は予想どおりだった。「現代ロシアの教育理論の強調点」と題したロシア教育学アカデミーのピリポフスキー(V. J. Pilipovski)の発表は、その方向を1)スラブ的ノスタルジー 2)社会的ヒューマニズム 3)ラディカル・リベラリズムに類型化した。この3つは現代ロシアの教育理論としてロシア的行動・思考様式、市場経済化、個別的業績原理といった強調点のありかの反映である。ドイツ語代読だった年配教授の報告「ロシア教育の人間化」は、ソビエト心理学の教授・学習行動への適用という従来の体制下の公式的言説に近いようにみえた。また、自分の実践課題を英語で語った若手は、ロシア教育のパラダイム変容の方向をモンテッソーリ、シュタイナー、あるいはユネスコ型の生涯教育論の方向に近づけていた。前者は上の2)に、後者は1)と3)の混合型ともとれた。

このあと、現地で滞在研究をした西ドイツ側の若い女性研究者は、現代モスクワの青少年の表象

宮崎：ドイツの教育研究の現況

表現にみられる個人主義的特性に学校と家庭の既成秩序の弛緩と再生の両面を指摘した。これは上の3)に近い。これらロシア側にチェコ側を加えた発表の若干には、その半年前のドイツ教育学会の統一テーマ「ヨーロッパの教育」への参入がみてとれた。また、これには外国語教育、開放性、ヨーロッパ理念、全日制学校、エコロジーの5つを重点目標にする西側からの「ヨーロッパ学校」の実践報告も関連があるかにみえた。

4回目の休憩後の最終場面では、旧東独出身者でマグデブルクの心理学の女性教授トペル(R. Topel)が、発達をめぐるソビエト心理学とヨーロッパ心理学との差を、哲学的弁証法的全体性と経験的分析性、人格の歴史社会的文脈での把握と人間学的内在性の強調、集団と個人、環境と素質、活動能力と認知能力、実験心理学と分析的心理学、ヴィゴツキーとピアジェのごとく対比し、前者を批判、後者を受容する立場を示した。当然、これにはロシア側の女性教授が伴ってきた通訳をとおして反対声明を読ませたが、再度トペルは立ち、「ソビエト心理学は受入れられません。イリュージョンです。もう過ぎ去ったきのうのシーンです」といいきった。会場を出ての帰り道、かの女が、「中国からですか」と声をかけてきた。「日本からです。それにしてもあなたの発言は重要です。精神分析なども大差があるでしょうね。日本では近年ユンクばかり。ドイツの図書館のカードでみたフロイトとユンクの割合はおもしろいです。日本の場合は逆ですから」というと、かの女は、「わたしが以前モスクワ大学での留学中にみたのは、精神分析の本は2冊だけでした」といった。

今回、外国からの発表者が使用した言語や、配布資料のない運営には、参加者の不慣れも手伝ってか少々難儀し、それが議論にとっての障壁や今後の課題を示したのも事実である。しかし、反面で発言を活発にし、目的の「国際対話集会」への招待は成功した。近時のドイツ比較教育学会やドイツ教育学会の大会ですでに発表している3人の問題関心や表現方式はドイツ側に近く、優勢さをみせた。総括討議を主宰したゴルツのキーワードは、「パラダイム変容」「イノベーション」「ルネサンス」となり、今後の協調可能性を求めてバルト諸国、ポーランド、チェコ、ロシアのそれぞれの代表世話人がえらばれた。この2日間の大会では報告しなかったにしろ、その趣旨と主題に賛同して参加したひとを含め合計31編を収録した論文集『中・東欧の新教育と教育改革』(1995)が半年後に刊行された。

傍聴者だった私にはこの会議につき2,000語の一文を提出するようゴルツから「宿題」が出された。それはマグデブルクの「大学新聞」につかわれている。また、若干補充して上記の論文集にも収録されている⁵²⁾。こちらはトペルの、心理学をめぐる宗主国・属国としてのソ連・東独の関係の背景、外国滞在研究、留学生政策などを思い、日本の現実をみて外国教育学の受容・依存関係を考えさせられた内容を提出した。ただ、了承の上だが、若干軟化された。また、転換後の旧東独の一般現象である今世紀初頭の日本の「新教育」のことや、外国教育学の受容、転向、独自性などに関して山下徳治と千葉命吉を匂わせたためにその別稿を提案されているが、草稿段階のためまだ送っていない。休憩時に先のヒルデスハイムのケックから論文の別刷りをもらったが、小著ペスタロッ

チの読書論のことは Zeitschrift für Pädagogik と Paedagogica Historica の2誌に出た書評で知ってくれていた。

2. ドイツ教育学会：教育人間学研究会秋季大会「アイステーシス／エステティーク [知覚・美的感覚] (Aisthesis/Ästhetik)；1994年10月28－30日；ゲッチンゲン大 学社会科学部門教育学研究ホール

－教育学の審美的転回－

開催地のゲッチンゲンには、マールブルクから2時間、82年以来、資料さがし、学会大会、ゼミ参加、論文校閲でよく訪ねている。今回の参加は、夏のベルリンでヴルフ、レンツェン、リッテルマイアー、秋口のニュルンベルクでリートケと会っていて、かれらとは再会の形になった。大会テーマを「アイステーシス・エステティーク」[知覚・美的感覚]としたプログラムは、1) 知覚と感覚の一般問題 2) 認知と学習 3) 美学的問題で構成され、それぞれ4～5編、計13編の発表が約30人の参加者のもとでおこなわれた。資料としては発表者が自由ベルリン大学のヴルフの事務局に提出した20ページほどの各自の論文の新原稿ないし別刷が、参加者の手元に開催の約2週間前に郵送済みという徹底した方式だった。この「研究グループ」の教育学会での認知は93年と新しく、今回は、第1回がニュルンベルク大学のリートケを中心にその研究方向を裏書きする「人間学と進化－人間学と歴史－」のテーマのもとで開かれたあとの2回目、いかにも自由ベルリン大学やゲッチンゲン大学らしい理論的、審美的傾向が発揮されそうなテーマだった。

最初の発表者エーレンスベック (Y. Ehrensbeck) は、この大会テーマそのものを題目にし、80年代後半のポスト・モダンの教育理論のよってきたる方向をいわば「道具的理性」から「感覚的理性」への変容ととらえ、審美的経験を重視して先行諸説のレビューをした。これは自由ベルリン大学を中心にして展開する理論の最前線の意味づける習作ないし大会冒頭のオリエンテーリングともいえた。

『アガペー』は感覚的能力か－『エロース』とどうちがうか？－このような挑発的タイトルの論文を提出したコッホ (M. Koch) は、ハバーマスのいう「近代性危機にさいし登場するロマン主義という主体性の法悦」と、フーコーが『監獄の誕生』で取り出した近代客観性のもとでの身体機能の訓練ないし管理という指標の双方への疑念から出発した。そして、身体の言語化ないしその精神分析的再構成による子どもの発達 (クリスティヴァ) や、キリスト教的アガペーにたいする「聖なるエロース」(バタイユ) の視座で感覚的教育・形成力のディスコースを提示した。アガペーの象徴的身体化と、個別主体のリビドーがみせる「語る主体」への転化が説かれ、感覚によってこそ社会性、主体性、転移性のダイナミズムないし創造性が生み出されるとした。その点では、学習・形成過程は、一方で身体化された、それゆえにいわばアガペー化されたエロースと、他方で言語化された、いわばエロース化されたアガペーとのふたつのモードで展開する。この方向は、もう1題の「感覚はあいまいか－なぜアダムとイヴは認識の木の実を食べたか－」でパツィーニ (K. J.

宮崎：ドイツの教育研究の現況

Pazzini) が、マルクス、フロイト、ブーバーを利用した内容とも類似していた。

以上の3題には、自明の教育世界にある「経験」への安住にその理論的貧困を告げんとする面と、「経験」からの遊離をみる面との両面があろう。そのいずれもが若手の女性研究者の発表だった意味も大きい。ちなみに滞在中女性の教育研究者とはかなり多く接したが、この教育・研究のフェミニズムの興隆は、たとえば、自由ベルリン大学の講義要録にみられる女性問題関連の講義数が示す1988年夏学期で60題、1994年夏学期での100題という数値も端的なあかしとなろう。

上のような理論的先鋭化の一方で、図像研究もこの大会を特徴づけた。シュルツェ (Th. Schulze) の「描かれたまなざし」では、画家が自己をみつめていわば「描画の描画」行為をする自画像が分析された。画家が自分を鏡に写してキャンバスに制作するとき、画家としての「役割像」(Rollen-Bild)、自己をみつめる自分としての「自己像」(Ich-Bild)、そこに描かれる「自己肖像」(Selbst-Portrait) の、「みる－みられる－描かれる」の三角関係がある。いうならば、「みる」「自己像」と「みられ描かれた」「ポートレート」とは区別される。それを約40種の自画像、とくにデューラー、ヴェラスケスのほか、ゴッホ、ピカソ、クレーなどの作品や、写真肖像までとりこんで肖像から自己像への進展や、現代における自己像の解体にも言及した。この発表には「みつめ」や鏡像の把握の時代差、自画像とナルチシズムの心理要因、先行研究の検討の必要など、活発な意見がでた。また、これは、つとにかれが提起してきた「伝記研究」(1978)の延長線上の展開であり、教育哲学会などから出された近年のプロジェクト「教育学的自伝研究」に連なる方向であった。

なお、視感覚と絵画分析と関連では、「知覚の知覚」の題目で、若手のグリュシカ (A. Gruschka) が、カスパール・フリートリヒのよく知られた絵「リュケンの白亜紀の谷」(1818年) 1枚に限定して、そこにこの画家の伝記的事実、イコン的象徴、政治的アレゴリーの3点の読解を試みる発表をし、その心理構造と革命期やロマン主義の時代精神を浮き彫りにした。

視感覚の体験表現を学校建造物にたいする生徒の「みつめ」と「みえ」の反応としてとりあげたリッテルマイアーの発表「共通感覚－建築知覚を例にした人間学的、教育学的研究－」は、その方法のユニークさと考察の明晰さ、さらに現実へのその応用の提言で他と異なる肯定的な受容をされた。これは、かれの近業『学校を前むきにつくる－生徒は色と形をどう体験するか－』⁽⁹²⁾ (1994)の線上にあり、20秒間生徒に学校建造物をスライドでみせ、その眼球運動を測定し解析する方法をとっていた。その反応と評価のスケールは、学校建築という青少年の「生きられた空間」の尺度とされ、純心理学的でなくむしろ感覚的知覚の共通感覚性ないし審美性への現象学的かつ経験論的アプローチをすすめた。これにはヴルフが身体感覚の変容への歴史的接近をする「現象学と経験論からの研究」との重なりもあった。リッテルマイアーは、つとに生徒の体験の身体・心理的布置をふまえた、いうならば「こどもからの学校建築」を提言し、青少年に「夢の学校」図を描かせたりしている。現代の学校建築の主流ともいえる機能主義建築と、アルタナティーフなシュタイナー学校の印象を記述させ、後者の支持の高さを示した。かれはモレンハウアーとゲッチンゲンでの同僚、

教育史学会で古代・中世研究分野に所属、加えて現在では比較教育学誌「陶冶と教育」(Bildung und Erziehung)編集委員であり、審美的教育論、近代の検討と文化の相対化などその関心や方法論の手堅さは、解釈学的方法やポスト構造主義的立場とは異なる現象学的、心理学的手法を駆使して共通感覚の人間学的、教育的意味を探っている。

一個人の事項だが、10年来かれを知る筆者は1994年に上記の「陶冶と教育」誌の学校建築論特集に、日本での児童・生徒の評価資料の紹介やそのポスト・モダン傾向を重点にした報告的論文をもとめられた。しかし、日本の学校建築が、学校教育の行政、カリキュラム、方法などの中央集権的性格や機能的功利主義と同様、日本の教育の総括表現である点を強調した⁵⁴⁾。ただ、この小論は新チューリヒ新聞の学校建築特集で、ベルン大学(現在はチュービンゲン大学)のグルンダー(H. U. Grunder)の関心をさそい、たとえば、兵庫県出石町の出石小学校のように、町の景観としての学校と日本的「ポスト・モダニズム」との連関で、こどもの学校現実はともかく、「こどもに友好的な町」をみていた⁵⁵⁾。

3. ドイツ教育学会：教育哲学会秋季大会「形成の哲学」(Bildungsphilosophie)； 1994年10月5日～7日；フリーストリヒロダ(チューリンゲン)、山の上ホテル ーポストモダンの教育哲学ー

この大会の開催地フリーストリヒロダは、ゴータの西南約20キロ、18世紀汎愛派の拠点シュネプフェンタールとは5キロ、人口5千余の町である。会場を旧東独期に建てられ統一後民営化された「山の上ホテル」とし、参加者全員31名が宿泊して開かれた。発表者の所属大学は東・西各3大学、東の3人も西から転任者であり、参加者は40代前半の教授層から20代後半までと比較的若く、学会事務局があるマグデブルク大学のひとりの幹事以外は、全員旧西側のひとたちだった。このように発表者の所属先、出身地、年令層などは、ドイツ教育理論の現況を端的に物語り、そのイデオロギー関連ないし思想の分野に生じた歴史の見えざる跡、あるいは東西ドイツの断層を暗示していた。期間は3日間ながら、発表は6題、1題の発表に2時間をあて、学会というより研究会ないしコロッキウムのスタイルをとっていた。分野の特性か緊張感があり、質疑も活発だった。配布資料はなかったが、従来の慣行からしていずれ論文集として上梓される。

午後から始まった初日の発表者のふたり、ハッレ・ヴィッテンベルク大学のシェーファー(A. Schäfer)とドレスデン工業大学のニマイヤー(Ch. Niemeyer)は、ハンブルク大学と自由ベルリン大学からの転出組の若手教授である。前者の発表「個の教育ー理性、否定性、悲劇性のなかでー」は遅刻して前半を逸したが、後者にもそのラディカリズムは、題目「『なにものも真理でない。すべては許されている』ーニーチェの後期陶冶哲学の意味におけるその真理概念ー」で端的に示していた。かれは社会教育に照準を合わせてその理論の点検と転換を促し、ナトルプ、ノール、ナチズム、東独のそれを批判・拒否して、1970年代の教育理論におこったいわゆる「日常転回」を継承しつつ個人主義化を主張、「反省的社会教育」を提唱した⁵⁶⁾。ニーチェの『道徳の系譜学』の有名

宮崎：ドイツの教育研究の現況

な一句を題目に用いたように、陶冶ないし教養の否定的転換をむしろ肯定的に評価し、近代モダニズムの教育理論への反措定をした。これにはルソーの解釈家でもあるシェーファーが、近代の個人主義的陶冶理論を理性と否定性、それゆえの悲劇のあいだで揺れた展開としてとらえたのと呼応関係がある。

2日目に発表したヴィマー（K.-M. Wimmer）の提起も陶冶概念の解体ないし脱構築にあった。それは古典的、自然主義的な陶冶可能性、たとえば陶冶と素質・才能を前提とする従来の教育学がみせる、いうならば「勇気づけと希望」を拒否し、実体と自律の自己陶冶ないし教養の概念を解体的に構築するディスクールである。ただ、そこでの近代性の断念は、近代教育への死亡通告ではなく、むしろ陶冶の「所有」（Habe）で成立する教育学を超えた陶冶の「所与」（Gabe）、フレーベル的にいえば「恩物」の再構成への提言にあり、発表タイトルを「陶冶という所与」とするゆえんである。したがって、発表者の主張は、ヘーゲルが意識で、ヴィトゲンシュタインが言語で展開した方向よりも、フロイトの精神分析の無意識とソシールの言語の「所与」のいずれをも受容するデリダの存在論的把握の方向にたち、教育学にとってのその意義は、主体性への教育や、個人（主義）的教育への反措定をしつつ個別的差異の再生をはかろうとするところにあった。そのかぎりではこれは60～70年代の反権威主義や反教育学にむけられた80年代の新保守主義的反動や、社会システム論のなかにある個人の疑似的社会化への抵抗でもあった。また、ヴィマーは一方で古典的伝統主義とそのヴァリエーションである陶冶と学習をめぐる「解放」の主張にレトリックをかぎとり、他方で現代の社会理論にある陶冶論の断念に、アナキズムのカムフラージュを警戒する。この発表と質疑もまた教育の現在のゆらぎの相をみせていた。

このヴィマーとは以前かれが自由ベルリン大学の研究員のときの旧知だが、いまはマグデブルクのマロツキのもとにあり、次年度からはハッレに移るという。いうならばかれはレンツェンの弟子として学位を取得、いま30代半ばで教授資格をめざしながら非常勤講師の身分で遍歴中の教育学の職人である。かれのようなケースは多く、そのために学会での後継者、若手育成の問題にもなっている。敢えて付言するが、1990年レンツェンがこのヴィマーを日本を研究対象にする志願者として推挙してきたとき、日本側の審査では承認されなかった。当然であろう。むこうが早すぎたというよりこちらが遅れすぎている。日本の教育学がここまでくるにはどれほどの年数を要するだろうか。

上の方向とハンブルクからきた次のコラー（Ch. Koller）の「リオタールかフンボルトか —（ポスト）モダンの条件下の陶冶概念の革新のために—」の方向とは、重複する部分があった。後者の場合、モダンの端緒に立つヴィルヘルム・フンボルトを現代のポスト・モダンのリオタールの前に連れ出していたからである。周知のように、フンボルトの陶冶概念には、その言語人類（間）学が根底にあり、言語と陶冶の双方の多元性、差異や個別性を浮き彫りにしたが、そこにコラーは、フンボルトとポスト・モダンとの類似性を指摘し、ことにフンボルトとリオタールが民族言語や外国語をめぐるメタ論議に係わるところにも注目した。

こうしたカラーの視点には、ドイツ的近代を現代から評価するものとして10に近い質疑を誘った。かれには、陶冶概念を言語論に還元する分析哲学的視角にくわえ、フンボルト的人文理想の産物である教養および教養主義的大学理念の今日における動揺、さらには旧東独圏にみられる通俗的かつ政策的な「フンボルト還り」の諸現象への歯止めないし抵抗があるともとれた。主体意識の自覚的形成や、客観化された文化価値の受容としての教養は、そのいわば獲得的成果からすれば、「所有」であろうが、そこでは主体なき時代における自己形成の可能的根拠の喪失と文化的客観性の統一性への懐疑に直面する。つまり教養は、イデオロギーと反イデオロギーの表裏両面をもちかねない価値と文化の多元化のなかで葛藤や紛糾をし、いうならば近代の終焉のまえでその行方を見出しかねている。たとえば、ペスタロッチ、ヘルバルト、フンボルトのごときドイツ古典主義の陶冶概念は、学習者に実体化された陶冶可能性を前提にし、自然主義的であっても存在論的根拠をもたなかった。ここに正統的な「陶冶」や「社会化」の理論への懐疑、自己教育の根拠の見出しがたさがある。なお、カラーのこの研究方向は、ドイツ教育学会若手研究者奨励賞(1996)の第2等をうけている。

陶冶概念の上のような哲学(史)的検討と批判の一方で、最終3日目には、それをテクノロジー、文明および情報社会からのインパクトとして検討する問題提起がつづいた。ダルムシュタットの若いオイラー(P. Euler)も陶冶の歴史的伝統の連続性を主張するのではなく、むしろそれを現代の社会・技術変動のまえにおきながらその救済の困難さを主題化した。文化的教養と文明的テクノロジーとの対立は、18世紀近代の啓蒙主義や人文主義のなかでも市民や国民に「トラウマ」(心傷)を与えてきた。この時期のヒューマンイズムの明るい展望とテクノロジーの必要とが訓育や職業教育上の鋭い背離をみせたのは、時代の寵児汎愛派の「闇の教育」(ルーチュキ)の場合やもろもろの矛盾を内包していた国民教育における支配と抑圧の構造化のなかにもみられる。その問題点はたとえばマルクスやフランクフルト学派の批判理論に至って明るみにだされたが、後者の近代意識はアドルノの場合のように、現代の陶治理論やその否定的弁証法にゆだねられた。オイラーの発表にも多くの論評や補足がだされ、理論-実践関連の究明や教育理論の学際的検討の必要性を垣間見せた。

最後の発表者、ケルンのメダー(N. Meder)は、ポスト・モダンとその教育の哲学的基礎づけのために、カントやヴィットゲンシュタインに依拠し、経験の超越性を現象学的にとらえてその基盤に言語ゲームの場面をみた。このルールにはいわば割り切れなさ、約分不能があり、認識でも倫理でもなく、いわば審美的契機がある。それゆえ、メディアとしての言語が教育形成の「理論」の基盤を提供するにすぎず、その規定不能性ゆえに「理論」やイデオロギーには原理的なあいまいさがつきまとう。そこには近代というプロジェクトの挫折と道徳的技術的主体の、いうならば全能という幻想の挫折とが重なりあう。残るのは、情報と言語ゲームの操作、シュミレーションにすぎない。この発表でも、内在的批判や補足要求などが9人から出された。確認された共通点は、主体なき時代や制度化されたコンフォーミズムのなかにあって、教育学の脱構築の必要ということだった。

中日の昼食後、往きは山ごえの小1時間の徒歩で、かえりは電車を使って、シュネプフェンター

宮崎：ドイツの教育研究の現況

ルを見学するプログラムがあった。汎愛派の教育施設として1784年に設立され、旧東独期の全寮制統一学校から統一後はギムナジウムになったザルツマン校のなかの記念室、「ハルトの森」の体操場、それに当時の活動家の墓所を訪ねた。記念室にはザルツマンとグーツ・ムーツを中心にアウスフェルト、カール・リッターなどの関係者を展示した2室があった。このギムナジウムの女性教員によるかなり専門的な説明があり、体操施設と墓所のほうはふたりの女生徒に案内された。学会の論議の方向とは別に、参加者はこのもてなしにそろって好感をもった。

4. ドイツ教育学会 幼児期教育学会秋季大会「こども研究－現代の人間学、教育、社会化の理論からみたこども研究－」(Kind-Forschung－anthropologische, bildungs- und sozialisationstheoretische Kindheitsforschung heute－) 1994年11月17日～19日：ドレスデン 三帝教会会議場－新旧両ドイツの研究断面－

この大会に出席したのは、次のような関心や事情からである。社会史が発掘するこどもの事実や、ポスト構造主義のこども理論、また、ルソーからシュタイナーなどにいたる並列的な系譜史や、幼児教育の規範的、ときに感傷的な目的論や、方法技術の偏重。これらの歴史的、心理学的なアプローチでその教育のアクチュアリティや、その理論的、国際比較的な場面は入手できるか、といった懐疑があり、反面では期待からである。加えて、個人的には、18世紀のルソーやペスタロッチとのとりくみもあった。さらには、1982年のブタペストでの国際教育史学会以来の知人で今回バンベルクから案内をくれたアーニヒ(G. Erning)に乞われて日本の幼児教育の図版資料を提供したりした経過。とりわけ、両独統一後のこの部会の活動報告にめだつ保育の現状への提言や勧告の多さ⁶⁶⁾。わが国でも例外でない研究か運動か、個別化か集団化かといった視点。しかもこれらが旧西独と旧東独の様相を示すものとして関心をもったからである⁶⁷⁾。

参加者はそのリストでは34名だったが、この学会の登録会員数もわずかに98名(1990年)である。この数値は、ドイツ教育学会会員数約1,400名(1994年)、日本教育学会と日本保育学会のその約3,000名と約3,300名(1994年)と比べれば興味深い。プログラムに掲載の14題のうち、主要メンバーのノイマンとハイランドの発表の取り消し、新規参加1件のように小規模で変則もみられ、さきの人間学の研究会や後述のベルリンでの幼児学習文化のシンポジウムのように、ペーパーの事前送付も発表資料もなかった。標記の設定テーマには、以下、教育の1)文化比較研究 2)歴史研究 3)原理的理論研究と3分できる特徴がみえた。

1)の発表では、長年のキブツ研究者チュービンゲン大学のリーグレ(L. Liegle)が、ユダヤ的共同体やコンミュニ的なキブツ・ユートピアが内包する私的契機の廃棄や個別利害の対立に直面して、母子関係やこどもの社会化に投げかけられている問題をさぐろうとした。しかもそれをもはや母子の「ソシオグラム」でなく、いうならば「バイオグラム」(生長記録)として提言した。母子関係がキブツの「政治化」で幼児の依存と自立にむしろ陰を落としているからである。幼児期の自然化よりも制度化に傾斜するキブツでは、鍛練や訓練が儀礼化され、かえってそれが新しい抑圧を

生み(ベルンフェルト)、その幼児期教育を学校教育に相対的に従属させていく。また、政治的ないわゆる左翼キブツでも、生活の経済効率の低下は否めず、心理的な不満や抑圧を高めている。これらが、近年のキブツ放棄者が50パーセントにも及ぶ実態の背景要因である。この発表後にでた質疑やピオニールへの言及でも、ヘドニズム、エコノミー、エゴイズムの壁の前でキブツなどが直面しているその集団的教育関係の変質が強調された。ちょうどそのころ、ブランシュヴァイク工業大学の宿舎で、隣室のイスラエルの若い工学研究者からそのキブツ体験をかなりシニックに聞かされた。

文化研究のもう1件は、ルーマニアの一地方にいるドイツ系住民の歴史人類学的調査だった(M. Niermann)。これはトルコ支配からルーマニアのチャウセスク体制までのドイツ出身の10家族がたどった幼・少年期、その言語、学校、家事、職業など、文化の日常を聞き取ったフィールド調査である。方法論的にはヴェバー・ケラーマンなどの民俗誌や人類学にも言及されていた。この発表は、異文化圏でドイツ人のマイノリティが直面している民族のアイデンティティの保持と抑圧の、東欧の転換後の事例だが、ロシアにも類例が問題化しているだけに参加者にはユニークなアクチュアリティをもっていた。

「幼稚園の教育活動の実態とその計画 -ふたつのドイツの比較- 」と題された発表は、その方法も帰結もありきたりだったが、その分反応もみられた。これは旧東ベルリンと、南ドイツの人口4万の町リンダウとの、旧東西ふたつの幼稚園の比較調査であった。それはカリキュラム研究、行動の心理・社会学的実証方法、共同研究方式、その目的と結果の政策への還元姿勢、ドイツ学術振興会(DFG)の研究費助成による実施、これらの5点でプロジェクト研究の典型といえた。そして東西両独の差は以下のように示された。

言語領域では、「読み書き」で僅差ながら東が高く、「語り」で西が高い。造型と音楽では近似し、体育は東が高かった。衛生とテーブル・マナーでは東が西を圧倒し、社会的態度では類似しながらも、コミュニケーションの積極性は西の方にあった。小学校の入学準備では近似したが、その知的準備ではむしろ東が高かった。集団作業では東が極端に高く、遊び活動では両者は類似した。宗教教育では西が明らかに多く、文化多様性への理解でも西が高かった。このような調査結果は、旧東西ドイツの社会体制のイデオロギー、社会構造、文化総体のなかで育った両親や保母養成の方向からしても、容易に想像できるし、理論的にも説明可能である。質疑では、近年東西両方で保育実践をした参加者から、調査結果で近似的とされた領域やその程度にも、たとえば独創性などは大差があり、集団主義や社会的性格をふくめその差異の解消には発表者のような楽観は容認しがたい、とする意見も出た。

2)の歴史研究では、フレーベルのこども像を年譜的に追跡した発表(E. Krieg)などのほか、ベルリンのペスタロッツ・フレーベル連合の女性教授ロスト(Chr. Lost)が「閉鎖社会のなかのこども像」を発表、フランケの教団教育施設、ツィンツェンドルフやペスタロッツの孤児院など、聖俗を問わぬ生活共同体^{グマインシャフト}にみられる日常の訓練化や合理化、加えてそのセンチメンタリズムなど、

宮崎：ドイツの教育研究の現況

こども施設一般が一種の「閉鎖的」コロニーに化すところでのこども像の限界に注意を喚起した。質疑では、それと旧東独の全体的制度化のなかのこども像との類似性や、教育ユートピアにひそむ閉鎖性が指摘された。かの女は、元来、旧東独出身の研究者で東ドイツ教育学会（DGfP）の会員だったが、それに批判的な行動を示し、いまは、西側での女性教育研究部会でも活動が目立つひとりである⁸⁸⁾。

3つの理論的内容の発表4題では、ウィーンからの発表者その他の乳児の行動とその世界表象の理解をめぐる研究の2題が、母子関係の精神分析的把握で共通していた。また、目をひいたのは、アウグスブルク大学からの男女2教授による「幼児期発達の神経生物学的な様相とその教育学的帰結」と「体系的社会化理論－乳幼児期のこども像はどうあらわされるか－」である。幼児の認知発達を重視する発表者シェーファー（G. E. Schäfer）は、知覚が予備的かつ内的に構造化され、環境と関係しながらも、学習を単に内から外への過程でなく、経験の広がりとし深まりとして個々の時間生起のもとで発達する経験の自己組織化ととらえた。この、単に心理学的接近であるより生きた経験の現象学的解釈には、経験の情緒次元や社会関係との関連の軽視だとする意見もでた。しかし、これには、かれは「情緒主義」として拒み、こどもの知覚の「窓」は、身体運動にもメディアにも解放された「進化理論」だとする立場をとった。かれは、今回の大会の幹事だが、ニュルンベルクのリートケが学会の人間学研究会やつとにその著書でもみせている歴史的な「社会進化論」を代表しているのに比し、自然の生物学的進化の解釈に近くたつ幼児教育の理論を指向している。このふたりに共通する「進化論」をひとは「南ドイツ派」といったりしている。もうひとり、マッハ（H. Macha）の場合は、その母子関係での乳幼児の社会化論は、文化の構造なかの世界像の統合をねらい、精神分析の導入もふくめて認知論的な偏向に抗し、男児と女児の性差を過度に強調する偏向に是正をもとめる発表をした。ちなみに、かの女もドイツ教育学会の女性教育研究部会の中心メンバーでもある。

驚いたのは、ベルリンでの9月の日独シンポジウム（後述 II 7.）で発表したドイツ青少年研究所のエルシェンブロアッハ（R. Erschenbroich）が、今回も同じビデオ『日本の育てと学習』⁸⁹⁾をもちこんだプログラムだった。かの女はいま、かつてイリイチやモレンハウアーも加わっていたベルリンの科学研究院にいるとのことだが、この大会でも、ドイツの子育てを念頭におきながら、日本のそれをこどもと母親、保母、教師との緊密な関係、社会階層差の少なさと教育水準の相対的な高さ、とりわけ児童・生徒の国際比較でいわれる「学力」の高さの背景を示そうとした。このビデオは、一方での日本社会の親子関係の緊密さや生活指導習慣（しつけ）、他方での学校における「社会文法」の習得の漸進的ステップと、学校集団に規定され推進される「より良い自分づくり」、この両方を日本の幼児期の学習文化の基盤とし、母子関係、保育所・幼稚園・学校の制度、教育の方法と内容、この3点の連関を軸に編集したと説明した。

映写中、ベルリンの場合と違って何度も笑い声が漏れたが、質疑では、ベネディクトやボーゲルの名が出て日本通の参加をうかがわせた。経済成長によるスエムラ（熊本県須恵村）の女たちの追

放や都市中間層の女性のいわば「母業」への囲い込みなどに懐疑的意見もでた。私は唯一ドイツ圏外で日本からの参加者として発言の場を設定され、日本の幼児期教育の「学校教育化」や、家庭の機能低下とその領分の縮小、受験・教育産業による中等学校の包囲、学校がその正統性と秩序のために生徒に課す集団的行事やさまざまなシンボルの使用、校則での生活と学習の統制や管理の強化、さらに学校における「社会化」の裏面での空前の不登校者と「いじめ」による自殺、これらの看過できない現実などをあげた。また、女性に母親の選択肢を強いて「母子家庭」を生みながらそれを日本的母型社会の文化特性としたり、あるいは「ポスト・モダン」とする歪曲すらなくはない、とのべた。つまりは、日本の幼児期教育の「あかるさ」を、学校の「くらさ」と社会の「おくれ」をみずしてクローズアップすることに反対した。96年のドイツ教育学会大会の統一テーマ「国家と市場の間にある教育」をもじっていえば、日本の学校と家庭には「国家と市場とに従属する教育」の実態がある。終って隣席のひとがこちらに「あれで、モーツァルトやピカソを生むつもりですか」とささやいた。鈴木メソッドのヴァイオリン教室の「まじめさ」や儀礼がかれにはカリカチュアと映ったからである。

5：ドイツ教育学会（DGfE）系秋季3大会の総会

－学会組織の形成とテーマ決定－

上の3つの大会の学会総会も興味深かった。教育哲学と幼児教育の部門は、正確に言えばドイツ教育学会に18ある研究委員会（Kommission）のひとつ、教育人間学の部門は3つの研究会（Arbeitsgemeinschaft）のうちのひとつである。研究の課題や方法の変動を反映して、たとえば、1990年では研究会だった「平和教育」「教育学的女性研究」「教育学と精神分析」のうち、最前者は解散、他のふたつと新たに加わった「教育組織、教育計画および教育法制」とはともに委員会に昇格、1994年6月現在では「教育人間学」「異文化教育」「メディア教育」が研究会から委員会入りへの昇格をまっている。

かかる研究会、たとえば「教育学の伝記研究」と「教育学と人間性心理学^{フマニタス・サイエンス}」の場合の成立過程を学会総会でみることができた。94年、教育哲学部門の春季大会で「人間性心理学」、今回の秋季では「教育学の伝記」の研究会が新規に提案され総会にはかられた。この後者の原型はシュルツェとバーケらが70年代末に組織した研究グループにさかのぼるが、以来、会合を数回開き、94年3月のドイツ教育学会大会では120名からなる特別集会をもち、今回、その理論と方法を確認する報告がマグデブルクのマロツッキやハッレのクリューガーに提起された。それは、教育史、幼・少・青年期の発達、学校研究、社会教育、成人教育などが、定性的分析方法や民俗学分野にも着眼して学際的な「伝記研究」に相互乗り入れをし、また、心理学的、社会学的な定量的分析方法やディルタイの系譜の従来の精神科学的教育学のいずれにも拘束されることなく、現代の幼児、少年や青年の日常をみする研究展望を入手しようとするところから生れた。これには、ポーランド、オランダ、ロシア、北欧諸国の研究との連携もめざし、94年7月現在では、176名が入会予定者リストに名を

宮崎：ドイツの教育研究の現況

よせている。

ただ、教育哲学会の総会の論議では、人間性心理学、学校カウンセリング、精神分析的サイコセラピーなどへの実用的、実践的な傾斜がある反面で、教育哲学の部会の組織の実情およびその理論には境界や落差があるのが懸念され、いわば「新・精神科学的教育学」への懐疑もあった。このため総会での人間性心理学と伝記研究との研究会設立申請は、挙手で賛否が問われ、前者は賛成2、反対13となり、後者は賛成17、反対2を対照的な輪郭をみせた。しかし、96年、双方は「環境教育学」とともに研究会として承認されている。

一方、教育人間学の総会は、モレンハウアー、リートケ、レンツェンなど名立たる多弁の士の集まりであった。実はこの研究会には、教育進化をめぐる歴史的、システム論的な立場をとるニュルンベルク・グループ（リートケ）、これと対立するポスト・構造主義的、ポスト・モダン的なベルリン・グループ（ヴルフ、レンツェン）、さらに後者に近くたちながらも、審美的、倫理的傾斜をするゲッチンゲン・グループ（モレンハウアー、リッテルマイアー）の、いわば南・北・中ドイツの三方向がみてとれた。次期の大会テーマの決定では司会者ヴルフは全員に発言を促し、世代問題、幼児文化、青少年文化、エコロジー社会、倫理学と人間学などがでたが、5人が提案した「世代の人間学」に決定、南独エアランゲンでの開催となった。ちなみに98年のドイツ教育学会大会のメインテーマは、「世代とメディア」である。

たしかに、哲学と人間学の両部門の発表にみる理論的先鋭性には留意を要するが、人間学部門のほうが哲学部門よりも実証的、歴史的、現実的であり、たとえば、リッテルマイアーにその典型をみることができる。日本でそれに不満をいうなら、展開のコンテクストを誤解しているか、講壇教育哲学の非力とも映ろう⁶⁰⁾。現代の教育理論の変容をポスト・モダンと総称し、学校、教育、こどもなどに貼られる「神話」にたいする「非神話化」の進行をいうその日本的受容にも検討すべき課題であろう。「近代のプロジェクト」の座礁や、その非神話化をいう論議には、日本の場合を近代という歴史的総体とその過程には異質で例外的とするごとき1930年代にあった前提が潜んでいたりしかねない。また、ドイツの戦後50年の文化・政治変動とそれと連動した教育学パラダイム、とりわけ批判的教育科学のそれを吟味せずにきた日本の講壇教育学がポスト・モダンをいうとき、プレ・モダンの日本的イデオロギーに転化しかねない。教育の政治化を忌避する近代の終焉論者は、逆に政治的教育化にすべりこむおそれなしとしない。この方向は「ヒトラーの教育学者」（ギーゼッケ）ボイムラーのみせた方向だった⁶¹⁾。歴史の対立概念である「神話」の「非神話化」は実在史への覚醒を意味し、その教育学パラダイムは単なる神学的、実存的層位にない。たとえばペスタロッツ研究などでは60年代と70年代の転換期にフランクフルト学派の批判理論の影響下で「政治的ペスタロッツ」（A.ランク）の教育者像は歴史的・解釈学的に「非神話化」（フレーゼ）された。ちなみに、96年生誕250年記念シンポジウムでのスイス側のガイドラインには神話化された啓蒙の両義性を克服せず、ナイーヴな共同体概念を設定する傾向もみえた⁶²⁾。

幼児教育部門の総会は、2時間にわたった。代表には5年来それを務めるK.ノイマンが再任された。かれは、ニーダーザクセン州の教育大学がゲッチンゲン大学に統合された結果、ヘルバルト以来のこの大学の伝統的名門の社会科学部門とは別組織だが、ギーゼッケなどと同じその教育学部門にいた。旧東独に近いかれの立場は、この大会前の10月に、ノールの後継ヴェーニガーの生誕100年記念行事に旧東独教育学アカデミーの元総裁ノイナーを招待講演者にした点、今回の大会で目立つ旧東独圏からの参加者、さらには国際的には国際教育史学会で常置されている幼児教育史のワーキング・グループのニュース・レターなどからもわかる。

ドイツ教育学会大会のシンポジウムや課題研究のテーマ聴取では「エリート、国家、市場のなかの早期教育」「こどもより所得か所有物としてのこどもか」「こどもの権利と権利としてのこども」などが出ていたが、最前者の「エリート」を「親」におきかえたものがこの部会として採択された。休憩時、ノイマンとアーニヒから、ドイツでの独一日フレーベル会議の日本側からの参加可能性を聞かれ、こちらは応えかねた。ただ、95年9月、広島でのペスタロッチー・フレーベル学会では採択され実行されていた。

隔年開催のドイツ教育学会大会では各部会がシンポジウムを開くが、理事会がそこに照会するその統一テーマは教育関心のありかや、研究の方向性を示すものとして興味深い。92年は「近代化と近代性危機のなかの教育科学」94年は「ヨーロッパの教育」96年は「国家と市場の間にある教育」だった。この96年の旧東独ではじめてのハッレでの大会に20近い部会から募った統一テーマとして、理事会の報告では37題がよせられた。そのなかには次のような提案がみられた。「市民権としての教育と市民義務としての教育」「文化の同質化と多様化」「教育の見識と専門化の功罪」「教育産業の支配と企業化する教育」「教育産業の独占形態のもとでのチャンスと危険」「エリートと能力」「教育体験と教育責任の空洞化」「知識汚染」、さらには「教師による政治指導か教育企業による営利相談か」「教師からエンターテナーへ」。以上のような案件にはヨーロッパ連合(EU)がもたらす国家による学校教育の根拠や境界の後退と経済の競争・市場化原理の浸透とが、青少年の教育・学習機会を分断し、教育おける国家と私人のすみわけが進行する現実がある。青少年はミュージック、アート、スポーツ、メディアの渦に巻き込まれ、その変容についていえば、学校一元化が後退して、教育のアクセントはいわば学校という「午前中の国家」から教育産業のもつ「午後の市場」へ移動している。国家の学校のパイプをとおして流されるイデオロギーは忌避されて、学校文化の正統性はゆらぎ、青少年は情報化された知識、サブカルチャー、スポーツに消費主義的に係わっていく。

6：ポツダム大学教育史講座主催；「レカーンの教師 ブルンス（H. J. Bruns）の没後200年記念研究コロキウム」（Wissenschaftliches Kolloquium anläßlich des 200. Todestages des Lehrers Heinrich Julius Bruns in Reckahn）1994年9月23～25日；レカーン（ブランデンブルグ）

－教育史研究大会と地域との連携－

9月23日、4ヶ月いたベルリン国際科学出合いセンターをあとにし、その南西80キロほどの小村レカーンに向かった。初旬、ポツダム大学教育史講座のシュミットが「ペスタロッチの『ボンナル村』のようなところに招待しよう」といつてくれていたその村の教師ハインリヒ・ユリウス・ブルンスの没後200年祭にでるためである。ブルンスは、ペスタロッチと同年の生まれ、ロヒョウのもとでプロイセン最初の学校教師であった。この村はロヒョウの旧領地であり、墓の在所でもある。この集まりは、教育研究者のみならずレカーンの学校、教会、学校博物館、その教師、牧師、なにより地域の住民とこどもたち、それに行政が参加してブルンスと村の歴史を回顧し再評価しようとするものだった。村のこどもとその教師や親にも金曜日の午後は教会での講演、演劇、墓参、コンサート、休業の土曜には学校でのスポーツ・レクレーション大会、日曜日午前中は近在のエキスカッションといったプログラムがくまれ東独の旧体制期の政治的なおしきせから解放されて、教会、学校、地域のひとびとの総出の観があった。このユニークな「教育史学会」のコンセプトはいかにもシュミットらしい。

もとはブルンスの学校であり、近年では92年まで保育所だったという建物が、最近、小さな学校博物館となり、その一室が19世紀末の教室の再現にあてられていた。早めに着いたために展示の案内をうけ、そのあと、4時からの教会での開会行事に臨んだ。

ブランデンブルク州ポツダム地区政庁の長官の冒頭のあいさつにつづいて、ふだんはノーネクタイでセーターか革ジャンパーのシュミットだが、この日は夫人同伴で正装してやってきた。そしてブルンスを現代にひきつけ、その新しさを以下のようにテーゼにし、コメントをつけた。教師ブルンスがみせたのは、1) 学校改革の試みであった。それはヘルバルト教育学の系譜に連なるゲッチェンゲンを飛びだしビーレフェルトに転じて実験学校^{ラッセル・シューレ}に関与し指導したフォン・ヘンティヒ（H.v. Hentig）に比せられる。2) 教育の近代化のための教育世論の喚起。そこには18世紀ベルリンの一大ジャーナリスト、フリートリヒ・ニコライ（F. Nicolai）などおおくの来訪者をよんだ。3) 教育出版物の流布。ドイツ各地で読まれた「こどもの友」（Der Kinderfreund）がその例である。4) 権威主義から離れた教師－児童関係の推進。「こどもをここに来させよう」がモットーだった。5) 教育方法における教え込みからの解放。それは、はなしことば中心のソクラテス的ともいえる教育法だった。6) こどもの覚醒、自己活動、自助のすすめ。それは150年先行していた「新教育」（Reformpädagogik）的な働きかけであり、ことばの原義におけるプラグマチックな行動的実践的なこども像をめざしていた。

平明さの確保に工夫のあとがあるシュミットのこの基調演説のあと、村の小学生がロヒョウ、ブ

ルンス、牧師、こども達の配役になった短い劇が簡素な教会堂をいっぱいにした100人ほどの会衆をまえに演じられた。かかる芝居は教育上の記念祭にはつきものであり、演劇は学校文化の総体を表現する。その直截さにおいては、2年後同じ教師ペスタロッチの生誕250年祭の開会行事としてチューリヒの^{シャウシェーデルハウス}大劇場で1,000人の招待客の前にひろげられた絵巻に劣っていなかった。劇がおわると、教会の南側の壁面にあるブルンスの墓にこれも少年少女達によってろうそくと花束が捧げられた。

2時間近い開会行事がおわって、有志だけが近くの森の小川のほとりに足を運んだ。そこには頭部と台座とが粗末なコンクリートで補修されたその丈1メートルほどの2段組の石柱がひとつだけ立っていた。ブルンスの名と生没年のうゑに「かれは一教師だった」と刻まれている。教師個人を顕彰する現存の記念碑として旧プロイセンで最古といわれる。そのもとに他の参加者と風貌も違う、正装した中年の男性3人が、もってきた鉢植えを捧げた。戻りの道、大阪に行ったというそのひとりから、かれらは兄弟、ロヒョウには直系のこどもはなかったが、その末裔にあたると聞かされた。その祖父の代まではこのレカーンに住んでいたのだが、旧東独時代にかれらの父親がその所有地を捨て西に移ったためにこの日はニュルンベルクからきたという。

かれらを含め、遠来の研究者たち30人ほどが、この集落にたった一軒の店である飲み屋に集まってきて夕食をとり談笑した。村での見聞は、領主アーナー、教師グリュフィがいるペスタロッチの『リーन्हルトとゲルトルート』の世界を彷彿させた。いま、ペスタロッチの「ノイホーフ」、ビルの村を訪ねても、巨大な工場も目に入るその現地でその作品の「ボンナル村」は想像しがたい。むしろこのレカーンの、道、農家、家畜、森、小川、墓場、学校、教会などのほうがその作品の村の残像をもっていた。また、そこにみられたのは、旧西ドイツにある規模や整いや豊かさからはとおい、安普請と粗末さ、無造作や汚れ、荒れ具合や放置状態など、旧東独の農村のリアリティだった。夜には教会堂で小さなコンサートがあった。

翌朝9時から、ロヒョウの往時の2階建てバロック風の城館、現在は小学校になっているその教室で研究コロキウムがはじまった。ブランデンブルクとベルリンの両州を中心に遠くはマールブルクやブレーメンから45名が参加した。かれらが、1870年までのほぼ100年間にドイツで約100万部の発行をみた「こどもの友」の1776年版のリプリントを、シュミットの解題つきで入手できたのも、この行事らしい工夫だった。6題の発表では、ブルンスとロヒョウとの関係、その「こどもの友」や民衆教化、啓蒙的聖職者の意味などが論じられ、たとえばミツェンハイム(P.Mittzenheim)のような旧東の年配の研究者から該博な説明をきけた。また、もとは旧東独教育学アカデミーで仕事をしていたが、いまはこの地区の学校評議員で、92年にはさきの学校博物館を開設したひと(O. G. Beckmann)が発表会場の2階部分の2室とロビーを使った十分調査された展示の説明をした。借出し古書の展覧もあり、その1時間近くもひとつの発表として聞き手を満足させた。午後には、旧東ベルリンの学校博物館の主任シュルツ(R. Schulz)の「ベルリン、ブランデンブルク

宮崎：ドイツの教育研究の現況

の学校博物館「ノスタルジーかそれとも昨日と今日の生きた出会いか」と題する問題提起があった。

実はこのシュルツには10日ほどまえにかれが責任者である旧東ベルリン地区の学校博物館を訪ねたとき、詳しい案内をうけ、何冊かの資料をえたり、少々の議論もしたので顔なじみだった。かれ自身も元教育学アカデミーの学校博物館部門にいたひとだが、そこでもかなり荒れた校舎の3階部分全体の数教室をつかい、660点の展示品があるとのこと、旧ドイツ民主共和国の色彩を残す面もあった。その一室の、100年前の教室を再現したコーナーで、小学校1年生10人ほどが館員の指導で前世紀風の筆記練習をしていた。これは「よく見よう、そしていっしょにやってみよう」の、いわゆる博物館教育の実例である。

ドイツ各地には教育関係のさまざまな博物館がある。これまでに次のようなものを訪ねたことがあった。大はニュルンベルクやベルリンの一般博物館の教育コーナ、ニュルンベルク大学でリートケがはやくから指導している大学の付属教育博物館、またかれを中心に毎年秋に学会を開いているバイエルン州イヘンハイムで独立建築をもつ学校博物館、小はマールブルクでヒアムス・ペーターブレーメン大学教授の私設の子ども博物館、有志がベルリンでゲシュタポの詰め所あとに作っている反戦博物館である。以上に共通するのは、見学者の青少年を過去へいざない、その現実を直視させる視点だった。博物館には一方に過去の美化や賛美、他方にその批判や反省があるなかで、双方ともイデオロギーと化す面もなしとしないが、青少年には歴史と切り離れた現在や未来のないことを学習させている。レカーンでの教室の再現をみたときも、そこにおかれていた6年生用の1枚の課題ペーパーには、知識としての過去と、現代の歴史意識にこどもなりに目覚めてほしいという願いのようなものが感じられた。

こどもに「教育史」を知らせ、かれらに「教育の現在」の問題点や課題を理解させようとする実践は、たしかにドイツでは進んでいる。合科ないし生活科ともいえるザッハウントーリヒト(Sachunterricht)の4年生用のある教科書(CVK-Sachbuch, 1980)には、ここ数世代の「学校教育史」を学ぶ設定も入っている。ベルリンの楽器博物館で、見学にきた小学生に教会から移設された古いパイプ・オルガンをアルバイトの音大生が弾いてみせたのに出会い、たまたまそこにいた中国人とともに一驚したことがあった。また、中等学校の生徒がブランシュヴァイクの市立博物館で豊富な展示と印刷物の資料でナチズムの過去を学習する光景に出会ったが、驚いたのはブーヘンヴァルトの元強制収容所内の旧東独的政治教育のための青少年宿泊施設の大きさだった。

今回、リートケをニュルンベルク大学に再訪したとき、かれが収集したコドヴィエッキなどの18世紀の図録資料を書庫でみせられ驚嘆したが、その収集の成功は着手の速さにあったといわれる。その講座も、最近大講座制となり、「教育人類学－歴史研究室」と改称された。かれは歴史や心理を進化の射程でとらえる南ドイツ派の代表格であり、ドイツ教育学会の人間学の部門でも論客ぶりを発揮している。最近では『文化行動学』(Kulturethologie, 1994)を編んだり、中・近世の聖職

者の制服調査をしたりで、その研究射程もまた長い⁶⁰⁾。その名著の『ペスタロッツ伝』はもう過去に置いてきた、といていたように、96年のチューリヒでのシンポジウムには、予告どおり欠席だった。95年に拡充された大学付属の学校博物館のために日本の学校用制服の提供を依頼され、帰国後、男女の中学・高校生用4着を送ったりした。

**7: ベルリン日独センター主催, ドイツ青少年研究所 (DJI) 協賛シンポジウム「学習文化の構築—日本の幼児期の比較展望—」(Founding the Culture of Learning—Comparative Perspectives on Japanese Childhood) 1994年9月12~14日
ベルリン日独センター
—教育の国際評価の戦略と視点—**

ベルリン日独センター (Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin) は、1988年に戦前の旧日本大使館が黒川紀章の設計で「再建」され、公称「ヒロシマ通り」をはさんで旧イタリア大使館とは対照的な豪華さをみせている。現代建築の展示場のごときベルリンでのその評判は復古的ジャパン・イメージのゆえにかならずしも芳しくない報道もあるが、ドイツにおける日本の文化戦略の拠点としてこのセンターがもつ位置は大きい。1994年度にこのセンターが主催したシンポジウム、セミナー、ワークショップ等のプロジェクトは、政治社会的テーマで6件、文化と人文科学部門で上記をふくめ4件、知的生産システムとテクノロジーについて2件であった。そのほか展覧会、日本語講座などを開き、独日協会の事務局もセンター内にある。

今回のシンポジウムは、発表15題、参加者42名、傍聴者約30名で開催され、日本側は発表者として山村賢明 (立教大学)、原ひろ子 (お茶の水女子大学)、宮林昭雄 (ヨーロッパ・ミノルタ) の3名、ほかに参加者6名がいた。ドイツ側の発表者はシューベルト (V. Schubert, マールブルク大学)、エルシェンブローアハ (ドイツ青少年研究所)、ハルダッハ・ピンケ (I. Hardach-Pinke, ドイツ青少年研究所) といった日本での滞在研究の経験者、それにクラブマン (L. Krappmann, マックス・プランク教育研究所)、アメリカからは日本でも知られているブロンフェンブレンナー (U. Bronfenbrenner, コーネル大学)、キャサリン・ルイス (C. Lewis, スタンフォード大学)、サラ・ブーコック (S. Boocock, ラートガス大学) などの講演・発表があった。発表には完備したペーパーが配布され、その言語は日米の場合は英語だった。ドイツ側の参加者には、フンボルト大学のシュリーヴァー (J. Schriewer)、一橋大学から自由ベルリン大学、そして東京のドイツ文化研究所に入ったイレネ・ハジャ・キルシュネライト (I. Hajiya-Kirschneireit) といった比較教育、日本学のひといた。なお、テーマのドイツ語表現は、「日独就学前学習文化」(Vorschulische Lernkultur in Japan und Deutschland) であった。

主催者側の日独センター事務局長 Brockdorff (T. G. Brockdorff) と、所員110名を擁するドイツ青少年研究所長 Richter (I. Richter) の挨拶のあと、オープニングには連邦議会議長にして比較教育学の女性教授 Rita・Jüssmuth (R. Süßmuth) が、あの歯切れのいい甲高

宮崎：ドイツの教育研究の現況

い声で1時間近い熱弁をふるった。かの女は1970年代以降の青少年の変化と家庭の変容に対して、もう過ぎ去った「ユートピア回帰」で解決するのではなく、おとなとこども、人間と社会の新たな関係の構築で対応するしかない。また、日独は経済と教育での単なる競争でなく、協力的競争関係を拡大すること、敵対像と壁を作るのではなく文化の内的コンタクトをもつこと、換言すれば日本社会の日常にみられる「ポスト・モダン」な規準への理解や18世紀ドイツ文化の開放性への再帰も取り込むこと、これらの必要を説いていた。

日本からの報告のうち、まず、原は現在の日本の保育所・幼稚園や家庭での幼児教育の特徴を経済構造に規定された集団適応と効率期待の日常をのべ、人口動態統計などを用いて記述的に説明した。一方、山村は「日本の三角形 ー家庭、学校および職場ー」を提起し、私的な家庭、公的な職場、私的、公的両面をもつ学校との三極でとらえた。そしてそこに侵入している亀裂や対立の緊張関係を受験体制で象徴させ、将来的にはその弛緩を示唆した。

こうした日本側の、社会学的な接近に比し、ドイツ側は歴史的、理論的な把握で特徴を示し、日本の文化特性や教育目的を浮き彫りにしようとした。ドイツ人の日本旅行記がみせる例のように日本人の知的好奇心の高さには一種の自負心と閉鎖性があり、日本の幼児への伝統的集団的な方向づけが、労働の勤勉さと集団内部に忠誠な倫理となる。それはいうならばサムライとサラリーマンに共通する心性の取り出しである(E. v. Hornstein, ジーメンス社)。また、幼稚園の学習文化が訓育的規範的方向づけとなるのは、「みんな」という「社会文法」とそのコマンド(命令)の機制による。それは集団への「^{コロニアリゼーション}とじこめ」だが、「儀礼化」させることで緊張と不満は解除される。真面目さ、おとなしさ、注意深さなどの幼児期の学習文化の特性は、実は、日本の女性、母親、保母に通底する女性的文化背景に支えられている(シューベルト)。このような日本人のパーソナリティの「社会化」は、クラップマンがベルリンの小学校低学年児の学習文化と認知的学習のエスノメトドロジーとしてみせた記述からすれば、決して開放的でも個別的でもなく、また、言語的認知や交流能力の発達を促すものではない。

ドイツ側の研究者が日本の学習文化に批判的なのに対し、アメリカ側の発表には日本側の発表者と参加者も事実おどろいたほどの肯定的評価がみられた。スタンフォード大学とラートガス大学のふたりの女性教授の場合、ひとりは、日本の小学校での教師・児童関係や仲間関係は友好、協力、活力、忍耐に満ち、集団生活での学習場面やその動機の高さなどを「教育における助けあいのモデル」と称賛した(ルイス)。もうひとりも、日、中、米、仏での近年の育児書の比較をとおして育児文化の差を摘出しながら、日本に欧米化への傾斜をみ、中国も時間の問題だとした。そして、育児文化の普遍化とその逆の土着的子育て論の後退を指摘していた(ブーコック)。

午後には、「日本のあまえと母性の危機」「調和の工夫 ー日本の幼稚園ー」「米日小学校教育における協調性、独創性および社会的統制」の3つのグループにわかれたワークショップがあり、上記のシューベルト、ルイス、邦訳『ドイツの子どもの社会史』の原著者でもあるハルダッハ・

ピンケが担当したが、わたしは「あまえ」テーマの部会にでた。シンポジウム全体の最後のプログラムは、『二つの世界の子どもたち』で日独で知られ、自身の生まれはロシア、国籍はアメリカ、夫人はイギリス人、精神的にはベルリン人だ、というBronfenbrennerの講演「現代社会における学習文化」で飾られた。たとえば、親の社会階層の上下とその学歴の長短とが、こどもの学習文化にもたらす効果は12歳までなら上層の高学歴層のほうがひくい。それだけにたとえば、TV視聴にも短期的には悲観論だが、長期的には楽観論をうちだした。教育関係は、たしかにサリヴァンのマザリング理論とともにトクヴィルのアメリカン・デモクラシーの歴史、さらにはヴィゴツキーの最近接理論にみられる活動経験の優先を視野にいれ、そこに学習文化の歴史的変容の連続と非連続、およびその比較可能性と差異化をあきらかにする必要、つまり「ヒューマン・エコロジー」が説かれた。

初日の午後には、ドキュメンタリー・フィルム「教育プロの母親 - 家庭と保育所で -」「生活づくり - 日本の幼稚園での行動 -」「グループと良いわたし - 小学1年生 -」全3巻の90分のうち、前二者1時間分が映された。これはドイツ青少年研究所のエルシェンブローアハとシュバイツァーがドイツ連邦文部省、ハーゲン放送大学ほかの後援、それに今回参加した数人の協力で制作され、ZDF(第二ドイツテレビ)でも放映された作品である。画面に登場して追跡されているのは、名前こそ出なかったが、松本市の鈴木メソッドのヴァイオリン教室、お茶の水女子大附属幼稚園、それに和光小学校だ、と分かった。保育所のセンセイの話し掛けや、給食などへのその細心の配慮、保育に「お茶!」を命じる男の子、家庭で大学出の母親がみせる育児と勉強の付き添い、おけいこと塾通いの世話などでの奮闘、一方そこでの父親の完全不在。ピアノからヴァイオリンまでの外国文化の旺盛な受容とその学習の技術化、ファッション化、さらには儀礼化。

幼稚園の集団中心の諸活動、スムーズに受容される転入児、盛んな園芸活動、給食。そこでのシツケ、セイケツ、ケイケン(敬虔)。入園率40人に1人という100年の伝統を誇る幼稚園。それがもつフレーベルの「恩物」への特別な関心やその職員室の書架にあるピアジェ、ピノキオ、マザー・グースなどの本。そこにはサムライ家族と現代上流階層とが共有する心性、仏教とキリスト教、近代とポスト・モダンの混在。生活の動と静のリズム、儀礼的行為のみごとな設定があった。

子どもたちは小学校に入って「勉強しよう! 遊ぼう! 友達つくろう!」とかけごえをあわせ、「わたしの学校、わたしの会社、わたしの国、わたしはその一部」をモットーにする。そこにあるのは生活科の活気のみなぎる学習、障害児と健常児との統合教育、運動会の教育プログラムにみられる村落的協調やサムライ的好戦のムードである。教室、体育館、運動場にみられる徹底的な集団アイデンティティ、「話し合い」の名目でのクラス優先のコンセンサス形成、「ハンセイ(反省)」という名の個人差・個別性の抑制のプロセス。これらは「よい自分とは集団のなかの自分だ」という日本の社会化のための準備であり帰結である。音楽や理科でも集団化された学習は暗唱・暗記に傾斜し、儀礼化され審美化すらされる。このフィルムのメタファーは、学校に必設の「プール」であっ

宮崎：ドイツの教育研究の現況

た。そこでの集団、水泳の技法とタイム測定、教師採用試験に必修の水泳、くわえて水そのものの洗淨・融解力。これらが日本の教育の力であると同時にその不可解さとする結びのナレーションが流された。

後日、このフィルムをハーゲン放送大学の比較教育研究者ディルガー（B. Dilger）に贈られた。みなおしてみてもこれを日本の教育の典型としたドキュメントの特徴と平均的日本像との乖離もなくはなく、むしろ室町期のモラエスの見聞記や現代の「シュピーゲル」誌のマスコミ報道に以て、感心の一方で、シニズムやエキゾチシズム、ライバル意識すらみる思いもした。

このビデオの「迫力」を裏打ちするかのように、日本の有名光学メーカーのヨーロッパ総支配人が、「経営サービスの基本スキル－多国籍企業の展望－」と題して事例を駆使したユーモア溢れる講演をした。その日本的経営サービスのスキルとは、欧米的な製品・技術サービスではなくて、ユーザーへのそれ、ことにユーザーの不満に着眼、その心理と行動に即応するそれである。この背景には、サービス精神の「態度」に「生き」、ユーザーとの「共生」をあたかも「人類的宗教」に比すべき「自然との共生関係」を維持しようとする日本文化があり、労働観がある。そしてこれを実現させうる基盤がこのシンポジウムでの発表やフィルムで示された日本の幼児期の教育であった。全体報告を担当したシュベルトは冒頭でこのマネジャーがいった「世界でベストな学校教育を受けたいなら、初等教育を日本で、中等教育は（自由な）ドイツで、高等教育は（競争させ、実力をつける）アメリカで受けるのがよい」という「名言」を引用した。このシンポジウムの結果は、水準の高さで有名なズーアカンプ新書となって予告どおり2年後に出た⁶¹⁾。

シンポジウム・テーマの英語と独語による表現もその差を微妙に示すが、クラップマンを除けばビデオもふくめてすべてが日本の教育文化を描いていた。そしてそれをドイツ側が批判的にとらえるなかに、全面肯定的なアメリカ側が審判に入るといった構図がみえ、日本の幼児期教育の讃歌が聞こえる設定だといわれかねない巧みさがあった。それによって文化戦略性をもつこの種の会議はそれなりに成功した。また、発表では、日本を分析するドイツ人研究者がいたのに比し、ドイツを対象にする日本人研究者がいなかったことは、議論の展開に限界をもちこんだ。その反響効果か、その週末の「ターゲスシュピーゲル」紙は1頁分に日本の学童教育をカラー写真つきで論評していた⁶²⁾。2年後そのプロジェクト主任ブレン（W. Brenn）に会ったとき97年は「日本の算数教育」だと聞かされた。

8. ドイツ生活救済連合精神障害者部門・連邦部局共催 シンポジウム「ドイツ語が話せてあたりまえか」（man spricht deutsch…）－外国国籍の精神障害の子とその親のためのマールブルク対話集会－、11月20～22日、マールブルク、同部門連邦本部センター
－教育運動の最前線－

ドイツ生活救済連合（Bundesvereinigung der Lebenshilfe）は障害者救済の法人組織だが、その

精神障害者部門の連邦本部は、マールブルクにある。過去に2年余りマールブルク大学にいたので、人口7万のこの町にはドイツ最大の点字図書館、視覚障害者の大学進学にドイツで最初に門戸をひらいたギムナジウム、さらにはマックス・プランク研究所の精神医学部門があることは知っていた。個人経験だが、1988年の半年間クラフキの紹介でサリドマイド薬害を中心にした障害者、健常者、外国人の三者の共同生活をめざす学生寮ビザルスキー・ハウスにいたことがある。

今回、上のセンターでの3日間の会合は、プログラムのテーマがドイツ語、トルコ語、イタリア語で書かれている特異なものだった。参加者リストでは、ボスニア、ギリシャ、イタリア、ポーランド、トルコなど外国籍をもってドイツに滞在するひとたち38人が集まった。障害をもつ乳幼児を同伴した母親や家族ぐるみの参加者も5組みられた。もちろん、ボンの連邦政府の行政関係者1名、この連合の3つの地方支部の代表6名、市民相談の活動家2名、助言者としてひとりの教育学教授が参加し、わたしは唯一ドイツ国外からの傍聴者だった。

近年の政府統計では、ドイツ滞在の外国籍の約5万人が心身障害者のための学校のクラスに、うち約1万人が精神障害の範疇にあるといわれている。かれらがもつ外国籍と障害という二重のハンディキャップは、その本人と家族のみでなく、ドイツ社会の問題の深さと課題の重さを示している。行政と法制の問題としても実態の統計的把握は一義的でない。外国人滞在者には、いわゆる出稼ぎ労働者（ガストアルバイター）のほかに、本国の政治事情による流入者や被追放者の家族もあり、近年そのいずれもが滞在とその延長の許可の入手で困難に直面している。とくにこれと関連する法制や障害者手当など社会福祉の問題としても、その外国人の本国と滞在地ドイツとの違いや格差への情報不足がかれらを困窮させることが多い。極端な場合、心身障害の認定の有無や差が、本国での徴兵検査への出頭義務やそれに反したときの法的処罰に及ぶ問題なども報告された。

また、行政調査の福祉統計と相談・研究機関の調査とのあいだにみられる実態把握の差も大きい。ことに後者の傾向として病理化や心理化に傾く問題点があり、そのいわゆる専門的分類の世俗化は、障害者の学習指導と自助形成の方向を抑えかねない。現状では、その救済は民間の教育相談や、その行政への仲介といったソーシャル・ワーク、外国人へのその母語での情報提供支援の促進が期待された。その一方でドイツ国内での多数派のトルコ系および本国が比較的先進的なイタリア系と、それ以外の滞在外国人とのあいだには、是正されるべき格差があり、そのためのネット・ワークづくりの重要さも確認された。また、外国人教育の方策で知られているクレーフェルトで行政とドイツ人の市民相談員の提携したモデルが注目されていた。一方、文化的な問題としては、家庭内の父母の役割と地位、世代間関係の断層、さらには宗教もかかわってかれら外国人の場の障害児への対応に生ずる差も大きい。ことに、学校教育の言語では母語とドイツ語の二重性が障害者には絶対的ともいえる加重となり、それが障害の判定の境界線上のこどもを統合教育よりも分離教育へ導き、あるいは分離されたコロニーに留める傾向も指摘された。最終日の決議には以上のほか、障害者教育の文化と言語上の問題の打開のために、外国人職員の雇用、親と教育関係者の研修機会の促進もうたわれた。この会議の様子は、会議第1日目の地方テレビやその翌日の新聞でも報道されていた。

9. ドイツ青少年研究所 (DJI) 主催 「転換するヨーロッパ：家族は今？ - 親の態度の東西比較-」 (Europa im Umbruch : Wo steht die Familie ? - Einstellungen von Eltern im Ost-West-Vergleich -) 1994年11月15日, ドレスデン 三帝教会会議

- 研究のヨーロッパ的視座と大学外広域化 -

1994年の国際家族年にあたって、ドイツでは関係団体の全国委員会が設立され、啓蒙、研究、運動などのための多くの会議や集会が、中央・地方行政、大学、協会、民間団体などの手で開催された。たとえば、連邦家族-高齢者省が発行して各地の公共機関で自由に入手できた250頁ほどの手帳のカレンダー欄にも約350件のプログラムが掲載されている。ちなみにその手帳の「世界の家族の姿」5件の写真のうちに日本があり、七五三の家族写真をのせ“kyoiku mama”[教育ママ]の見出しがついていた。

11月15日、ミュンヘンのドイツ青少年研究所がドレスデンでひらいた国際専門家会議「転換するヨーロッパ - 家族はいま -」も家族年行事のひとつであった。連邦家族-高齢者省大臣も代理出席したが、その2日後の新聞は、女性-少年省の28歳の女性大臣の誕生を報じていた。この会議は学会大会でなく、そのテーマと活動の総合的啓蒙、国際的提携などを重点にし、大学、放送、出版、政党、労組、教会、国際機関、財団、市民団体、フリー・ジャーナリストなどの分野の関係者、オランダ、フランス、ハンガリー、ポーランド、ロシア、スウェーデンからの発表者をふくめ、106名が参加したものだ。これを主催したドイツ青少年研究所は、30年の歴史と約110名の研究員をもつ非政府系法人であり、94年現在では、年間1,500万マルクの予算をもって100余りの研究プロジェクトをすすめている。

今回の会議はひとつの国際調査をめぐって展開された。ドイツ家族-高齢者省の助成金でドイツ青少年研究所の家族政策研究グループがすすめた調査「6歳以下子どもをもつヨーロッパの家族政策上の措置が及ぼす影響と評価の比較」⁶³⁾がそれである。調査は1991年4月から1992年9月の時期に同一の質問項目で東西両ドイツ、ポーランド、ロシア、ハンガリーの4カ国の約6,000家族を対象に行われた。スウェーデンはそれを簡略化したもの、フランスおよびオランダの場合はその2次調査のみにかかわった。そして、上記の参加国の調査担当機関の代表などがそれぞれ15~20分ほどコメントをつけた。

結果は、89、90年のドイツ、東欧、ソ連の転換後のヨーロッパ家族の変貌の実態をみせつけた。その衝撃性は、1968年の文化・社会「革命」につづいて90年の両独統一がもたらした危機と転換を訴えるものであり、いうならばかつての「父親なき社会」(A. ミチャーリヒ)をこえて、いまや「母親なき社会」「両親なき社会」への突入を示唆するものともとれた。こどもの教育にとって家庭と学校の同時的併存や、学校に仕える家庭のありかたなどは、一方での家族内の権威の崩壊や役割平等意識の浸透、女性の労働参加、他方での社会主義諸国にみられた教育の「国家独占」とそれへ

の反発によって崩れつつある。たとえば、教育休暇(Bildungsurlaub)にみられた家庭への公的援助は、スウェーデンでは廃止されたし、調査対象国でもその長い期間と少ない補助金といったアンバランスも生み、むしろ不満足感を高めている。

また、この調査で、3歳未満の家庭内養育は旧西独とハンガリーの約90パーセントが肯定し、逆に旧東独はそのほぼ半分であった。保育所通園の肯定率でも、旧東独は70パーセントだが、他は20～30パーセントの範囲内であった。ポーランドでは幼児を「社会主義の尼僧」に委託することをもはやよしとしない。家庭外に制度化された保育所への評価は逆に社会主義の旧東欧圏で低かった。したがって、就労促進のための制度的保育への期待は、むしろ男性側の楽観論であり、逆に女性はそれにはペシミスティックで、家庭での「内なる壁」に直面している。旧東独は旧西独よりも公的保育の機会恵まれ、その期待は高かったが、女性のキャリアはむしろ西よりも閉鎖的であり、その点で女性の懐疑と葛藤はむしろおおきい。

最後にドイツの2大政党の代表、グリューネ(みどりの党)の女性の有名な論客からニーダーザクセン州の女性省の大臣になったショッペ(W. Schoppe)らを壇上に迎え、2時間の討論会をもってこの1日だけの会議は終了した。実は、この保育への制度期待の高さが、家庭に社会ないし行政を侵入させ、家庭から両親を「逃亡」させている。オランダやスウェーデンの発表者が訴えたのは、社会経済的媒介による育児と保育の効果は限界にきていること、むしろ家庭内で役割分担をしようとするパートナーの新しい関係構築や、シングル・マザーの社会的ネットワークの方が重要であり、それが権威的近代家族のモダニズムの末期のあとのポスト・モダンの「子育て」の磁場を提供すること、であった。

参 考 文 献

- 1) Miyazaki, T. : Das ethnologische Probleminteresse Pestalozzis in seinen „Bemerkungen zu gelesenen Büchern (1785~1797)“ in : F.-P. Hager/D. Tröhler (hg.), Pestalozzi – wirkungsgeschichtliche Aspekte –, Neue Pestalozzi-Studien, 4, 1996, S. 265~275.
- 2) Miyazaki, T. : Japanisches Bildungswesen – Entwicklungen, Problemlagen, Perspektiven –, in : Niedersächsisches Landesinstitut für Fortbildung und Weiterbildung in Medienpädagogik (hg.) : Zukunftswerkstatt EXPO 2000 (in Vorbereitung)
- 3) Frankfurter Rundschau, 8. Sept. 1994.
- 4) 宮崎俊明 : 教育研究の国際化と批判的視点 – 西独 Marburg での経験を中心に –, 教育学研究 51-3, 1984, 308~317. : 同 : 西ドイツの教育学動向の断面 – 学会, 研究者・学校訪問, 教育学教育からみた –, 教育学研究, 54-4, 1987, 414~416.
- 5) 宮崎俊明 : 小著 Pestalozzi und seine Leküre のこと, 教育学研究 59-4, 1992, 545~546.
- 6) Oelkers, J. / Osterwalder, F. (hg.) : Pestalozzi – Umfeld und Rezeption –, 1995, S.184.
- 7) Depaepe, M. / Hans, V. C. : Using or Abusing the Educational Past? in : H. Gehrig (hg.) :

宮崎：ドイツの教育研究の現況

- Pestalozzi in China, 1995, p.51~62.
- 8) 宮崎俊明：図書紹介 ホーフ『ペスタロッチとその時代の性』(1987), 教育学研究, 56-2, 1989, 362~363.
 - 9) Deutsche Gesellschaft für Erziehungswissenschaft (hg.): Handbuch für Erziehungswissenschaftler 1994/95 -Verzeichnis der Institutionen und des Personals erziehungswissenschaftlicher Forschung und Lehre-, 1994.
 - 10) Jeismann, K.-E. u. Hillers, E. (hg.): Deutschland und Japan im Spiegel ihrer Schulbücher, 1982.
 - 11) Schroedel-Verlag : Deutsch, Texte für Primarstufe 2, 1978, S. 21.
 - 12) Ernst-Klett-Verlag : Geographie 5. u. 6. 1982 (1972), S.166 f.
 - 13) Tornipport, G. : Erwerbsarbeit und Hausarbeit, 1994.
 - 14) Deutsche Lehrer Zeitung, 2. Nov. 1994.
 - 15) Spiegel-Special : Welche Uni ist die best ?, 1993/3, S. 32 f.
 - 16) Forschung an den Freien Universität Berlin - Fachbereich Erziehungs- und Unterrichtswissenschaften -, 1993 ;
 - 17) FU Nachrichten, 1994/ 7, S. 10.
 - 18) Lenzen, D. : Reflektive Erziehungswissenschaft am Anfang des postmodernen Jahrzehnts oder why should anybody be afraid of red, yellow and blue ?. in : Zeitschrift für Pädagogik (Z.f.P) . Beiheft 29, 1992, S. 87 ;
 - 19) ders : Mythos, Metapher und Simulation, in : Z. f. P , 33, 1987/1, S.51.
 - 20) Wulf, Ch. (hg.) : Lust und Liebe, 1985 ; ders : Wörterbuch der Erziehung, 7. Aufl. 1989 ; ders : Theorien und Konzepte der Erziehungswissenschaft, 5. Aufl. 1990, (Französisch) ; ders u. Gebauer, G.: Mimesis. 1992, (Englisch)
 - 21) ders (hg.) : Einführung in die Pädagogische Anthropologie, 1994.
 - 22) Die Zeit, 3. April 1992 ; Mitteilungsblatt der DGfE, 1992, H. 5, S. 67 f.
 - 23) Kossakowski, A. : Abwicklung der Pädagogischen Wissenschaft, in : G. Buddin (hg.) : Weissbuch 3 -Bildungswesen und Pädagogik im Beitrittsgebiet, 1992, SS. 250 ff; Frankfurter Rundschau, 7. Juli 1990.
 - 24) Mitteilungsblatt der DGfE. 1996/14, S. 5f. ; Kuckarz, M./Lenzen, D.: Daten zur Stellensituation und zu den Chancen des wissenschaftlichen Nachwuchses in der deutschen Erziehungswissenschaft, in : op. cit., 1994/9, S. 130.
 - 25) Friedrich, F./Springer, S. (hg.): Pestalozzi-Gesamtausgabe auf CD-ROM, 1994.
 - 26) Sontagsbeilage des Tagesspiegels, 3. Juli, 1994.
 - 27) Dejung, E. : Zur Problematik bisherigen Pestalozziforschung, in : Pestalozzianum, 1980/4, 21~25.
 - 28) Gehrig, H. u. a. : Zur Geschichte und zum gegenwärtigen Stand der Gesamtausgabe der Werke und Briefe Pestalozzis, in : Neue Pestalozzi-Blätter, 1, 1995/ 1, S. 8~13.
 - 29) Pestalozzianum : Infos und Akzente - Tätigkeitsberichts -, 1994, S. 6~8.

- 30) Adam, H./Eichler, W. ;Versäumnisse und Chancen, 1990.
- 31) Eichler, W. : Zur methodologischen Diskussion in der DDR –Pädagogik während der Zweiten Hälfte der 80 er Jahre, in : Cloer, E./Wernstedt, R. (hg.), Pädagogik in der DDR – Eröffnung einer notwendigen Bilanzierung, 1994, S. 107.
- 32) Konsultation- und Informationszentrum an APW der DDR (hg.) : Ad Hoc – Information und Diskussion zu Bildungsfragen, 1990ff.
- 33) Zeitschrift für Pädagogik, 1996/ 3, S. 44.
- 34) Benner, D. (hg.) : Erziehung/Bildungstheorie/Normative Pädagogik –Versuch einer deutsch-deutschen Annäherung, – 1991, S. 29ff
- 35) Pädagogisches Landesinstitut Brandenburg (hg.) : Schulstruktur und Schulentwicklung, H. 2, 1992, S. 34.
- 36) Pädagogisches Landesinstitut Brandenburg (hg.) : Fortbildungsprogramm für Lehrerinnen und Lehrer im Land Brandenburg, Jan. ~Juni 1993. OJ.
- 37) Comenius-Zentrum beim Interdisziplinären Institut für Wissenschaftsphilosophie und Humanontogenetik der Humboldt Universität und Arbeitsgemeinschaft Bildung und Lebensgestaltung : Engagement für Lebensbildung, 1992 ; ders : Lebensgestaltung als Bildungsaufgabe und Unterrichtsfach, 1993. Pädagogisches Landesinstitut Brandenburg : LER, N. 9, 1993.
- 38) Ministerium für Bildung, Jugend und Sport Land Brandenburg (hg.) : 2. Kolloquium zum Projektprogramm „Geschichte, Struktur und Funktionsweise der DDR-Volksbildung“, 1994.
- 39) Wissenschaftsforum Bildung und Gesellschaft (Wifo) (hg.) : Bildung und Gesellschaft vor neuen Herausforderungen, 1991.
- 40) Wifo (hg.) : Forschung zu. Berufsbildung, 24, 1990, S.156~165. Wifo (hg.) : Bildung und Gesellschaft vor neuen Herausforderungen, 1991.
- 41) Frankfurter Rundschau, 27. Okt. 1994.
- 42) Schiller, J : Schülerselbstmorde in Preußen –Spiegelungen des Schulsystems?– 1992.
- 43) Neuner, G. : Pädagogik zwischen Allmacht und Ohnmacht, in : Marx-Engels Stiftung e. V. (hg.) : Marxistische Menschenbild –eine Utopie?–, 1993.
- 44) Neuner, G. : Sozialistische Persönlichkeit –ihr Werden, ihre Erziehung–, 1975, S. 9. ; ders (hg.) : Erziehung sozialistischer Persönlichkeiten –Erfahrungen und Erkenntnisse der 2. Konferenz der Pädagogen sozialistischer Länder–, 1976, S. 254 ; ders : Politisch-idealistische Arbeit und Erziehung–Sitzungsberichte der APW–, 1978, SS. 12, 25 ; ders : Die Zweite Geburt –Über Erziehung im Alltag–, 1977.
- 45) Neuner, G. : Allgemeinbildung –Konzeption/ Inhalt/ Prozess–, 1989, S. 12.
- 46) Neuner, G. : Kontinuität und Transformation Klassischer Bildungslehre im DDR- Bildungswesen, in : D. Hoffmann/ K. Neumann (hg.) Erziehung und Erziehungswissenschaft in der BRD und der DDR, Bd. 1, 1994.
- 47) Dakan des FB Erziehungswissenschaften der Univ. Göttingen (hg.):E. Weniger zum 100. Geburtstag, 1994 (unveröffentlicht).

宮崎：ドイツの教育研究の現況

- 48) Habermas, J.: Der Philosophische Diskurs der Moderne, 1985, S. 130.
- 49) Nietzsche, F.: Autobiographisches aus den Jahren 1856 bis 1869. in: Nietzsche Werke III (Ullstein Buch), 1976. S. 861.
- 50) Schule Schloß Salem: Salemer Heft Nr. 56, 1984, 185.
- 51) O. N. (hg.): „Damit es an gehalten Leuten in unseren Landen nicht Mangel gewinne“ – Schulpforta 1543~1993; Pfortner Band e.V. (hg.): Die Pforte, 1993; ders (hg.): Pforta, 1993.
- 52) Miyazaki, T.: Magdeburg – ein Ort geistiger Vermittlung zwischen Ost und West –, in: UNI-REPORT Magdeburg, Feb/1995, S. 8 f; in: ders: Böttcher, L./Golz, R.(hg.): Reformpädagogik und pädagogisches Reformen in Mittel- und Osteuropa, 1995, S. 308~310.
- 53) Rittelmeyer, Chr.: Schulbau positiv gestalten, 1994.
- 54) Miyazaki, T.: Schulbau und Schulbaudiskussion in Japan, in: Bildung und Erziehung, 49, 1994/1, S. 19~28.
- 55) Neue Züricher Zeitung, 5. Mai 1994.
- 56) Niemeyer, Chr.: „Sozialpädagogik“, in: O Lenzen (hg.), Pädagogische Grundbegriffe, Bd. 2, 1994, S. 1416ff.
- 57) Neumann, K.: Mitteilungsblatt der DGfE, 1990/2, S. 134ff, ibid, 1991/3, S. 51ff., 1992/4, S.57., 1994/8, S.60ff. ;
- 58) DGfE (hg.), Erziehungswissenschaft, 9, 1994, S. 48ff, S. 35ff..
- 59) Elschenbroich, D./Schweitzer, O. (hg.): Aufwachsen und Lernen in Japan, 1994.
- 60) 藤川信夫, 80年代ドイツ教育学におけるポスト・モダンの受容, 教育学研究, 60/4, 1993, 344.
- 61) 鈴木晶子: フィクションとしての近代教育, 現代思想 24-7/1996, 158~167.
- 62) Elschenbroich, D.: Anleitung zur Neugier – Grundlagen japanischer Erziehung –, 1996.
- 63) Liedtke, M. (hg.): Das Schulmuseum – Schulgeschichtliche Anspruch und die Probleme der Museumstechnik und Museumspädagogik –, 1989.
- 64) Der Tagesspiegel, 18. Sept. 1994.
- 65) Deutsche Jugendinstitut e. V. (hg.), Auswirkungen und Einschätzungen Familienpolitischer Maßnahmen für Familien mit Kinder unter 6 Jahren im europäischen Vergleich, 1990, S. 70 f; Bundesministerium für Frauen und Jugend: Frauen in der Bundesrepublik Deutschland, 1992; Geschäftsstelle der Deutschen Nationalkommission für das internationale Jahr der Familie: Familienreport, 1994.